

おせん

邦枝完二

青空文庫

虫^{むし}

一

「おツとツとツと。そう乗^{のり}出しちやいけない。垣^{かき}根^ねがやわだ。落^{おち}着^ついたり、落^{おち}着^ついたり」

「ふふふ。あわててるな若^わ旦^か那^{んな}、あつしよりお前^{まえ}さんでげしよう」

「叱^しッ、静^{しず}かに。――」

「こいつアまるであべこべだ。どっちが宰^{さい}領^{りやう}だかわかりやアしねえ」

が、それでも互^{たがい}の声^{こえ}は、ひそやかに触^ふれ合^あう草^{くさ}の草^はずれよりも低^{ひく}かった。

「まだかの」

「まだでげすよ」

「じれツてえのう、向^{むこ}う孺^{ずね}を蚊^かが食^くいやす」

「御^ご辛^{しん}抱^{ぼう}、御^ご辛^{しん}抱^{ぼう}。――」

谷中の感応寺を北へ離れて二丁あまり、茅葺の軒に苔持つきさやかな住居ながら垣根に絡んだ夕顔も白く、四五坪ばかりの庭一杯に伸びるがままの秋草が乱れて、尾花に隠れた女郎花の、うつつともなく夢見る風情は、近頃評判の浮世絵師鈴木晴信が錦絵をそのままの美しさ。次第に冴える三日月の光りに、あたりは漸く朽葉色の闇を誘って、草に鳴く虫の音のみが繁かった。

「松つあん」

「へえ」

「たしかにここに、間違いはあるまいの」

「冗談じゃござんせんぜ、若旦那。こいつを間違えたんじゃ、松五郎めくら犬にも劣りやさア」

「だつてお前、肝腎の弁天様は、かたちどころか、影も見せやしないじゃないか」
「御辛抱、御辛抱、急いちゃア事を仕損じやす」

「ここへ来てから、もう半時近くも経つてゐるんだよ。それだのにお前。――」

「でげすから、あつしは浅草を出る時に、そう申したじやござんせんか。松の位の太夫でも、花魁ならば売り物買ひ物。耳のほくろはいうに及ばず、足の裏の筋数まで、読

みたい時に読めやすが、きょうのはそうはめえりやせん。半時はおろか、事によつたら
 いつときふたとき、垣根のうしろにしゃがんだまま、お待ちんなきやいけません
 と、念をお押し申した時に、若旦那、あなたはほんと仰しやいました。当時、江戸の三
 人女の随一と名を取った、おせんが肌が見られるなら、蚊に食われようが、虫に刺さ
 れようが、少しも厭うことじやアない、好きな煙草も慎むし、声も滅多に出すまいから、
 何んでもかんでもこれから直ぐに連れて行け。その換りおれは二分まではずもうし、羽織
 もお前に進呈すると、これこの通りお羽織まで下すつたんじやござんせんか。それだの
 に、まだほんの、半時経つか経たないうちから、そんな我儘をおいしいなさるんじや、
 お約束が違いやす。頂戴物は、みんなお返しいたしやすから、どうか松五郎に、お
 暇をおくんなさいやして。……」

「おつとお待ち。あたしや何も、辛抱しないたいやアしないよ。ええ、辛抱しますと
 も、夜中なろうが、夜が明けようが、ここは滅多に動くンじやないけれど、お前がもし
 か門違いで、おせんの家でもない人の……」

「そ、それがいけねえというんで。……いくらあつしが酔狂でも、若旦那を知らね
 え家の垣根まで、引つ張つて来る筈ありませんや。松五郎自慢の案内役、こいつばか

りや、たとえ江戸がどんなに広くツても——」

「叱ッ」

「うッ」

帯おびははやりの呉ご紹しょうであろう。引ひッかけに、きりりと結むすんだ立たち姿すがた、滝たき縞じまの浴衣ゆかたが、
いっそ背丈せたいをすつきり見みせて、颯さつと簾すだれの片陰かたかげから縁先えんさきへ浮うき出でた十八娘むすめ。ぽつんと一
本咲ぼんきき初はじめた、桔梗ききようの花はなのそれにも増まして、露つゆは紅べにより濃こまやかであつた。

明和めいわ戌いぬ年とし秋あき八月がつ、そよ吹ふきわたるゆうべの風かぜに、静しずかに揺ゆれる尾花おはなの波路なみじ。娘むすめの手か
ら、団扇うちわが庭にわにひらりと落おちた。

二

顔かおを掠かすめて、ひらりと落おちた桔梗ききようの花はなのひとひらにさえ、音おとも氣遣きづかう心こころから、身動みうごき
ひとつ出来できずにいた、日本橋にほんばし通と油町あぶらちようの紙問屋かみどんや橘屋徳兵衛たちばなやとくべえの若旦那わかだんな徳太郎とくたろう
と、浮世絵師うきよえし春信はるのぶの彫工ほりこう松五郎まつごろうの眼めは、釘着くぎづけにされたように、夕顔ゆうがおの下したから離はなれ
なかつた。

が、よもやおのが垣根の外に、二人の男が示し合せて、眼をすえていようとは、夢想も
 しなかつたのであらう。娘は落ちた団扇を流し目に、呉縞の帯に手をかけると、廻り燈
 籠の絵よりも速く、きりりと廻つたただずまい、器用に帯から脱け出して、さてもう一
 廻り、ゆるりと廻つた爪先を縁に停めたその刹那、俄に音を張る鈴虫に、浴衣を肩か
 ら滑らせたまま、半身を縁先へ乗りだした。

「南無大願成就。——」

「叱ッ」

あとには再び虫の声。

京師の、花を翳して過す上臈達はいざ知らず、天下の大將軍が鎮座する江戸八
 百八町なら、上は大名の姫君から、下は歌舞の菩薩にたとえられる、よろず吉
 原千の遊女をすぐつても、二人とないとの評判娘。下谷谷中の片ほとり、笠森
 稲荷の境内に、行燈懸けた十一軒の水茶屋娘が、三十余人束になろうが、縹
 緞はおろか、眉一つ及ぶ者がないという、当時鈴木春信が一枚刷の錦絵から、子
 供達の毬唄にまで持て囃されて、知るも知らぬも、噂の花は咲き放題、かぎ屋のお
 せんならでは、夜も日も明けぬ煩惱は、血氣盛りの若衆ばかりではないらしく、

何^{なに}ひとつ心願^{しんがん}なんぞのありそうもない、五十を越^こした武家^{ぶけ}までが、雪駄^{せった}をちやらちやらちやらつかせてお稲荷^{いなり}詣^{もつ}でに、御手洗^{みたらし}の手拭^{てぬぐい}は、常に乾^{つね}くひまとてないくらいであつた。

橘^{たちばな}屋^やの若旦那^{わかだんな}徳太郎^{とくたろう}も、この例^{れい}に漏^もれず、日^ひに一度^どは、判^{はん}で捺^おしたように帳^{ちよう}場^ば格子^{こうし}の中^{なか}から消^きえて、目指^{めさ}すは谷中^{やなか}の笠森^{かさもり}様^{さま}、赤^{あか}い鳥居^{とりい}のそれならで、赤^{あか}い襟^{えり}からすつきりのぞいたおせんが雪^{ゆき}の肌^{はだ}を、拝^{おが}みたさの心願^{しんがん}に外^{ほか}ならならなかつたのであるが、きようもきようとして浅草^{あさくさ}の、この春死^{はるし}んだ志道軒^{しどうけん}の小屋前^{こやまえ}で、出會頭^{であいがしら}に、ばつたり遭^あつたのが彫工^{ほりこう}の松五郎^{まつごろう}、それと察^{さつ}した松五郎^{まつごろう}から、おもて飾^{かぎ}りを見るなんざ大野暮^{おおやぼ}の骨^こ頂^{うちよう}でげす。おせんの桜湯飲^{さくらゆの}むよりも、帯紐^{おびひも}解^といた玉^{たま}の肌^{はだ}が見^みたかアござんせんかとの、思^{おも}いがけない話^{はなし}を聞^きいて、あとはまつたく有頂天^{うちようてん}、どこだどこだと訪^{たず}ねるまでもなく、二分^ふの礼^{れい}と着^はいていた羽織^{はおり}を渡^{わた}して、無我夢中^{むがむちゆう}は、やがてこの垣根^{かきね}の外^{そと}となつた次第^{しだい}——百匹^{ひゃく}の蚊^かが一度に臍^{すね}にとまつても、痛^{いた}さもかゆさも感^{かん}じない程^{ほど}、徳太郎^{とくたろう}の眼^めは、野^や犬^{けん}のようにすわつていた。

「若旦那^{わかだんな}」

「黙^{だま}つて。——」

「黙^{だま}ってじやアござんせん。もつと低^{ひく}くおなんなすつて。――」

「判^{わか}つてるよ」

「そんならお速^{はや}く」

「ええもういらぬお接^{せつかい}介^{かい}。――」

おかた、縁^{えん}から上手^{かみて}へ一段降^{だんお}りて戸袋^{とぶくろ}の蔭^{かげ}には既^{すで}に盥^{たら}が用意^{ようい}されて、釜^{かま}で沸^{わか}した行^ぎ水^{ようずい}の湯^ゆが、かるい渦^{うず}を巻^まいているのであろうが、上半身^{じょうはんしん}を現^{あら}わにしたまま、じつと虫^{むし}の音^おに聴^ききいつているおせんは、容易^{ようい}に立^たとうとしないばかりか、背^せから腰^{こし}へと浴衣^{ゆかた}の滑^{すべ}り落^おちるのさえ、まったく氣^きづかぬのであろう。三日月^{みかづき}の淡^{あわ}い光^{ひかり}が青^{あお}い波紋^{はもん}を大^{おお}きく投^なげて、白珊瑚^{しろさんご}を想^{おも}わせる肌^{はだ}に、吸^すい着^{つつ}くように冴^さえてゆく滑^{なめ}らかさが、秋草^{あきぐさ}の上^{うへ}にまで映^はえ盛^{さか}つたその刹那^{せつな}、ふと立^{たちあ}上^あったおせんは、颯^{さつ}と浴衣^{ゆかた}をかなぐり棄^すてると手拭^{てぬぐい}片手^{かたて}に、上手^{かみて}の段^{だん}を二段^{だん}ばかり、そのまま戸袋^{とぶくろ}の蔭^{かげ}に身^みを隠^{かく}した。

「あッ」

「たッ」

辱^{はじ}も外聞^{がいぶん}も忘れ果^{わす}てたか、徳太郎^{とくたろう}と松五郎^{まつごろう}の口^{くち}からは、同時^{どうじ}に奇声^{きせい}が吐^はきだされた。

三

「おせんや」

「あい」

「何んだえ、いまのあの音は。——」

「さア、何んでござんしょう。おおかた金魚を狙う、泥棒猫かも知れませんか」

「そんならいいが、あたしやまたおまえが転びでもしたんじやないかと思つて、びつくりしたのさ。おまえあつて、あたし、というより、勿体ないが、おまえあつてのお稲荷様、滅多に怪我でもしてごらん、それこそ御参詣が、半分に減つてしまふだろうじやないか。——縹緞がよくつて孝行で、その上愛想ならとりなしなら、どなたの眼にも笠森一、お腹を痛めた娘を賞める訳じやないが、あたしやどんなに鼻が高いか。：

：

「まアお母さん。——」

「いいやね。恥かしいこたアありやアしない。子を賞める親は、世間には腐る程あるけれど、どれもこれも、これ見よがしの自慢たらたら。それと違つてあたしのは、おまえに聞

かせるお礼^{れい}じやないか。さ、ひとつついでに、背中^{せなか}を流^{なが}してあげようから、その手拭^{てぬぐい}をこつちへお出^だし」

「いいえ、汗^{あせ}さえ流^{なが}せばようござんすから……」

「何を^{なに}いうのさ。いいからこつちへお向^むきというのに」

二十二で倅^{せがれ}の千吉^{きち}を生^うみ、二十六でおせんを生^うんだその翌^{よくねん}年^{ねん}、蔵^{くら}前^{まえ}の質^{しち}見^み世^{せい}伊^い勢^{せい}新^{しん}の番^{ばん}頭^{とう}を勤^{つと}めていた亭^{てい}主^{しゅ}の仲^{なか}吉^{きち}が、急^{きゆう}病^{びよう}で亡^なくなつた、幸^{こう}から不^ふ幸^{こう}への逆^{さか}落^{おと}しに、細^{ほそ}々^{ばそ}ながら人^{ひと}の縫^{ぬい}物^{もの}などをさせてもらつて、その日^ひその日^ひを過^すして早^{はや}くも十八^{ねん}。十八に家出^{いえで}をしたまま、いまだに行方^{ゆくえ}も知^しれない倅^{せがれ}千吉^{きち}の不^ふ甲^が斐^{はい}なさ^さは、思^{おも}いだす度^{たび}毎^{ごと}にお岸^{きし}が涙^{なみだ}の種^{たね}ではあつたが、踏^ふまれた草^{くさ}にも花^{はな}咲^さくたとえの文^{もん}字^じ通^{とお}り、去^き年^{ねん}の梅^{うめ}見^み時^じ分^{ぶん}から伊^い勢^{せい}新^{しん}の隠^{いん}居^{きよ}の骨^ほ折^おりで、出^ださせてもらつた笠^{かさ}森^{もり}稻^{いなり}荷^なの水^{みず}茶^{ぢや}屋^やが忽^{たちま}ち江^え戸^ど中^{ちゆう}の評^ひ判^{ぱん}となつては、凶^{きよう}が大^{だい}吉^{きち}に返^{かえ}つた有^{あり}難^{がた}さを、涙^{なみだ}と共^{とも}に喜^{よろこ}ぶより外^{ほか}に

なく、それにつけても持^もつべきは娘^{むすめ}だと、近^{ちか}頃^{ごろ}、お岸^{きし}が掌^てを合^あせるのは、笠^{かさ}森^{もり}様^{さま}では

「おせん」

「あい」

「つかぬことを訊くようだが、おまえ毎日見世へ出ていて、まだこれぞと思う、好いた
お方は出来ないのかえ」

「まあ何かと思えばお母さんが。——あたしやそんな人なんか、ひとりもありアしません
よ」

「ほほほほ。お怒りかえ」

「怒りやしませんけれど、あたしや男は嫌いでござんす」

「なに、男は嫌いといえ」

「あい」

「ほんにまア。——」

この春まで、まだまだ子供と思つていたおせんとは、つい食違つて、一つ盥で行
水つかう折もないところから、お岸はいまだにそのままのなりかたちを想像していた
のであつたが、ふとした物音に駆け着けたきつかけに、半年振で見たおせんの体は、
まったく打つて変わった大人びよう。七八つの時分から、鴉の生んだ鶴だといわれたくら
い、色の白いが自慢は知れていたものの、半年見ないと、こうも変わるものかと驚くばか
りの色つぼさは、肩から乳へと流れるほうずきのふくらみをそのままの線に、殊にあらわ

の波^{なみ}を打^うたせて、背^せから腰^{こし}への、白^{しろ}薩^{さつ}摩^まの徳^{とく}利^りを寝^ねかしたような弓^{ゆみ}なりには、触^{さわ}ればそのま^ま手^て先^{さき}が滑^{すべ}り落^おちるか^と、怪^{あや}しまれるばかりの滑^{なめ}らかさが、親^{おや}の目^めにさ^え迫^{せま}らずにはい^いなかつた。

嫌^{きら}いな客^{きやく}が百^{ひゃく}人^{にん}あつても、一^{ひと}人^{ひとり}は好^すきがあ^あろうかと、訊^きいて見^みたいは、娘^{むすめ}もつ親^{おや}の心^{こころ}であ^あろう。

四

「若^{わか}旦^{だん}那^な」

「何^なん^なとの」

「何^なん^なとの、じやアご^ござん^{ざん}せん^{せん}ぜ。あ^あの期^きに及^{およ}んで、垣^{かき}根^ねへ首^{くび}を突^つ込^こむなん^なぎ、情^{なさけ}な^なず^ずぎ^ぎて、涙^{なみだ}が^で出^でるじやアご^ござん^{ざん}せん^{せん}か」

「お^おや^やお^おや、こ^これは^はけし^しか^から^らぬ。お^ま前^えが腰^{こし}を^お押^おした^たか^から^らこ^こそ、あ^あん^んな^な態^ぎにな^なつ^つた^たん^んじ^じや^やな^ない^いか、そ^それを^{まつ}松^{まつ}つ^つあ^あん、あ^あた^たしに^にす^すり^りつ^つけ^けら^られた^たん^んじ^じや、お^おた^たま^まり^り小^こ法^{ぽう}師^しが^があ^あり^りや^やア^アし^しな^ない^いよ」

「あれだ、若旦那。あつしやア後にいたんじやねえんで。若旦那と並んで、のぞいてたんじやござんせんか。腰を押すにも押さないにも、まず、手が届きやアしませんや。――それにでえいち、あの声がいけやせん。おせんの浴衣が肩から滑るのを、見ていなすつたまでは無事でげたが、さつと脱いで降りると同時に、きやつと聞こえた異様な音声。差し詰志道軒なら、一天俄にかき曇り、あれよあれよといいもあらせず、天女の姿は忽ちに、隠れていつか盪の中。……」

「おいおい松つあん。いい加減にしないか。声を出したなお前が初めだ」

「おやいけねえ。いくら主と家来でも、あつしにばかり、罪をなするなひどうげしよう」

「ひどいことがあるもんか。これからゆつくりかみしめて、味を見ようというところで、お前に腰を押されたばかりに、それごらん、手までこんなに傷だらけだ」

「そんならこれでもお付けなんつて。……おとしまった。きのうかかあが洗ったんで、まるつきり袂くそがありやアしねえ」

「冗談いわつし、お前の袂くそなんぞ付けられたら、それこそ肝腎の人さし指が、本から腐つて落ちるわな」

「あつしやアまだ瘡氣の持合せはござせんぜ」

「なにないことがあるものか。三日にあげず三枚橋へ横丁へ売女を買いに出かけてるじゃないか。——鼻がまともに付いてるのが、いつそ不思議なくらいなものだ」

「こいつアどうも御挨拶だ。人の知らない、おせんの裸をのぞかせた挙句、鼻のあるのが不思議だといわれたんじや、松五郎立つ瀬がありやせん。冗談は止しにして、ひとつ若旦那、縁起直しに、これから眼の覚めるところへ、お供をさせておくんなさいまし」

「眼の覚めるところは。——」

「おとぼけなすつちやいけません。闇の夜のない女護ヶ島、ここから根岸を抜けさえすりやア、眼をつぶつても往けやさアね」

「折角だが、そんな所は、あたしやきようから嫌いになつたよ」

「なんでげすつて」

「橘屋徳太郎、女房はかぎ屋のおせんにきめました」

「と、とんでもねえ、若旦那。おせんはそんなまやさしい。——」

「おつと皆までのたまうな。手前、孫呉の術を心得て居りやす」

「損五も得七もありやアしません。当時名代の孝行娘、たとい若旦那が、百日お通いなすつても、こればかりは失礼ながら、及ばぬ鯉の滝登りで。……」

「まつ
松つ あん」

「へえ」

「かえ
帰つとくれ」

「えッ」

「あたしや何^なんだか頭痛^{ずつう}がして来^きた。もうお前^{まえ}さんと、話^{はなし}をするのもいやンなつたよ」

「そ、そんな御無態^{ごむたい}をいいなすつちや。——」

「どうせあたしや無態^{むたい}さ。——この煙草^{たばこ}入^{いれ}もお前^{まえ}に上^あげるから、とつとと帰^{かえ}つてもらいたいよ」

三日^{みかづき}月に、谷中^{やなか}の夜道^{よみち}は暗^{くら}かつた。その暗^{くら}がり^ををただ独^{ひと}り鳴^なく、蟋蟀^{こおろぎ}を踏^ふみつづす程^{ほど}、やけな歩^{あゆ}み^をを続^{つづ}けて行^いく、若旦那^{わかだんな}徳太郎^{とくたろう}の頭^{あたま}の中^{なか}は、おせんの姿^{すがた}で一杯^{いっぱい}であつた。

五

「ふん、何^なんて馬鹿^{ばか}氣^げな話^{はなし}なんだろう。こつちからお頼^{たの}み申^{もう}して来^きてもらつた訳^{わけ}じゃなし。わかだんなが手^てを合^あせて、たつての頼^{たの}みだというからこそ、連^つれて来^きてやつたんじゃねえか、若旦那^{わかだんな}が手^てを合^あせて、たつての頼^{たの}みだというからこそ、連^つれて来^きてやつたんじゃねえか、

そいつを、自分からあわてちまってよ。垣根の中へ突んのめったばかりに、ゆっくり見
 物出来るはずのおせんはだかの裸がちらツときやのぞけなかったんだ。——面白くもねえ。
 それもこれも、みんなおいらのせえだツてんじや、てんで立つ瀬がありやしねえや。どこ
 の殿様がこさえたたとえか知らねえが、長い物にや巻かれるなんて、あんまり向うの都
 合が良過ぎるぜ。橘屋の若旦那は、八百蔵に生き写しだなんて、つまらねえお世辞
 をいわれるもんだから、当人もすつかりいい氣になつてゐるんだろうが、八百蔵はおろか、
 八百屋の丁稚にだつて、あんな面があるもんか。飛んだ料簡違いのこんこんちきだ」
 誰にいうともない。独言ながら、吉原への供まで見事にはねられた、版下彫の松
 五郎は、止度なく腹の底が沸えくり返つてゐるのであろう。やがて二三丁も先へ行つてし
 まつた徳太郎の背後から、浴びせるように罵つていた。

「おいおい松つあん」

「えッ」

「はッはッは。何をぶつぶついつてゐるんだ。三日月様が笑つてゐるぜ」

「お前さんは。——」

「おれだよ。春重だよ」

うしろから忍ぶようにして付いて来た男は、そういいながら徐ろに頬冠りをとったが、それは春信の弟子の内でも、変り者で通っている春重だった。

「なアんだ、春重さんかい。今時分、一人でどこへ行きなすった」

「一人でどこへは、そつちより、こつちで訊きたいくらいのもんだ。——お前、橘屋の徳さんにまかれたな」

「まかれやしねえが、どうしておいらが、若旦那と一緒だったのを知ってるんだ」

「ふふふ。平賀源内の文句じゃねえが、春重の眼は、一里先まで見透しが利くんだから。お前が徳さんとこで会って、どこへ行つたかぐらいのこたア、聞かねえでも、ちゃんと判つてらアな」

「おやツ、行つた先が判つてるツて」

「その通りだ、当てやろうか」

「冗談じゃねえ、いくらお前さんの眼が利いたにしたって、こいつが判つてたまるもんか。断つとくが、当時十六文の売女なんぞ、買いにいきやアしねえよ」

「だが、あのざまは、あんまり威張れもしなからう」

「あのざまア何よ」

「垣根^{かきね}へもたれて、でんぐる返し^{かえ}を打^うったぎまだ」

「何^なんだって」

「おせんの裸^{はだか}を窺^{のぞ}こうツてえのは、まず立派^{りっぱ}な智恵^{ちえ}だがの。おのれを忘^{わす}れて乗出^{のりだ}した挙句^{あげく}、垣根^{かきね}へ首^{くび}を突^つつ込^こんだんじや、折角^{せつかく}の趣向^{しゅこう}も台^{だい}なしだらうじやねえか」

「そんなら重^{しげ}さん、お前^{まえ}さんはあの様子^{ようす}を。——」

「氣^きの毒^{どく}だが、根^ねこそぎ見^みちまつたんだ」

「どこで見^みなすつた」

「知^しれたこつた。庭^{にわ}の中^{なか}でよ」

「庭^{にわ}の中^{なか}」

「おいらア泥棒猫^{どろぼうねこ}のように、垣根^{かきね}の外^{そと}でうろうろしちやアいねえからの。——それ見^みな。鬼童丸^{きどうまる}の故智^{こち}にならつて、牛^{うし}の生皮^{なまかわ}じやねえが、この犬^{いぬ}の皮^{かわ}を被^{かぶ}つての、秋草城^{あきくさじょう}での籠城^{ろうじょう}だ。おかげで画囊^{がのう}はこの通り。——」

懷中^{ふところ}から取^とり出^だした春重^{はるしげ}の写生帳^{しゃせいちょう}には、十数枚^{すうまい}のおせんの裸像^{らぞう}が様々^{さまさま}に描^かかれていた。

六

まつろう 松五郎は、狐につままれでもしたように、しばし三日月の光に浮いて出たおせんの裸像（らぞう）を、春重（はるしげ）の写生帳（しやせいちょう）の中に凝視（ぎようし）していたが、やがて我（われ）に還（かえ）つて、あらためて春重（はるしげ）の顔（かお）を見守（みまも）つた。

「重（しげ）さん、お前（まえ）、相変（あいかわ）らず素（す）ばしっこいよ」

「なんでよ」

「犬（いぬ）の皮（かわ）をかぶつて、おせんの裸（はだか）を思（おも）う存分（ぞんぶん）見た上（うへ）に写（うつ）し取（と）つて来る（く）なんぞ、素人（しろうと）にや、鯁（しやちほ）立（たち）をしても、考（かんが）えられる芸（げい）じゃねえツてのよ」

「ふふふ、そんなこたア朝飯前（あさめしまえ）だよ。——おいらあ実（じつ）ア、もうちつといいことをしてるんだぜ」

「ほう、どんなことを」

「聞（き）きてえか」

「聞（き）かしてくんねえ」

「ただじゃいけねえ、一朱（しゆ）だしたり」

「一朱は高えの」

「なにが高えものか。時によつたら、安いぐらいのもんだ。——だがきようは見たところ、一朱はおろか、財布の底にや十文もなさそうだの」

「けちなことアおいてくんねえ。憚ながら、あしたあさまで持越したら、腹が冷え切つちまうだろうツてくれえ、今夜は財布が喰つてるんだ」

「それア豪儀だ。ついでだ、ちよいと拝ませな」

「ふん、重さん。眼をつぶさねえように、大丈夫か」

「小判の船でも着きやしめえし、御念にや及び申さずだ」

財布はなかった。が、おおかた晒しの六尺にぐるんだ錢を、内ぶところから探っているであろう。松五郎は暫しの間、唾が筍を掘るような恰好をしていたが、やがて握り拳の中に、五六枚の小粒を器用に握りしめて、ぱつと春重の鼻の先で展げてみせた。

「どうだ、親方」

「ほう、こいつア珍しい。どこで拾つた」

「冗談いわつし。当節錢を落す奴なんぞ、江戸中尋ねたつてあるもんじゃねえ。稼えだんだ」

「版下か」

「はんはんだが、字が違ふやつよ。ゆうべお旗本の臺本多の部屋で、半を續けて三度張つたら、いう目が出ての俄分限での、急に今朝から仕事をするのがいやンなつて、天道様がべそをかくまで寝てえたんだが、蝙蝠と一緒、ぶらりぶらりと出たところ、浅草でぼったり出遭つたのが若旦那。それから先は、お前さんに見られた通りのあの始末だ。——」

「そいつア夢に牡丹餅だの。十文と踏んだ手の内が、三両だとなりやア一朱はあんまり安過ぎた。三両のうちから一朱じやア、髪の毛一本、抜くほどの痛さもあるまいて」

「こいつア今夜のもとのだからの」

「そんなら止しなつ聞しちややらねえ」

「聞かせねえ」

「だすか」

「仕方がねえ、出しやしよう」

すると春重は、きよろりと辺を見廻してから、俄に首だけ前へ突出した。
「耳をかしな」

「こうか」

「――」

「ふふ、ほんとうかい。重さん。――」

「嘘はお釈迦の御法度だ」

痩た松五郎の眼が再び春重の顔に戻った時、春重はおもむろに、ふところから何物かを取り出して松五郎の鼻の先にひけらかした。

七

足もとに、尾花の影は淡かった。

「なんだい」

「なんだかよく見さつし」

八の字を深くしながら、寄せた松五郎の眼先を、ちらとかすめたのは、鶯の糞をいれて使うという、近頃はやりの紅色の糠袋だった。

「こいつア重さん、糠袋じゃアねえか」

「まずの」

「一朱はずんで、糠袋を見せてもらうどじはあるめえぜ。——お前いまなんてツた。おせんの雪のはだから切り取った、天下に二つと無え代物を拝ませてやるからと。——」

「叱ッ、極内だ」

「だつてそんな糠袋。……」

「袋じゃねえよ。おいらの見せるなこの中味だ。文句があるンなら、拜んでからにしてくん。——それこいつだ。触った味はどんなもんだの」

ぐつと伸ばした松五郎の手先へ、春重は仰々しく糠袋を突出したが、さて暫くすると、再び取つておのが額へ押し当てた。

「開けて見せねえ」

「拝みたけりや拝ませる。だが一つだつて分けちゃアやらねえから、そのつもりでいてくんねえよ」

そういうながら、指先を器用に動かした春重は、糠袋の口を解くと、まるで金の粉でもあけるように、松五郎の掌へ、三つばかりを、勿体らしく盛り上げた。

「こいつア重さん。——」

「爪だ」

「ちえツ」

「おつとあぶねえ。棄てられて堪るものか。これだけ貯めるにや、まる一年かかつてるんだ」

松五郎の掌へ、おのが掌をかぶせた春重は、あわてて相手の掌ぐるみ裏返して、ほととしたように眼の前へ引き着けた。

「湯屋で拾い集めた爪じやアねえよ。蚤や蚊なんざもとよりのこと、腹の底まで凍るような雪の晩だつて、おいらアじつと縁の下へもぐり込んだまま辛抱して来た苦心の宝だ。」

——この明りじやはつきり見分けがつくめえが、よく見ねえ。お大名のお姫様の爪だつて、これ程の艶はあるめえからの」

三日月なりに切つてある、目にいれたいくらいの小さな爪を、母指と中指の先で摘んだま、ほのかな月光に透した春重の面には、得意の色が明々浮んで、はては傍に松五郎のいることをさえも忘れた如く、独り頻りにうなずいていたが、ふと向う臙にたかった藪蚊のかゆさに、漸くおのれに還つたのであろう。突然平手で臙をたたくと、くすぐったそうにふふふと笑つた。

「重さん、お前まったく変り者だの」

「なन्दよ」

「考^{かん}えても見^みねえ。これが金^{きん}の棒^{ぼう}を削^{けず}った粉^{こな}とでもいうンなら、拾^{ひろ}いがいもあるうけれど、高^{たか}が女^{おんな}の爪^{つめ}だぜ。一貫^{かん}目^め拾^{ひろ}ったところで、癩^{ひようそ}疽^その薬^{くすり}になるくれえが、関^{せき}の山^{やま}だらうじやねえか。よく師^し匠^{しよう}も、春^{はる}重^{しげ}は変^{かわ}り者^{もの}だといってなすったが、まさかこれ程^{ほど}たア思^{おも}わなかつた」

「おいおい松^{まつ}つあん、はつきりしなよ。おいらが変^{かわ}り者^{もの}じやアねえ。世^せ間^{けん}の奴^{やつ}らが変^{かわ}つてるんだ。それが証^{しょう}拠^こにや。願^{がん}にかけておせんの茶^ち屋^やへ通^{かよ}う客^{きやく}は山^{やま}程^{ほど}あつても、爪^{つめ}を切^きるおせんのかたちを、一^{ひと}度^どだつて見^みた男^{おとこ}は、おそらく一^{ひとり}人もなかうじやねえか。——そこから生^うれたこの爪^{つめ}だ」

一つずつ数^{かず}えたら、爪^{つめ}の数^{かず}は、百^{ひゃく}個^こ近^{ちか}くもあるであらう。春^{はる}重^{しげ}は、もう一^{ひと}度^ど糠^{ぬか}袋^{ぶくろ}を握^{にぎ}りしめて、薄^{うす}気^き味^み悪^{わる}くにやりと笑^{わら}つた。

朝^{あさ}

一

ちち、ちち、ちちち。

行燈あんどんはともしたままになつていたが、外そとは既に明すけそめたのであろう。今まで流いまし元ながで頻しきりに鳴ないていた虫むしの音ねが、絶たえがちに細ほそつたのは、雨戸あまどから差さす陽ひの光ひかりに、おのずと怯おびえてしまつたに相違そういない。

が、虫むしの音ねの細ほそつたことも、外そとが白しら々と明あけそめて、路地ろじの溝板どぶいたを踏ふむ人の足音ひとあしおとが聞きこえはじめたことも、何なにもかも知しらずに、ただ独りひとり、破れ畳やぶだたみの上に据すえた寺子屋机てらこやつくえの前まえに頑張がんばつたまま、手許てもとの火鉢ひばちに載のせた薬罐やかんからたぎる湯気ゆげを、千切ぎれた蟋蟀こおろぎの片脚かたあしのように、頬ほほを引ひつつらせながら、夢中むちゅうで吸すい續つづけていたのは春重はるしげであつた。

七軒長屋けんながやのまん中は縁起えんぎがよくないという、人ひとのいやがるそんまん中なかへ、所帶道具しよたいどうぐといえ、土竈どがまと七輪りんと、箸はしと茶碗ちやわんに鍋なべが一つ、膳ぜんは師匠ししやうの春信はるのぶから、縁ふちの欠かけた根ねごろの猫脚ねこあしをもらつたのが、せめて道具どうぐらしい顔かおをしているくらいが関せきの山やま。いわばすツてんてんの着きのみ着きのままで蛆うじが湧わくのも面白おもしろかろうと、男おとこやもめの垢あかだらけの体からだを

運び込んだのが、去年の暮も押し詰って、引摺り餅が向ッ鉢巻で練り歩いて、廿五日の夜の八つ時だった。

ざつと二年。きのうもきょうもない春重のことながら、二十七のきょうの若さで、女おんなの数は千人近くも知り尽くしたのが自慢だけに、並大抵のことでは興味が湧かず、師匠ししょうの通りに描く美人画なら、いま直ぐにも描ける器用な腕が却って邪間になつて、着物ものなんぞ着た女を描いても、始まらないとの心からであろう。自然の風景を写すほかは、画帳は悉く、裸婦の像に満たされているという変り様だった。

二畳に六畳の二間は、狭いようでも道具がないので、独り住居には広かった。そのぐるりの壁に貼りめぐらした絵の数が、一目で数えて三十余り、しかも男と名のつく者は、半分も描いてあるのではなく、女と、いうよりも、殆ど全部が、おせんの様々な姿態に尽つくされているのも凄まじかった。

その六畳の行燈の下に、机の上から投げ出されたのであろう、腰の付根から下だけを、幾つともなく描いた紙片が、十枚近くもちらばつたのを、時おりじろりじろりとにらみながら、葉罐の湯気を、鼻の穴が開きツ放しになる程吸い込んでいた春重は、ふと、行燈の芯をかき立てて、薄気味悪くニヤリと笑った。

「ふふふ。わるくねえにおいだ。——世間の奴らア智恵なしだから、女のおいは、肌からじかでなけりや、嗅げねえように思つてゐるが、情ねえもんだ。この爪が、薬罐の中で煮えくり返る甘い匂を、一度でいいから嗅がしてやりてえくれえのもんだ。紅やおしろいのおいなんぞたア訳が違つて、魂が極楽遊びに出かけるたアこのことだろう。おまけにただの駄爪じゃねえ。笠森おせん、磨きのかかった珠のような爪様だ。——大方松五郎の奴ア、今時分、やけで出かけた吉原で、折角拾つたような博打の金を、手もなく捲揚げられてることだろうが、可哀想にこうしておせん、脚を描きながらこの匂をかいでる氣持ア、鯪 鯪 立をしたつてわかるこつちやアあるめえて。——ふふふ。もうひと摘み、新しいこいつをいれ、肚一杯にかぐとしようか」

春重は傍らに置いた紅の糠袋を、如何にも大切そうに取上げると、おもむろに口紐を解いて、十ばかりの爪を掌にあけたが、そのまま湯のたぎる薬罐の中へ、一つ一つ丁寧につまみ込んだ。

「ふふふ、こいつアいい匂だなア。堪らねえ匂だ。——笠森の茶屋で、おせんを見てよだれを垂らしての野呂間達に、猪口半分でもいいから、この湯を飲ましてやりてえ氣がする。——」

どこぞの秋刀魚を狙った泥棒猫が、あやまつて庇から路地へ落ちたのであろう。突然、然雨戸を倒したような大きな音が窓下に聞えたが、それでも薬罐の中に埋められた春重の長い顔はただその肩が阿波人形のように、大きく動いただけで、決して横には向けられなかった。

二

「おたき」

「え」

「隣じやまた、いつもの病が始まつたらしいぜ。何しろあの匂じや、臭くツてたまらねえな」

「ほんとうに、何んて因果な人なんだろうね。顔を見りや、十人なみの男前だし絵も上手だつて話だけど、してることは、まるツきり並の人間と變つてるんだからね」

「おめえ。ちよいと隣へ行つて来ねえ」

「何しにさ」

「夜のこたア、こつちが寝てるうちだから、何をしても構わねえが、お天道様が、上つたら、その匂だけに止めてもらいてえッてよ。仕事に行つたつて、えたいの知れぬ匂が、半纏にまでしみ込んでるんで、外間が悪くッて仕様がありがやアしねえ」

「女じや駄目だよ。お前さん行つて、かけ合つて来とくれよ」

「だからね。おいら行くな知つてるが、今もそいつた通り、帳場へ出かけてからがみつともなくて仕様がねえんだ。あんな匂の中へ這入つちやいかれねえッてのよ」

「あたしだつていやだよ。まるで焼場のような匂だもの。きのうだつて、髪結のおしげさんがいうじやアないか。お上さんとこへ結いに行くのもいいけれど、お隣の壁越しに伝わってくる匂をかぐと、仏臭いような気がしてたまらないから、なるだけこつちへ、出かけて来てもらいたいって。——いったいお前さん、あれア何を焼く匂だと思つてるの」

「分つてらアな」

「何んだえ」

「奴ア絵かきツて振れ込みだが、嘘ッ八だぜ」

「おや、絵かきじやないのかい」

「そうとも。奴ア雪駄直しだ」

「雪駄直し。——」

「それに違えねえやな。でえいち、外にあんな匂をさせる家業が、ある筈はなかうじやねえか。雪駄の皮を、鍋で煮るんだ。軟らかにして、針の通りがよくなるようによ」

「そうかしら」

「しらも黒もありアしねえ。それが為に、忙しい時にや、夜ツピて鍋をかけツ放しにしくから、こつちこそいい面の皮なんだ。——この壁のところ鼻を当てて臭いで見ねえ。火事場で雪駄の焼け残りを踏んだ時と、まるツきり変りがねえじやねえか」

「あたしやもう、ここにいてさえ、いやな氣持がするんだから、そんなとこへ寄るなんざ、真ツ平よ。——ねえお前さん。後生だから、かけ合つて来とくれよ」

「おめえ行つて来ねえ」

「女じや駄目だというのにさ」

「男が行つちやア、穩やかでねえから、おめえ行きねえツてんだ」

「だって、こんなこたア、どこの家だって、みんな亭主の役じやないか」

「おいらアいけねえ」

「なんて氣の弱い人なんだろう」

「臭えからいやなんだ」

「お前さんより、女だもの。あたしの方が、どんなにいやだか知れやしない。——昔ツから、公事かけ合は、みんな男のつとめなんだよ」

「ふん。昔も今もあるもんじやねえ。隣近所のこたア、女房がするに極ツてらアな。行つて、こつぴどくやつ付けて来ねえツてことよ」

壁一重隣の左官夫婦が、朝飯の膳をはさんで、聞えよがしのいやがらせも、春重の耳へは、秋の蠅の羽ばたき程にも這入らなかつたのであろう。行燈の下、薬罐の上に負いかぶさつたその顔は、益々上氣してゆくばかりであつた。

三

「重さん。もし、重さんは留守かい。——おやツ、天道様が臍の皺まで御覧なさろうツて真ツ昼間、あかりをつけツ放しにしてるなんぎ、ひど過ぎるぜ。——寝てゐるのかい。起きてるんなら開けてくんねえ」

どこかで一杯引つかけて来た、酔いの廻つた舌であらう。声は確に彫師の松五郎であつ

た。

「ふふふ。とうとう寄りやがつたな」

首くびをすくめながら、口くちの中でこう呟つぶやいた春重はるしげは、それでも爪つめを煮に込んである薬罐やかんの傍そばから顔かおを放はなさずに、雨戸あまどの方ほうを偷ぬすみ見た。陽ひは高たか々と昇のぼっているらしく、今いまさら氣付きづいた雨戸あまどの隙間すきまには、なだらかな日の光ひかりが、吹矢ふきやで吹ふき込こんだように、こまいの現あらわれた壁かべの裾すそへ流れ込こんでいた。

「春重はるしげさん。重しげさん。――」

が、それでも春重はるしげは返事へんじをしずに、そのまま鎌首かまくびを上げあげて、ひそかに上あがりはなの方ほうへ這はい寄よって行いった。

「おかしいな。いねえはずアねえんだが。――あかりをつけて寝ねてるなんぞ、どつちにしても不用心ぶようじんだぜ。おいらだよ。松五郎まつごろう様の御登城ごとしじょうだよ」

「もし、親方おやかた」

突然とつぜん、隣となりの女房にようぼうおたきの声こえが聞こえた。

「ねえお上かみさん。ここの家うちア留守るすでげすかい。寝ねてるんだか留守るすなんだか、ちつともわからねえ」

「いますともさ。だが親方、悪いこたアいわないから、滅多に戸を開けるなアお止なさいよ。そこを開けた日にや、それこそ生皮の匂で、隣近所は大迷惑だわな」

「生皮の匂つてなんなの、お上さん」

「おや、親方にやこの匂がわからないのかい。このたまらないやな匂が。……」

「判らねえこたアねえが、こいつアおまえ、膠を煮てる匂だわな」

「冗談じゃない。そんな生やさしいもんじやありやアしない。お鍋を火鉢へかけて、

雪駄の皮を煮てるんだよ。今もうちで、絵師なんて振れ込みは、大嘘だつて話を。……」

がらツと雨戸が開いて、春重の辛い顔がぬツと現れた。

「お早よう」

「お早ようじやねえや。何んだつて松つあんこんな早くツからやつて来たんだ」

「早えことがあるもんか。お天道様は、もうとつくに朝湯を済まして、あんなに高く昇

つてるじやねえか。——いつてえ重さん。おめえ、寝てえたんだか起きてたんだか、なぜ

返事をしてくれねえんだ」

「返事なんざ、しちやアいらねえよ。——いいからこつちへ這入ンねえ」

不機嫌な春重の顔は、桐油のように強張っていた。

「へえつてもいいかい」

「帰るんなら帰ンねえ」

「いやにおどかすの」

「振られた朝帰りなんぞに寄られちや、かなわねえ」

「ふふふ。振られてなんざ来ねえよ。それが証拠にや、いい土産を持つて来た」

「土産なんざいらねえから、そこを締めたら、もとの通り、ちゃんと心張棒をかけといてくんねえ」

「重さん、おめえまだ寝るつもりかい」

「いいから、おいらのいつた通りにしてくんねえよ」

松五郎が不承無承に、雨戸の心張棒をかうと、九尺二間の家の中は再び元通りの夜の世界に変わって行つた。

「上ンねえ」

が、松五郎は、次第に鼻を衝いてくる異様な匂に、そのままそこへ佇んでしまった。

四

行燈あんどんはほのかにともつていたものの、日向ひなたから這入はいつて来たばかりの松五郎まつごろうの眼めには、
 家うちの中は真ッ暗くらやみ闇であつた。

「松まつつあん、何なんで上あがらねえんだ」

「暗くらくつて、足あしもとが見みえやしねえ」

「不自由ふじゆうな眼まなこだの。そんなこつちや、面白おもしろい思おもいは出来できねえぜ」

「重しげさん、おめえ、ずつと起おきて何なにをしてなすつた」

「ふふふ。こつちへ上あがりやア、直すぐに判わかるこつた。——まアこの行燈あんどんの傍そばへ来きて見みねえ」
 漸ようやく眼めに慣なれて来きたのであろう。行燈あんどんの輪わが次第しだいに色いろを濃こくするにつれて、狭せまいあた
 りの有様ありさまは、おのずから松五郎まつごろうの前まえにはつきり浮うき出だした。

「絵えをかいでたんじやねえのかい」

「絵えなんざかいちやアいねえよ。——おめえにや、この匂におがわからねえかの」

「膠にかわだな」

「ふふ、膠にかわは情なさけねえぜ」

「じゃアやつぱり、牛うしの皮かわでも煮にてるのか」

「馬鹿をいわッし。おいらが何んで、牛の皮に用があるんだ。もつともこの薬罐の傍へ鼻を押ツつけて、よく嗅いで見ねえ」

「おいらア、こんな匂は真ア平だ」

「何んだつて。この匂がかげねえツて。ふふふ。世の中にこれ程のいい匂は、またあるもんじやねえや、伽羅沈香だろうが、蘭麝だろうが及びもつかねえ、勿体ねえくれえの名香だぜ。——そんな遠くにいたんじや、本当の香りは判らねえから、もつと薬罐の傍に寄つて、鼻の穴をおツぴろげて嗅いで見ねえ」

「いつてえ、何を煮てるのよ」

「江戸はおろか、日本中に二つとねえ代物を煮てるんだ」

「おどかしやいけねえ。そんな物がある訳はなからうぜ」

「なにねえことがあるものか。——それ見ねえ。おめえ、この袋にや覚えがあらう」
鼻の先へ付き付けた紅の糠袋は、春重の手の中で、珠のように小さく躍った。

「あッ。そいつを。……」

「どうだ。おせんの爪だ。この匂を嫌うようじや、男に生れた甲斐がねえぜ」

「重さん。おめえは、よつぽどの変り者だのう」

まつろう 松五郎は、あらためて春重の顔を見守った。

「変り者じやアねえ。そういうおめえの方が、変つてるんだ。——四角四面にかしこまつ

ているお武家でも、男と生れたからにや、女の嫌いな者ツ、ただの一人もありやアしめえ。

その万人が万人、好きで好きでたまらねえ女の、これが本当の匂だらうじやねえか。

成程、肌の匂もある。髪の毛もある。乳の匂もあるにア違えねえ。だが、その数ある女

の匂を、一つにまとめた有難味の籠つたのが、この匂なんだ。——三浦屋の高尾がどれ

ほど綺麗だろうが、楊枝見世のお藤がどんなに評判だろうが、とどのつまりは、みめ

かたちよりは、女の匂に酔つて客が通うという寸法じやねえか。——よく聞きなよ。匂

だぜ。このたまらねえいい匂だぜ」

「冗談じやねえ。おいらアいくら何んだって、こんな匂をかぎたくツて、通うような

馬鹿氣たこたア。……」

「あれだ。おめえにやまだ、まるツきり判らねえと見えるの。こいつだ。この匂が、嘘も

隠しもねえ、女の匂だつてんだ」

「馬鹿な、おめえ。——」

「そうか。そう思つてるんなら、いまおめえに見せてやる物がある。きつとびつくりする

なよ」

春重はるしげはこういいながら、いきなり真暗まつくらな戸棚とだなの中なかへ首くびを突つつ込こんだ。

五

じりじりツと燈芯とうしんの燃え落ちる音おとが、しばしのしじまを破やぶつてえあたりを急に明きゆうるくした。が、それも束の間つかま、やがて油あぶらが尽きたのであろう。行燈あんどんは忽ち消えて、あたりは真しんの闇やみに変わかわってしまった。

「いたずらしちゃアいけねえ。まるつきりまつ暗くらで、何なんにも見えやしねえ」
背伸せのびをして、三尺じやくとたなの戸棚おくさぐの奥を探さぐつていた春重はるしげは、闇やみの中なかから重い声おもいこえでこういいながら、もう一度ど、ごとりと鼠ねずみのように音おとを立てた。

「いたずらじゃねえよ。油あぶらが切れちやつたんだ」

「油あぶらが切れたツて。そんなら、行燈あんどんのわきに、油あぶら差さしと火口ほくちがおいであるから、速はやくつけてくんねえ」

「どこだの」

「行燈の右手だ」

口でそういわれても、勝手^{かって}を知らない暗^{やみ}の中では、手探^{てさぐ}りも容易^{ようい}でなく、松五郎^{まつろう}は破れ^{やぶ}た上^{うへ}を、小気味悪^{こきみわる}く這^はい廻^{まわ}った。

「速^{はや}くしてもらいてえの」

「いまつける」

探^{さぐ}り当^あてた油^{あぶら}差^{さし}を、雨戸^{あまど}の隙間^{すきま}から微^{かす}かに差^さし込む陽^ひの光^{ひかり}を頼^{たよ}りに、油^{あぶら}皿^{ざら}のそばまで持^もって行^いった松五郎^{まつろう}は、中指^{ななゆび}の先^{さき}で冷^{つめ}たい真^{しん}鍬^{ちゅう}の口^{くち}を加減^{かげん}しながら、とツとツと、おもく落^おちた油^{あぶら}を透^すかして見^みたが、さてどうやらそれがうまく運^{はこ}ぶと、これも足^{あし}の先^{さき}で探^{さぐ}り出^だした火口^{ほくち}を取^とって、やつとの思^{おも}いで行燈^{あんどん}に灯^ひをいれた。

ぱつと、漆^{うるし}盆^{ぼん}の上^{うへ}へ鬱金^{うこん}の絵^えの具^ぐを垂^たらしたように、あたりが明るくなつた。同時に、春重^{はるしげ}のニヤリと笑^{わら}った薄気味悪^{うすきみわる}い顔^{かお}が、こつちを向^むいて立^たつていた。

「松^{まつ}つあん。おめえ本^{ほん}当^{とう}に、女^{おんな}の匂^{におい}は、麝香^{じやこう}の匂^{におい}だと思^{おも}つてるんだの」

「そりやアそうだ。こんな生皮^{なまかわ}のような匂^{におい}か女^{おんな}の匂^{におい}でたまるもんか」

「そうか。じゃアよくわかるように、こいつを見^みせてやる」

編^あめば牛蒡^{ごぼう}締^{じめ}くらいの太^{ふと}さはあるであらう。春重^{はるしげ}の手^てから、無造作^{むぞうさ}に投^なげ出^だされた

真ツ黒な一束は、松五郎の膝の下で、蛇のようにひとつねりうねると、ぐざりとそのまま畳の上へ、とぐろを巻いて納まってしまった。

「あッ」

「気味の悪いもんじやねえよ。よく手に取って、その匂を嗅いで見ねえ」

松五郎は行燈の下に、じつと眼を瞠った。

「これア重さん、髪の毛じやねえか」

「その通りだ」

「こんなものを、おめえ。……」

「ふふふ、気味が悪いか。情ねえ料簡だの、爪の匂がいやだというから、そいつを嗅がせてやるんだが、これだつて、髭なんぞたわけが違つて、滅多矢鱈に集まる代物じやアねえんだ。数にしたら何万本。しかも一本ずつがみんな違つた、若い女の髪の毛だ。」

——その中へ黙つて顔を埋めて見ねえ。一人一人の違つた女の声が、代り代りに聞えて来る。この世ながらの極楽だ。上はお大名のお姫様から、下は橋の下のお食まで、十五から三十までの女と名のつく女の髪は、ひと筋残らずはいつてるんだぜ。——どうだ松つあん。おいらア、この道へかけちや、江戸はおろか、蝦夷長崎の果へ行つても、ひ

けは取らねえだけの自慢があるんだ。見ねえ、髪の毛はこの通り、一本残らず生きてるんだから。……」

松五郎の膝もとから、黒髪の手を取りあげた春重は、忽ちそれを顔へ押し当てると、次第に募る感激に身をふるわせながら、異様な声で笑い始めた。

「重さん。おれア帰る」

「帰るンなら、せめて匂だけでも嗅いできねえ」
が、松五郎は、もはや腰が坐らなかつた。

六

「ああ氣味が悪かつた。ついゆうべの惚氣を聞かせてやろうと思つて、寄つたばかりに、ひでえ目に遇つちやつた。変り者ツてこたア知つてたが、まさか、あれ程たア思わなかつた。——あんな奴につかまつちやア、まったくかなわねえ」

弾かれた煎豆のように、兩戸の外へ飛び出した松五郎は、酔いも一時に醒め果てて、一寸先も見えなかつたが、それでも溝板の上を駆けだして、角の煙草屋の前まで来る

と、どうやらほつと安心の胸を撫でおろした。

「だが、いったいあいつは、何んだつてあんな馬鹿氣たことが好きなんだろう。爪を煮たり、髪の毛の中へ顔を埋めたり、氣狂じみた真似をしちゃア、いい氣持になつてゐるようだが、虫のせえだとする、ちと念がいり過ぎるしの。どうも料簡方がわからねえ」
ぶつぶつひとり呟きながら、小首を傾げて歩いて來た松五郎は、いきなりぽんと一つ肩をたたかれて、はツとした。

「どうした、兄イ」

「おおこりや松住町」

「松住町じゃねえぜ。朝つばらから、素人芝居の稽古でもなからう。いい若え者がひとり言をいつてゐるなんざ、みつともねえじやねえか」

坊主頭へ四つにたんだ手拭を載せて、朝の陽差を避けながら、高々と尻を絡げたいでたちの相手は、同じ春信の摺師をしている八五郎だった。

「みつともねえかも知れねえが、あれ程たア思わなかつたからよ」

「何がよ」

「春重だ」

「春重はるしげがどうしたツてんだ」

「どうもこうもねえが、あいつアおめえ、日本にほん一の変り者かわものだぜ」

「春重はるしげの変り者かわものだつてこたア、いつも師匠ししょうがいつてるじゃねえか。今いまさら変り者かわものぐれえに、驚おどろくおめえでもなかるうによ」

「うんにや、そうでねえ。ただの変り者かわものなら、おいらもこうまじや驚おどろかねえが、一晩ばんじゆ中うね寝つめずに爪つめを煮にたり、束たばにしてある女おんなの髪かみの毛けを、一本ほん一本ほんしやぶつたりするのを見みちやアいくらおいらが度胸どきようを据すえたつて。……」

「爪つめを煮にるたア、そいつアいつてえ何なんのこつたい」

「葉罐やかんに入いれて、女おんなの爪つめを煮にるんだ」

「女おんなの爪つめを煮にる。——」

「そうよ。おまけにこいつア、ただの女おんなの爪つめじゃアねえぜ。当時とうじ江戸えどで、一といつて二と下くだらねえといわれてる、笠森かさもりおせんおせんの爪つめなんだ」

「冗談じやうだんじゃねえ。おせんおせんの爪つめが、何なんで煮にる程ほど取とれるもんか、おめえも人ひとが好過よすぎるぜ。春重はるしげに欺だまされて、気味きみが悪わるいの恐おそろしいのと、頭あたまを抱かかえて帰かえつてくるなんざ、お笑わらい草ぐさだ。おかた絵えを描かく膠にかわでも煮にていたんだらう。そいつをおめえが間違まちがつて。……」

「そ、そんなんじやねえ。真しん正しょう間違まちがいのねえおせんの爪つめを紅べにの糠ぬか袋ぶくろから小出こだしに出だして、薬罐やかんの中で煮にてるんだ。そいつも、ただ煮にてるんならまだしもだが、薬罐やかんの上うえへ面つらを被かぶせて、立昇たちる湯氣ゆげを、血相けつそう変かえて嗅かいでるじやねえか。あれがおめえ、いい心こころもち持もて見ていられるか、いられねえか、まず考かんえてくんねえ」

「そいつを嗅かいで、どうしようツてんだ」

「奴やつにいわせると、あのたまらなく臭くえ匂におが本当ほんとうの女おんなの匂におだというんだ。嘘うそだと思おもつたら、論ろんより証拠しょうこ、春重はるしげの家うちへ行いつて見みねえ。戸とを締しめ切きつて、今いまが嬉うれしがりの真まッ最さい中いちゅうだぜ」

が、八五郎ろうごは首くびを振ふつた。

「そいつアいけねえ。おれア師匠ししょうの使つかいで、おせんのとこまで行いかにやらねえんだ」

七

限取くまどりでもしたように眼めの皮かわをたるませた春重はるしげの、上気じょうきした頬ほのあたりに、蠅はえが一匹びきぼつんととまって、初秋しよしゅうの陽ひが、路地ろじの瓦かわらから、くすぐったい顔かおをのぞかせていた。

「おつといけねえ。春重^{はるしげ}がやつてくるぜ」

煙草屋^{たばこや}の角^{かど}に立つたまま、爪^{つめ}を煮^にる嚙^{うわさ}をしていた松五郎^{まつごろう}は、あわてて八五郎^{ろろう}に目くばせをすると、暖簾^{のれん}のかげに身^みを引^ひいた。

「隠^{かく}れるこたあなかう」

「そうでねえ。おいらは今逃^{いまに}げて来^きたばかりだから。見付^{みつ}かつちアことだ」

「そんなら、そつちへ引^ひつ込^こんでるがいい。もののついでに、おれがひとつ、鎌^{かま}をかけてやるから。――」

蛙^{かえる}のように、眼玉^{めだま}ばかりきよろつかせて暖簾^{のれん}のかげから顔^{かお}をだした松五郎^{まつごろう}は、それでもまだ怯^{おび}えていた。

「大丈夫^{だいじょうぶ}かの」

「叱^しツ。そこへ来^きたぜ」

出合頭^{であいがしら}のつもりかなんぞの、至極^{しごく}気軽^{きが}な調子^{ちようし}で、八五郎^{ろろう}は春重^{はるしげ}の前^{まえ}へ立^たちふさがつた。

「重^{しげ}さん、大層^{たいそう}早^はえの」

びくつとしたように、春重^{はるしげ}が爪^{つまさき}先^{さき}で立^たち止^{どま}つた。

「八つあんか」

「八つあんじやねえぜ、一ぺえやつたようない顔かおいろ色をして、どこへ行きなさる」

「柳湯やなぎゆへの」

「朝湯あさゆたアしやれてるの」

「しやれてる訳わけじやねえが、寝ねずに仕事しごとをしてたんで、湯ゆへでも這入はいらねえことにや、はつきりしねえからよ」

「ふん、夜よなべたア恐れ入おそった。そんなに稼かせいじや、銭ぜにがたまつて仕方しかたがあるめえ」

「だからよ。だから垢あかと一緒にしよに、柳湯やなぎゆへ捨てすてに行くところだ」

「ほう、済すまねえが、そんな無駄むだな銭ぜにがあるんなら、ちとこつちへ廻まわして貰もらいてえの。おれだの松五郎まつろうなんぎ、貧乏神びんぼうがみに見込みこまれたせい、いつもぴいぴい風車かざぐるまだ。そこへ行くとおめえなんぎ、おせんの爪つめを糠袋ぬかぶくろへ入れて。……」

「なんだつて八つあん、おめえ夢ゆめを見てるんじやねえか。爪つめだの糠袋ぬかぶくろだの、とそんなことア、おれにやアてんで通つうじねえよ」

「えええ隠かくしちやアいけねえ。何なにから何なにまで、おれア根ねこそぎ知しつてるぜ」

「知しつてるツて。——」

「知らねえでどうするもんか。重さん、おめえの夜あかしの仕事は、銭のたまる稼ぎじゃなくって、色気のたまる楽しみじゃねえか」

「そ、そんなことが……」

「嘘だといいなさるのかい。証拠はちゃんと上ってるんだぜ。おせんの爪を煮る匂は、さぞ香ばしくって、いいだろうの」

「そいつを、おめえは誰から聞きなすった」

「誰から聞かねえでも、おいらの眼は見透しだて。——人間は、四百四病の器だというが、重さん、おめえの病は、別あつらえかも知れねえの」

春重は、きよろりとあたりを見廻してから、一段声を落した。

「ちよいと家へ寄らねえか。おもしろい物を見せるぜ」

「折角だが、寄ってる暇がねえやつさ。これから大急ぎで、おせんの見世まで行か

ざアならねえんだ」

「おせんの見世へ行くって、何んの用だよ」

「何んの用だか知らねえが、春信師匠が、急に用ありとのことでの」

八五郎は、春信から預った結文を、ちよいと懷中から窺かせた。

紅^{べに}

一

ゆく末^{すえ}は誰^{だれ}が肌触^{はだふ}れん紅^{べに}の花^{はな}

ばせを

「おツとツと、そう一人^{ひとり}で急^{いそ}いじやいけねえ。まず御手洗^{みたらし}で手^てを浄^{きよ}めての。肝腎^{かんじん}のお稲^い荷^{なり}さんへ参詣^{さんけい}しねえことにや、罰^{ばち}が当^{あた}つて眼^めがつぶれやしよう」「いかさまこれは早^{はや}まつた。こかア笠森^{かさもり}様の境^{けいだい}内^{ない}だつたツけの」「冗談^{じょうだん}じゃござせん。そいつを忘^{わす}れちや、申^{もうし}訳^{わけ}がありますめえ。——それそれ、何^なんでまた、洗^{あら}つた手^てを拭^ふきなさらねえ。おせんは逃^にげやしねえから、落^{おち}着^ついたり、落^{おち}着^つ

いたり」

「御隠居^{ごいんきよ}、そうひやかしやいけやせん。堪^{かん}忍^{にん}堪^{かん}忍^{にん}」「はッはッはッ、徳^{とく}さん。お前^{まえ}の足^{あし}ッ、まるツきり、地^じべたを踏^ふんじアいねえの」

こおろぎの音も細々と明け暮れて、風に乱れる芒叢に、三つ四つ五つ、子雀の飛び交うさまも、いと憐れの秋ながら、ここ谷中の草道ばかりは、枯野も落葉も影さえずなく、四季を分たず咲き競うた、芙蓉の花が清々しくも色を染めて、西の空に澄み渡った富岳の雪に映えていた。

名にし負う花の笠森感応寺。渋茶の味はどうであらうと、おせんが愛想の靨を拝んで、桜貝をちりばめたような白魚の手から、お茶一服を差し出されれば、ぞっと色気が身にしてみて、帰りの茶代は倍になろうという。女ならではの夜のあけぬ、その大江戸の隅々まで、子供が唄う毬唄といえ、近頃「おせんの茶屋」にきまつていた。

夜が白々と明けそめて、上野の森の恋の鴉が、まだ漸く夢から覚めたか覚めない時分、早くも感応寺中門前町は、参詣の名に隠れての、恋知り男の雪駄の音で賑わいそめるが、十一軒の水茶屋の、いずれの見世に休むにしても、当の金的のかぎ屋のおせんただ一人。ゆうべ吉原で振り抜かれた捨鉢なのが、帰りの駄賃に、朱羅宇の煙管を背筋に忍ばせて、可愛いおせんにやろうなぞと、飛んだ親切なお笑ひ草も、数ある客の中にも珍しくなかった。

「はいお早う」

「ああ喉がかわいた」

赤い鳥居の手前あかとりい てまえにある。伊豆石の御手洗いずいし みたらしで洗った手を、拭くのを忘れた橘屋たちばなやの若わかだ旦那徳太郎んな とくたろうが、お稲荷様いなりさまへの参詣さんけいは二の次つぎに、連れの隠居いんきよの台詞通りせりふとお、土つちへつかない足を浮かせて、飛び込んで来たおせんの見世先みせさき。どかりと腰をおろした縁台えんだいに、小腰ここしをかがめて近寄ちかよつたのは、肝腎かんじんのおせんではなくて、雇女やといめのおきぬだった。

「いらつしやいまし。お早くはやからようこそ 御参詣おさんけいで。――」

「茶をひとつもらいましょう」

「はい、唯今ただいま」

三四人にん せんきやくの先客せんきやくへの遠慮えんりよからであらう。おきぬが茶ちやを汲くみに行つてしまうと、徳とくた太郎ろうはじくりと固唾かたずを呑んで声こえをひそめた。

「おかしいの。居おりやせんぜ」

「そんなこたアごわすまい。看板かんばんのねえ見世みせはあるまいからの」

「だが御隠居ごいんきよ。おせんは影かげもかたちも見えやせんよ」

「あわてずに待まつたり。じきに奥おくから出でて来きようツて寸法すんぽうだろう」

「朝飯あさめしとお踏ふみなすつたか」

「そうだ。それともお前まえさんのくるのを知しつて、念入ねんいりの化粧けしょうツてところか」

「嬉うれしがらせは殺せつ生しょうでげす。——おつと姐ねえさん。おせんちゃんはどうしやした」

「唯ただいま今いまちよいとお詣まいりに。——」

「どこへの」

「お稲荷いなりさま様でござんすよ」

「うむ、違ちがいがない。ここアお稲荷いなりさま様の境内けいだいだつけの」

徳太郎とくたろうは漸ようやく安心あんしんしたように、ふふと軽かるく内所ないしょで笑わらった。

二

橘屋たちばなやの若旦那わかだんな徳太郎とくたろうが、おせんおせんの茶屋ちややで安心あんしんの胸むねを撫なでおろしていた時分じぶん、
当のおせんは、神田白壁町かんだしろかべちようの鈴木春信すずきはるのぶの住居すまいへと、ひたすら駕籠かごを急いそがせた。

「相棒あいぼう」

「おお」

「威勢いせいよくやんねえ」

「合点だ」
がつてん

「そんじよそこらの、大道白だいどううすを乗せてるんじゃねえや。江戸一番のおせんちゃんを乗せてるんだからの」

「そうとも」

「こうなると、銭金ぜにかねのお客じやアねえ。こちとらの見得みえになるんだ」

「その通りだ」
とお

「おれア、一度、半蔵松葉はんぞうまつばの粧よそおいという花魁おいらんを、小梅こうめりようの寮まで乗せたことがあつたつけが、入山形いりやまがたに一つ星ぼしの、全盛ぜんせいの太夫たゆうを乗せた時ときだつて、こんないい気持きもちはしなかつたぜ」

「もつともだ」

「垂たれを揚あげて、世間せけんの仲間なかまに見みせてやりてえくれえのものだの」

「おめえばかりじやねえ。そいつアおいらもおんなじこツた」

「もし姐ねえさん」と、後うしろの方から声こえがかかった。

「あい」

「どうでげす。駕籠かごの垂たれを揚あげさしちアおくんなさるめえか」

「堪忍かんにんしておくんなさい。あたしや内所ないしょの用事ようじでござんすから。……」

「折角せつかくお前まえさんのを乗のせながら、垂たれをおろして担かついでたんじや、勿体もったいなくって仕方しかたがねえ。憚はばかしながら駕籠かご定さだの竹たけと仙蔵せんぞうは、江戸えど一番ばんのおせんちゃんのを乗のせてるんだと、みんなに見みせてやりてえんで。……」

「どうかそんなことは、もういわないでおくんなさい」

「評判娘ひやうばんむすめのおせんちゃんだ。両方りやうほう揚あげて悪わるかったら、片ッ方かたほうだけでもようがしよう」

「そうだ、姐ねえさん。こいつア何も、あつしらばかりの見得みえじやアごあんせんぜ。春信はるのぶさんの絵えで売うり込こむのも、駕籠かごから窺のぞいて見みせてやるのも、いずれは世間せけんへのおんなじ功德くんとくでげさアね。ひとつ思い切おもつて、ようがしよう」

「どうか堪忍かんにん。……」

「欲よくのねえお人ひとだなア。垂たれを揚あげてごらんせえ。あれ見みや、あれが水茶屋みずちややのおせんだ。笠森かさもりのおせんだと、誰だれいうとなく口くちから耳みみへ伝つたわつて白壁町しろかべちようまで往ゆくうちにやア、この駕籠かごの棟むね鼻はなにや、人垣ひとがきが出来できやすぜ。のう竹たけ」

「そりやアもう仙蔵せんぞうのいう通り真と正しん間違しょうまちげえなしの、生いきたおせんちゃんのを江戸えどの町ま中ちなかで見みたとなりやア、また評判ひやうばんは格別かくべつだ。——片ッ方かたほうでもいけなけりや、せめて

半分^{はんぶん}だけでも揚^あげてやったら、通^{とお}りがかりの人^{ひと}達^{たち}が、どん^{よろこ}なに喜^{よろこ}ぶか知^しれたもんじやねえんで。……」

「駕籠屋^{かごや}さん」

「はい」

「あたしやもう降^おりますよ」

「何^なんでげすツて」

「無理難題^{むりなんだい}をいうんなら、ここ^こで降^おろしておくんなさいよ」

「と、とんでもねえ。お前^{まえ}さんを、こんなところでおろした日^ひにや、それこそこちらア、二度^どと再^{ふた}び、江^え戸^どじや家^か業^{ぎょう}が出来^{でき}やせんや。——そんなにいやなら、垂^{たれ}を揚^あげるたいわねえから、そうじたばたと動^{うご}かねえで、おとなしく乗^のっておくんなせえ。——だが、考^{かん}げえりや考^{かん}げえるほど、このま^ま担^{かつ}いでるな、勿^も体^{たい}ねえなア」

駕籠^{かご}はいま、秋元^{あきもと}但馬^{たじま}守^{のかみ}の練^{ねり}堀^{べい}に沿^そつて、蓮^{はす}の花^{はな}が妍^{けん}を競^{きそ}つた不^{しの}忍^ぼ池^{はずち}畔^{はん}へと差^さ掛^{しか}つていた。

東叡山寛永寺の山裾に、周圍一里の池を見ることは、開府以来江戸っ子がもつ誇りの一つであつたが、わけても雁の訪れを待つまでの、蓮の花が池面に浮き出た初秋の風情は、江戸歌舞伎の荒事と共に、八百八町の老若男女が、得意中の得意とするところであつた。

近頃はやり物のひとつになつた黄縞格子の薄物に、菊菱の模様のある緋呉羅の帯を締めて、首から胸へ、紅絹の守袋の紐をのぞかせたおせんは、洗い髪に結いあげた島田髷も清々しく、正しく座つた膝の上に、両の手を置いたまま、駕籠の中から池のおもてに視線を移した。

夜が明けて、まだ五つには間があるであらう。ひと抱えもあるうと想われる蓮の葉に、置かれた露の玉は、いずれも朝風に揺れて、その足もとに忍び寄るさざ波を、ながし目に見ながら咲いた花の紅が招く尾花のそれとは変つた清い姿を、水鏡に映すたわわの風情。ゆうべの夢見が忘れられぬであらう。葉隠れにちよいと覗いた青蛙は、今にも落ちかかつた三角頭に、陽射しを眩ゆく避けていた。

「駕籠屋さん」

ふと、おせんが声こえをかけた。

「へえ」

「こつち側がわだけ、垂たれを揚あげておくんなさいな」

「なんでですッて」

「花はなが見みとうござんすのさ」
がってん

「合点がってんでげす」

先棒さきぼうと後うしろとの声こえは、正まさに一緒しよであつた。駕籠かごが地上ちじようにおろされると同時に、池いけに面めん
した右手みぎての垂たれは、颯さつとばかりにはね揚あげられた。

「まア綺麗きれいなこと」

「でげすからあつしらが、さつきツからいつてたじやござんせんか。こない景けしき色しきア、
毎まい朝あさ見みられる図ずじやアねえッて。——ごらんせえやし。お前まえさんの姿すがたが見みえたら、つ
ぼんでいた花はなが、あの通とおり一べん遍べんに咲さきやしたぜ」

「ちげえねえ。葉はツぱにとまつた蛙かえるの野郎やろうまでが、あんな大おおきな眼めを開あきやアがつた」

「もういいから、やっておくんなさい」

「そんなら、ゆつくりめえりやしよう。——おせんちゃんたれが垂たれを揚あげておくんなさりや、

どんなに肩身が広いか知れやアしねえ。のう竹^{たけ}」

「そうともそうとも。こうなつたら、急いでくれろと頼まれても、足がいうことを聞きませんや。あつしと仙蔵との、役得でげさアね」

「ほほほほ、そんならあたしや、垂をおろしてもらいますよ」

「飛んでもねえ。駕籠に乗る人かつぐ人、行く先アお客のままでが、かついでるうちア、こつちのままでげすぜ。——それ竹、なるたけ往來の人達に目立つように、腰をひねつて歩きねえ」

「おつと、御念には及ばねえ。お上が許しておくんなさりやア、棒鼻へ、笠森おせん御用駕籠とでも、札を建てて行きてえくらいだ」

いうまでもなく、祝儀や酒手の多寡ではなかった。当時江戸女の人気を一人で背負つてゐるような、笠森おせんを乗せた嬉しさは、駕籠屋仲間の誉れでもあろう。竹も仙蔵も、金の延棒を乗せたよりも腹は得意で一ぱいになっていた。

「こう見や。あすこへ行くなアおせんだぜ」

「おせんだ」

「そうよ。人違えのはずはねえ。鬻が立派な証拠だて」

「おツと違えねえ。向うへ廻つて見ぎアならねえ」
帳場へ急ぐ大工であろう。最初に見つけた誇りから、二人が一緒に、駕籠の向うへかけ寄つた。

四

「風流絵曆所鈴木春信」

水くきのあとも細々と、流したように書きつらねた木目の浮いた看板に、片枝折の竹も朽ちた屋根から柴垣へかけて、葡萄の蔓が伸び放題の姿を、三尺ばかりの流れに映した風雅なひと構え、お城の松も影を曳きそうな、日本橋から北へ僅に十丁の江戸のまん中に、かくも鄙びた住居があるうかと、道行く人のささやき交す白壁町。夏なれば、すいと飛びだす迷い螢を、あれさ待ちなと、団扇で追い寄るしなやかな手も見られるであろうが、はや秋の声聞く垣根の外には、朝日を受けた小葡萄の房が、漸く小豆大のかたちをつらねた影を、真下の流れに漂わせているばかりであつた。

池と名付ける程ではないが、一坪余りの自然の水溜りに、十匹ばかりの緋鯉が数え

られるその鯉こいの背せを覆おつて、なかば花はなの散ちりかけた萩はぎのうねりが、一ひと叢むらぐつと大手おおてを広ひろげた枝えだの先さきから、今いましもぼたりと落おちたひとしづく。波紋はもんが次第しだいに大おおきく伸のびたささやかな波なみの輪わを、小枝こえだの先さきでかき寄せながら、じつと水みずの面おもを見詰みつめていたのは、四十五しごの年としよりは十年ねんも若わかく見みえる、五尺しやくに満みたない小作こづくりの春信はるのぶであつた。

おおかた銜くわえた楊枝ようじを棄すてて、顔かおを洗あらつたばかりなのであらう。まだ右手みぎてに提さげた手てぬぐ拭いは、重おもく濡ぬれたままになつていた。

「藤吉とうきち」

春信はるのぶは、鯉こいの背せから眼めを放はなすと、急きゆうに思おもひだしたように、縁先えんさきの万年青おもとの葉はを掃除そうじしている、少年しょうねんの門弟もんてい藤吉とうきちを呼よんだ。

「へえ」

「八つあんは、まだ帰かえつて来こないようだの」

「へえ」

「おせんもまだ見みえないか」

「へえ」

「堺屋さかいやの太夫たゆうもか」

「へえ」

「おまえちよいと、枝折戸へ出て見て来な」

「かしこまりました」

藤吉は、万年青の葉から掃除の筆を放すと、そのまま萩の裾を廻つて、小走りにおもてへ出て行つた。

「今時分、おせんがいないはずはないから、ひよつとすると八五郎の奴、途中で誰かに遇つて、道草を食つてるのかも知れぬの。堺屋でもどつちでも、早く来ればいいのに。」

濡れた手拭を、もう一度丁寧に絞つた春信は、口のうちでこう呟きながら、おもむろに縁先の方へ歩み寄つた。すると、その額の汗を拭きながら駆け込んで来たのは、摺師の八五郎であつた。

「行つてめえりやした」

「御苦労、御苦労。おせんはいたかの」

「へえ。居りやした。でげすが師匠、世の中にや馬鹿な野郎が多いのに驚きやしたよ。あつしが向うへ着いたのは、まだ六つをちつと回つたばかりでげすのに、もうお前さん、

かぎ屋の前にや、人が束ひとたばなつてゐるじやござんせんか。それも、女一人おんなひとりいるんじやねえ。みんな、おいらこそ江戸一番えどばんの色男いろおとこだと、いわぬばかりの顔かおをして、反りそッかえつてゐる野郎やろうぞつきでござアね。——おせんちゃんにや、千人にんおとこの男が首くびッたけンなつても、及およばぬ鯉こいの滝たきのぼりだとは、知らねえんだから浅間あさましいや」

「八つあん。おせんおせんの返事へんじはどうだつたんだ。直ぐすに來るとか、來ないとか」

「めえりやすとも。もうおツつけ、そこいらで声こえが聞きこえますぜ」

八五郎ろうは得意とくいそうに小首こくびをかしげて、枝折戸しおりどの方ほうを指ゆびさした。

五

枝折戸しおりどの外そとに、外道げどうの面つらのような顔かおをして、ずんぐり立たつて待まつていた藤吉とうきちは、駕籠かごの中なかからこぼれ出でたおせんおせんの裾すその乱みだれに、今いましもきよろりと、団栗どんぐりまなこを見張みはつたところだつた。

「やツ、おせんちゃん。師匠ししょうがさつきから、首くびを長ながくしてお待まちかねだぜ」

朱しゆとお納戸なんどの、二こくの鼻緒はなおの草履ぞうりを、後うしろの仙藏せんぞうにそろえさせて、扇あふぎで朝日あさひを避さけな

がら、静かに駕籠を立ち出たおせんは、どこぞ大店の一人娘でもあるかのように、如く何にも品よく落着いていた。

「藤吉さん。ここであたしを、待つてでござんすかえ」

「そうともさ、肝腎の万年青の掃除を半端でやめて、半時も前から、お前さんの来るのを待つてたんだ。——だがおせんちゃん。お前は相変らず、師匠の絵のように綺麗だのう」

「おや、朝ツからおなぶるかえ」

「なぶるどころか。おいらア惚れ惚れ見とれてるんだ。顔といい、姿といい、お前ほどの佳い女は江戸中探してもなからうツて、師匠はいつも口癖のようにいつてなさるぜ。うちのお鍋も女なら、おせんちゃんも女だが、おんなじ女に生れながら、お鍋はなんて不纏緻なんだろう。お鍋とはよく名をつけたと、おいらアつくづくあいつの、親父の智恵に感心してるんだが、それと違つておせんさんは、弁天様も跣足の女ツぱり。いやもう江戸はおろか日本中、鉦と太鼓で探したつて……」

「おいおい藤さん」

肩を掴んで、ぐいと引つ張つた。その手で、顔を逆さに撫でた八五郎は、もう一度帯を

把とつて、藤吉とうきちを枝折戸しおりどの内うちへ引きずり込んだ。

「何をなにするんだ。八つあん」

「何もなにこうありやアしねえ。つべこべと、余計よけいなことをいつてねえで、速はやくおせんちゃんを、奥おくへ案内あんないしてやらねえか。師匠ししょうがもう、茶ちやを三杯ぱいも換かえて待ちまかねだぜ」

「おっと、しまった」

「おせんちゃん。少しすこも速はやく、急いそいだ、急いそいだ」

「ほほほほ。八つあんがまた、おどけた物もののいいようは。……」

駕籠かごを帰かえしたおせんすがたの姿ことぶは、小溝ことぶへ架かけた土橋どばしを渡わたつて、逃のがれるように枝折戸しおりどの中なかへ消きえて行いつた。

「ふん、八五郎ろうの奴やつ、余計よけいな真似まねをしやアがる。おせんちゃんあんないやくの案内あんない役やくは、いつさいがっさい、おいらときまつてるんだ。——よし、あとで堺屋さかいやの太夫たゆうが来きたら、その時ときあいつに辱はじをかかせてやる」

手ての内うちの宝たからを奪うばわれでもしたように、藤吉とうきちは地駄じだ駄踏だふんで、あとから、土橋どばしをひと飛とびに飛とんで行いつた。

鉤かぎなりに曲まがつた縁先えんさきでは、師匠ししょうの春信はるのぶとおせんすがたとが、既すでに挨拶あいさつを済すませて、池いけ

の鯉こいに眼めをやりながら、何事なにことかを、声こえをひそめて話はなし合あっていた。

「八つあん、ちよいと来てくんな」

「何なんだ藤とうさん」

立たつて来きた八五郎ろうを、睨にらめるようにして、藤吉とうきちは口くちを尖とがらせた。

「お前まえ、あとから誰だれが来くるか、知しつてるか」

「知しらねえ」

「それ見みな。知しらねえで、よくそんなお接介せつかいが出来できたもんだの」

「お接介せつかいたア何なんのこツた」

「おせんちゃんを、先さきに立たつて連れてくなんぞ、お接介せつかいだよ」

「冗談じやうだんじゃねえ。おせんちゃんは、師匠ししょうに頼たのまれて、おいらが呼よびに行いつたんだぜ。

——おめえはまだ、顔かおを洗あらわねえんだの」

顔かおはとうに洗あらつていたが、藤吉とうきちの眼頭めがしらには、目脂めやにが小汚こぎたなくこすり付ついていた。

赤^{あか}とんぼが障^{しょう}子^じへくつきり影^{かげ}を映^{うつ}した画^が室^{しつ}は、金^{きん}の砂^{すな}子^こを散^ちらしたように明^{あか}るかつた。
 広^{ひろ}々と庭^{にわ}を取^とつてはあるが、僅^{わず}かに三^ま間^{かん}を数^{かず}えるばかりの、茶^{ちや}室^{しつ}がかつた風^{ふう}流^{りゅう}
 の住^{すま}居^いは、ただ如^{いか}何^なにも春^{はる}信^{のぶ}らしい好^{この}みにまかせて、手^ていれが行^ゆき届^{とど}いてというだ
 けのこと、諸^{しよ}大^{だい}名^みの御^ご用^{よう}絵^え師^しなどにくらべたら、まことに粗^そ末^{まつ}なものであつた。

その画^が室^{しつ}の中^{なか}ほどこに、煙^{たば}草^こ盆^{ぼん}をはさんで、春^{はる}信^{のぶ}とおせんとは対^{たい}座^ざしていた。おせん
 の初^うな心^{ごころ}は、春^{はる}信^{のぶ}の言^{こと}葉^はにためらいを見^みせているのであらう。うつ向^むいた眼^め許^{もと}には、ほ
 のかな紅^{べに}を差^さして、鬢^{びん}の毛^けが二^{すじ}筋^{すじ}、夢^{ゆめ}見^みるように頬^ほに乱^{みだ}れかかつていた。

「どうだの、これは別^{べつ}に、おいらが堺^{さかい}屋^やから頼^{たの}まれた訳^{わけ}ではないが、何^なんといつても中^な
 村^{かむら}松^{しょう}江^{こう}なら、当^{とう}時^じ押^おしも押^おされもしない、立^{りつ}派^ぱな太^た夫^{ふう}。その堺^{さかい}屋^やが秋^{あき}の木^き挽^き町^{ちょう}で、
 お前^{まえ}のことを重^{じゅう}助^{すけ}さんに書^かきおろさせて、舞^{いた}台^のに上^のせようというのだから、まづ願^{ねが}つ
 てもないもつけの幸^{さい}い。いやの応^{おう}のといふことはなからうじやないか」

「はい、そりやアもう、あたしに取^とつては勿^{もつ}体^{たい}ないくらい御^ご鼻^ひ真^ま、いや応^{おう}いつたら、
 眼^めがつぶれるかも知^しれませぬが。……」

「それなら何^なんでの」

「お師^し匠^{しょう}さん、堪^{かん}忍^{にん}しておくんなさい。あたしや知^しらない役^{やく}者^{しやしゅう}衆^{しゅう}と、差^さしで会^あう

のはいやでござんす」

「はッはッは、何かと思つたら、いつもの馬鹿氣たはにかみからか。ここへ堺屋を招んだのは、何もお前と差しで会わせようの、二人で話をさせようのと、そんな訳合じアありやしない。松江は日頃、おいらの絵が大好きとかで、板おろしをしたのはもとより、版下までを集めている程の好き者仲間、それがゆうべ、芝居の歸りにひよっこり寄つて、この次の狂言には、是非とも笠森おせんちゃんを、芝居に仕組んで出したいとの、たつての望みさ。どういう筋に仕組むのか、そいつは作者の重助さんに謀つてからの寸法だから、まだはつきりとはいえないとのことだった、松江が写したお前の姿を、舞台上で見られるとなりや、何んといつても面白い話。おいらは二つ返事で、手を打つてしまったんだ。——そこで、善は急げのたとえをそのまま、あしたの朝、ここへおせんに来てもらおうから、太夫ももう一度、ここまで出て来てもらいたいと、約束事が出来たんだが、——のうおせん。おいらの前じゃ、肌まで見せて、絵を写させるお前じやないか、相手が誰であろうと、ここで一時、茶のみ話をするだけだ。心持よく会つてやるがいいわな」

「さア。——」

「今更思案もないであろう。こうしているうちにも、もうそこらへ、やって来たかも知れまいて」

「まア、師匠さん」

「はッはッは。お前、めつきり気が小さくなったの」

「そんな訳じやござんせぬが、あたしや知らない役者衆とは。……」

「ほい、まだそんなことをいつてるのか。なまじ知つてる顔よりも、はじめて会つて見る方に、はずむ話があるものだ。——それにお前、相手は当時上上吉の女形、会つてるだけでも、気が晴れ晴れとするようだぜ」

ふと、とんぼの影が障子から離れた。と同時に藤吉の声が、遠慮勝ちに縁先から聞えた。

「師匠、太夫がおいでになりました」

「おおそうか。直ぐにこつちへお通ししな」

じつと畳の上を見詰めているおせんは、たじろぐように周囲を見廻した。

「お師匠さん、後生でござんす。あたしをこのまま、帰しておくんなさいまし」

「なんだって」

春信は大きく眼を見ひらいた。

七

たとえば青苔の上に、二つ三つこぼれた水引草の花にも似て、畳の上に裾を乱して立ちかけたおせん、浮き彫りのような爪先は、もはや固く畳を踏んではいなかった。

「ははは、おせん。みつともない、どうしたというんだ」

春信の、いささか当惑した視線は、そのまま障子の方へおせんを追って行ったが、やがて追い詰められたおせんの姿が、障子の際にうづくまるのを見ると、更に解せない思いが胸の底に拵がつてあわてて障子の外にいる藤吉に声をかけた。

「藤吉、堺屋の太夫に、もうちつとの間、待つておもらい申してくれ」

「へえ」

おおかた、もはや縁先近くまで来ていたのであろう。藤吉が直ぐさま松江に春信の意を伝えて、池の方へ引き返してゆく気配が、障子に映った二つの影にそれと知れた。

「おせん」

「あい」

「お前、何か訳があつてだの」

「いいえ、何も訳はござんせぬ」

「隠すにや当らないから、有様にいつて見な、事と次第に因つたら、堺屋は、このままお前には会せず、帰つてもらふことにする」

「そんなら、あたしの願いを聞いておくんなさいますか」

「聞きもする。かなえもする。だが、その訳は聞かしてもらふぜ」

「さアその訳は。――」

「まだ隠したてをするつもりか。あくまで聞かせたくないというなら、聞かずに済ませもしようけれど、そのかわりおいらはもうこの先、金輪際、お前の絵は描かないからそのつもりでいるがいい」

「まアお師匠さん」

「なアにいいやな。笠森のおせんは、江戸一番の縹緞佳しだ。おいらが拙い絵なんぞに描かないでも、客は御府内の隅々から、蟻のように寄ってくるわな。――いいいたくな

けりや、聞かずにいようよ」

いたずらに、もてあそんでいた三味線の、いとがぽつんと切れたように、おせんは身内に積る寂しさを覚えて、思わず瞼が熱くなつた。

「お師匠さん、堪忍しておくんない。あたしや、お母さんにもいうまいと、固く心にきめていたのでござんすが、もう何事も申しましよう。どつと笑つておくんないまし」

「おお、ではやつぱり何かの訳があつて。……」

「あい、あたしやあの、浜村屋の太夫さんが、死ぬほど好きなんでござんす」

「えッ。菊之丞に。——」

「あい。おはずかしゆうござんすが。……」

消えも入りたいおせんの風情は、庭に咲く秋海棠が、なまめき落ちる姿をそのまま悩ましさに、面を袂におおい隠した。

ジツと、釘づけにされたように、春信の眼は、おせんの襟脚から動かなかつた。が、やがて静かにうなずいたその顔には、晴れやかな色が漂つていた。

「おせん」

「あい」

「よくほれた」

「えッ」

「当代一の若女形、瀬川菊之丞なら、江戸一番のお前の相手にや、少しの不足もあるまいからの。——判った。相手がやつぱり役者とあれば、堺屋に会うのは気が差さう。こりやア何んとでもいつて断るから、安心するがいい」

八

勢い込んで駕籠で乗り着けた中村松江は、きのうと同じように、藤吉に案内されたが、直ぐ様通してもらえないはずの画室へは、何やら訳があつて入ることが出来ぬところから、ぽつねんと、池の近くにたたずんだまま、人影に寄つて来る鯉の動きをじつと見詰めていた。

師の歌右衛門を慕つて江戸へ下つてから、まだ足かけ三年を経たばかりの松江が、鼻筋といつても、江戸役者ほどの数がある訳もなく、まして当地には、当代随一の

若女形といわれる、二代目瀬川菊之丞が全盛を極めていることとて、その影は決して濃いものではなかった。が、年は若いし、芸は達者であるところから、作者の中村重助が頻りに肩を入れて、何か目先の變つた狂言を、出させてやりたいの心であろう。近頃春信の画で一層の評判を取った笠森おせんを仕組んで、一番当てさせようと、松江が春信と懇意なのを幸い、善は急げと、早速きのうここへ訪ねさせての、きようであつた。

「太夫、お待ち遠さまでござんしょうが、どうかこちらへおいでなすつて、お茶でも召上つて、お待ちなすつておくんなまし」

藤吉にも、何んで師匠が堺屋を待たせるのか、一向合点がいかなかったが、張り詰めていた氣持が急に緩んだように、しよんぼりと池を見詰めて立つている後姿を見ると、こういつて声をかけずにはいられなかった。

「へえ、おおきに。——」

「太夫は、おせんちゃんには、まだお会いなすつたことがないんでござんすか」

「へえ、笠森様のお見世では、お茶を戴いたことがおますが、先様は、何を知つてではござりますまい。——したが若衆さん。おせんさんは、もはやお見えではおますま

いかな」

「つい今し方。——」

「では何か、絵でも習うていやはるのでは。——」

「さア、大方そんなことで良いでしょうが、どっちにしても長いことじやござんすまい。そこは日が当りやす。こつちへおいでなすツて。……」

ふと踵を返して、二足三足、歩きかかった時だった。隅の障子を静かに開けて、庭に降り立った春信は、蒼白の顔を、振袖姿の松江の方へ向けた。

「太夫」

「おお、これはお師匠さんは。早からお邪魔して、えろ済みません」

「済まないのは、お前さんよりこつちのこと、折角眠いところを、早起きをさせて、わざわざ来てもらいながら、肝腎のおせんが。——」

「おせんさんが、なんぞしやりましたか」

「急病での」

「えッ」

「血の道でもあろうが、ここへ来るなり頭痛がするといつて、ふさぎ込んでしまったまま、

いまだに顔も挙げない始末、この分じや、半時待ってもらっても、今朝は、話は出来まいと思つての、お気の毒だが、またあらためて、会つてやつておもらい申すより、仕方がないじやなかうかと、実は心配している訳だが。……」

「それはまア」

「のう太夫。お前さん、詫はあたしから幾重にもしようから、きようはこのまま、帰つておくんなさるまいか」

「それアもう、帰ることは、いつでも帰りますけれど、おせんさんが急病とは、気がかりでおますさかい。……」

「いや、氣に病むほどのことでもなかうが、何せ若い女の急病での。ちつとばかり、朝から世間が暗くなつたような氣がするのさ」

「へえ」

春信の眼は、松江を反れて、地に曳く萩の葉に移っていた。

雨

一

「おい坊主、火鉢の火が消えちやつてるぜ。ぼんやりしてえちや困るじやねえか」
 浜町の細川邸の裏門前を、右へ折れて一町あまり、角に紺屋の干し場を見て、
 伊勢喜と書いた質屋の横について曲がった三軒目、おもてに一本柳が長い枝を垂れた
 のが目印の、人形師亀岡由斎のささやかな住居。

まだ四十を越していくつにもならないというのが、一見五十四五に見える。鬚も白髪も
 おかまいなし、床屋の鴨居は、もう二月も潜ったことがない程の、垢にまみれたうす汚な
 さ。名人とか上手とか評判されているだけに、坊主と呼ぶ十七八の弟子の外は、猫
 の子一匹もない、たつた二人の暮しであつた。

「おめえ、いつてえ弟子に来てから、何年経つと思つてゐるんだ」

「へえ」

「へえじやねえぜ。人形師に取つて、胡粉の仕事がどんなもんだぐれえ、もうてえげえ
 判つても、罰は当るめえ。この雨だ。愚図々々してえりや、湿気と呼んで、みんなねこん

なつちまうじやねえか。速くおこしねえ」

「へえ」

「それから何んだぜ。火がおこつたら、直ぐに行燈を掃除しときねえよ。こんな日ア、いつもより日の暮れるのが、ぐつと早えからの」

「へえ」

「ふん。何をいつても、張合いのねえ野郎だ。飯は腹一杯食わせてあるはずだに。もつとしつかり返事をしねえ」

「かしこまりました」

「糠に釘ツてな、おめえのこつた。——火のおこるまで一服やるから、その煙草入を、こつちへよこしねえ」

「へえ」

「なぜ煙管を取らねえんだ」

「へえ」

「それ、螢火ほどの火もねえじやねえか。何んで煙草をつけるんだ」
相手は黙々とした少年だが、由齋は、たとえにある箸の揚げおろしに、何か小

言をいわないではいられない性分なのであらう。殆んど立続けに口小言をいいながら、胡坐の上にかけた古い浅黄のきれをはずすと、火口箱を引き寄せて、鉄の長煙管をぐつと銜えた。

勝手元では、頻りにばたばたと七輪の下を煽ぐ、団扇の音が聞えていた。

その団扇の音を、じりじりと妙にいら立つ耳で聞きながら、由齋は前に立てかけている、等身大に近い女の人の形を、睨めるように眺めていたが、ふと何か思い出したのであらう。あたり憚らぬ声で勝手元へ向つて叫んだ。

「坊主。坊主」

「へえ」

「おめえ、今朝面を洗ったか」

「へえ」

「嘘をつけ。面を洗った奴が、そんな粗相をするはずアなからう。ここへ来て、よく人形の足を見ねえ。甲に、こんなに蠟が垂れているじゃねえか」
 恐る恐る仕事場へ戻った。坊主の足はふるえていた。

「こいつアおめえの仕事だな」

「知りません」

「知らねえことがあるもんか。ゆうべ遅く仕事場へ蝋燭を持って這入って来たなア、おめえより外にねえ筈だぜ。こいつアただの人形じゃねえ。菊之丞さんの魂までも彫り込もうという人形だ。粗相があつちやアならねえと、あれ程いっておいたじゃねえか」

二

廂の深さがおいかぶさつて、雨に煙つた家の中は、蔵のように手許が暗く、まだ漸く石町くちようの八つの鐘を聞いたばかりだというのに、あたりは行燈がほしいくらい、鼠色ねずみいろにぼけていた。

軒のきの樋といはこ二十年の間、一度も換えたことがないのであらう。竹の節々に青苔が盛りあがり上つて、その破れ目から落ちる雨水が砂時計の砂が目もりを落ちるのと同じに、絶え間なく耳を奪つた。

への字に結んだ口に、煙管を銜えたまま、魅せられたように人形を凝視し続けて

いる由齋ゆうさいは、何か大きく頷うなずくと、今いまし方坊主がたぼうずがおこして来きた炭火すみびを、十能のうから火鉢ひばちにか
けて、独りひとひそかに眉まゆを寄よせた。

坊主ぼうず。おめえ、表おもての声こゑが聞きこえねえのか」

誰だれか来きておりますか」

来きてる。戸とを開あけて見みねえ」

「へえ」

「だが、こつちへ通とおしちやならねえぜ」

半信半疑はんしんはんぎで立たつて行いつた坊主ぼうずは、背せをまるくして、雨戸あまどの隙間すきまから覗のぞいた。

「おや、あたしでござんすよ」

「おお、おせんさん」

坊主ぼうずは、たてつけの悪い雨戸あまどを開あけて、ペこりと一つ頭あたまをさげた。そこには頭巾ずきんで顔かおを
包つつんだおせんが、傘かさを肩かたにして立たつていた。

「親方おやかたは」

「仕事しごとなんです。――」

「御免ごめんなさいよ」

「あッ いけません。お前さんをお上げ申しちゃ、叱られる」

「ほほほ、そんな心配は止めにしてさ」

「でもあたしが親方に。――」

「坊主」と、鋭い声が奥から聞えた。

「へえ」

「いまもいった通りだ。たとえどなたでも、仕事場へは通しちやならねえ」

「親方」と、おせんは訴えるように声をかけた。

「どうかきようだけ、堪忍しておくんなさいよ」

「いけねえ」

「あたしやお前さんに、断られるのを知りながら、もう辛抱が出来なくなつて、この雨の中を来たんじゃないか。――後生でござんす。ちよいとの間だけでも……」

「折角だが、お断りしやすよ。あつしやアお前さんから、この人形を請合う時、どんな約束をしたかはつきり覚えていなさろう。――のうおせんちゃん。あの時お前は何んといいなすつた。あたしや死んでる人形は欲しくない。生きた、魂のこもつた人形をこさえておくんなさるなら、どんな辛抱でもすると、あれ程堅く約束をしたじ

やアねえか。——江戸一番の女形、瀬川菊之丞の生人形を、舞台のままに彫ろうツ
 てんだ。なまやさしい業じやアねえなア知れている。あつしもきようまで、これぞと思つ
 た人形を、七つや十はこさえて来たが、これさえ仕上げりや、死んでもいいと思つた
 程、精魂を打込んだ作はしたこたアなかった。だが、今度の仕事ばかりアそうじやアね
 え。この生人形さえ仕上げたら、たとえあすが日、血へどを吐いてたおれても、決し
 て未練はねえと、覚悟をきめての真剣勝負だ。——お前さんが、どこまで出来たか見
 たいという。その心持ア、腹の底から察してるが、ならねえ、あつしやア、いま、人
 形を塗つてるんじやアねえ。おのが魂を血みどろにして、死ぬか生きるかの、仕事を
 してるんだからの」
 由斎の声を聞きながら、ひと足ずつ後ずさりしていたおせんは、いつか礫にされたよ
 うに、雨戸の際へ立ちすくんでいた。

三

ひと目でいい、ひと目でいいから会いたいとの、切なる思いの耐え難く、わざと両国

橋くばしの近くで駕籠かごを捨てて、頭巾ずきんに人目ひとめを避けながら、この質屋しちやの裏うらの、由齋ゆうさいの仕事場しごとばを訪おとずれたおせんおとすの胸むねには、しとど降ふる雨あめよりしげき思おもいがあつた。

年としからいえば五つの違ちがひはあつたものの、おなじ王子おうじで生うまれた幼なじみの菊之丞きくのじようとは、けし奴やつこの時分じぶんから、人もうらやむ仲好なかよしにて、ままごと遊びあそびの夫婦めおとにも、吉ちゃんきちはあたいの旦那だんな、おせんちゃんはおいらのお上かみさんだよと、度重たびかさなる文句もんくはいつか遊び仲間あそなかまに知しれ渡わたつて、自分じぶんの口くちからいわずとも、二人ふたりは真まぐさま夫婦ふうふにならべられるのが却かえつてきまり悪わるく、時にはわざと背中せなかあわせにすわる場合ばあいもままあつたが、さて、吉次きちじはやがて舞台ぶたいに出て、子役こやくとしての評判ひやうばんが次第しだいに高たかくなつた時分じぶんから、王子おうじを去さつた互たがいの親おやが、芳町よしやうと蔵前くらまえに別わかれ別わかれに住すむようになつたばかりに、いつか会あつて語る日もなく二年ねんは三年三年は五年と、速はやくも月日つきひは流れ流ながれて、辻番付つじばんづけの組くみあわせに、振袖姿ふりそですがたの生いきいき々きしさは見るみにしても、吉ちゃんきちとおせんちゃんと、呼よび交かわす機おりはまつたたくないままに、過ぎすぎてしまつたのであつた。

女形おやまといえ、中村富十郎なかむらとみじろうをはじめ、芳沢あやめにしろ、中村喜代三郎なかむらきよざうにしろ、または中村糸太郎なかむらくめたろうにしろ、中村松江なかむらしやうこうにしろ、十人にんいれば十人にんがいずれもそろつて上かみがたくた方下りひとたちの人達である中に、たつた一人ひとり、江戸えどで生うまれて江戸えどで育そだつた吉次きちじが、他ほかの女形おやま

を尻目にかけて、めきめきと売出した調子もよく、やがて二代目菊之丞を継いでからは上上吉の評判記は、弥が上にも人気を煽つたのであらう。「王子路考」の名は、押しも押されもしない、当代随一の若女形と極まつて、出し物は何んであらうと菊之丞の芝居とさえいえば、見ざれば恥の如き有様となつてしまった。

したがつて、人気役者に付きまとう様々な噂は、それからそれへと、日毎におせんのみへ伝えられた。——どこそこのお大名のお妾が、小袖を贈つたとか。何々屋の後家さんが、帯を縫つてやつたとか。酒問屋の娘が、舞台で挿した簪が欲しさに、親の金を十両持ち出したとか。数えれば百にも余る女出入の出来事は、おせんの茶見世へ休む人達の間になさえ、聞くともなく、語るともなく伝えられて、嘘も真も取交ぜた出来事が、きのうよりはきよう、きようよりは明日と、益々菊之丞の人気を高くするばかり。が、おせんの胸の底にひそんでゐる、思慕の念は、それらの噂には一切おかまいなしに日毎につのつてゆくばかりだった。それもそのはずであらう。おせんが慕う菊之丞は、江戸中の人気を背負つて立つた、役者の菊之丞ではなくて、かつての幼なじみ、王子の吉ちゃんその人だったのだから。——

何某の御子息、何屋の若旦那と、水茶屋の娘には、勿体ないくらいの縁談も、

これまでに五つや十ではなく、中には用人を使者に立てての、れっきとしたお旗本からの申込みも二三は数えられたが、その度毎に、おせんの首は横に振られて、あつたら玉の輿に乗りそこねるかと思ふ人々を惜しがらせて来た臍甲斐なき、しかも胸に秘めた菊之丞への切なる思いを、知る人としては一人もなかった。

名人由斎に、心の内を打ちあけて、三年前に中村座を見た、八百屋お七の舞

台姿をそのままの、生人形に頼み込んだ半年前から、おせんはきょうか明日かと、

出来上る日を、どんなに待ったか知れなかったが、心魂を傾けつくす仕事だから、たと

えなにがあつても、その日までは見に来ちやアならねえ、行きますまいと誓った言葉の手

前もあり、辛抱に辛抱を重ねて来たどのつまりが、そこは女の乱れる思いの堪え難

く、きのうときやうの二度も続けて、この仕事場を、ひそかに訪れる気になったのである

う。頭巾の中に瞠った眼には、涙の露が宿っていた。

「親方。——もし親方」

もう一度おせんは奥へ向つて、由斎を呼んで見た。が、聞えるものは、わずかに樋を伝つて落ちる、雨垂れの音ばかりであつた。

軒端の柳が、思い出したように、かるく雨戸を撫でて行つた。

四

「若旦那。——もし、若旦那」

「うるさいね。ちと黙ってお歩きよ」

「そう仰しやいますが、これを黙って居りましたら、あとで若旦那に、どんなお小言を頂戴するか知れませんか」

「何んだッて」

「あすこを御覧なさいまし。ありやアたしかに、笠森のおせんさんでござんしょう」

「おせんがいるッて。——ど、どこに」

薬研堀の不動様へ、心願があつての帰りがけ、黒八丈の襟のかかったお納戸茶の半合羽に奴蛇の目を宗十郎好みに差して、中小僧の市松を供につれた、紙問屋橘屋の若旦那徳太郎の眼は、上ずったように雨の中を見詰めた。

「あすこでござんすよ。あの筆屋の前から両替の看板の下を通ってゆく、あの頭巾をかぶった後姿。——」

「うむ。ちよいとお前、急いで行つて、見届けといで」

「かしこまりました」

頭あたまのてつぺんまで、汚泥はねの揚あがるのもお構かまいなく、横よこッ飛とびに飛とび出した市松いちまつには、雨あめなんぞ、芝居しばいで使う紙かみの雪ゆきほどにも感かんじられなかつたのであろう。七八間けんさき先さきを小こきざみに往いく渋蛇しぶじやの目めの横よこを、一文字もんじに駆脱かけぬけたのも束つかの間ま、やがて踵くびすを返かえすと、鬼おにの首くびでも取とつたように、喜よろこび勇いさんで駆かけ戻もどつた。

「どうした」

「この二つの眼めで睨にらんだ通り、おせんさんに違ちがいござんせん」

「これこれ、何なんでそんな頓とんきよう 狂こえな声こえを出だすんだ。いくら雨あめの中なかでも、人ひと様さまに聞きかれ
たら事ことじやアないか」

「へいへい」

「お前まえ、あとからついといで」

目めはしの利きいたところが、まなず何なによりの身しん上しょうなのであろう。若旦那わかだんなのお供ともといえ
ば、常つねに市いちどんと朋輩ほうばいから指さされる慣なわしは、時ときにかけ蕎麦そばの一杯ぱいくらいには有ありつけ
るものの、市松いちまつに取とつては、寧むしろ見世みせに坐すわつて、紙かみの小口こぐちをそろえている方ほうが、どのく

らい楽だか知れなかつた。

が、そんな小僧の苦楽なんぞ、背中にとまった蠅程にも思わない徳太郎の、おせんき聞いた夢中の歩みは、合羽の下から覗いている生ッ白い脛に出た青筋にさえうかがわれて、道の良し悪しも、横ッ降りになりかかる雨のしぶきも、今は他所の出来事でもあるように、まったく意中にないらしかった。

「ちよいと姐さん。いえさ、そこへ行くのは、おせんちゃんじゃないかい」
それと呼び止めた徳太郎の声は、どうやら勝手のわるさにふるえていた。

「え」

くるりと振り向いたおせんは、頭巾の中で、眼だけに愛嬌をもたせながら、ちらりと徳太郎の顔を偷み見たが、相手がしばしば見世へ寄つてくれる若旦那だと知ると、あらためて腰をかがめた。

「おやまア若旦那、どちらへおいででござんす」

「つい、その不動様へ、参詣に行ったのさ。——そうしてお前さんは」

「お母さんの薬を買いに、浜町までまいりました。」

「浜町。そりやアこの雨に、大抵じやあるまい。お前さんがわざわざ行かないでも、

ちよいと一言聞いてれば、いつでもうちの小僧に買いにやってあげたものを」

「有難うはござんすが、親に服ませるお薬を人様にお願ひ申しましては、お稲荷様の罰が当ります」

「成る程、成る程、相変らずの親孝行だの」

徳太郎はそういつて、ごくりと一つ固唾を飲んだ。

五

当代の人気役者宗十郎に似ていると、太鼓持の誰かに一度いわれたのが、無上に機嫌をよくしたものの、のほほんと納まった色男振りには、見る程の者をして、ことごとく虫ずの走る思いをさせずにはおかないくらい、気障気たつぷりの若旦那徳太郎ではあったが、親孝行の話を切ツかけに、あらたまっておせんを見詰めたその眼には、いつもと違った真剣な心持が不思議に根強く現れていた。

「お前さんは、これから何か、急な御用がお有かの」

「あい、肝腎のお見世の方を、脱けて来たのでござんすから、一刻も速く帰りませぬと、

お母さんかあにいらぬ心配しんぱいをかけますし、それに、折角せつかくのお客様きやくさまにも、申訳もうしわけがござんせぬ」

「お客きやくの心配しんぱいは、別にべついりやアすまいがの。しかし、お母さんかあといわれて見みると。……」

「何か御用ごようでござんすかえ」

「なアにの。思おもいがけないところで出遭であつた、こんな間のいいことは、願ねがつてもありやアしないからひとつどこぞで、御飯ごはんでもつき合あつてもらおうと思おもつてさ」

「おや、それは御親切ごしんせつに、有難ありがとうはござんすが、あたしやいまも申もうします通り、風邪かぜを引ひいたお母さんかあと、お見世みせへおいでのお客様きやくさまがござんすから。——」

「この雨あめだ。いくら何なんでも、お客きやくの方は、氣きになるほど行いきもしまい。それとも誰だれで、約束やくそくでもした人ひとがお有ありかの」

「まア何なんでそのようなお人ひとが。——」

「そんなら別べつに、一時ときやそこいら遅おそくなつたとて、案あんすることもなからうじやないか」

「お母さんかあが首くびを長ながくして、薬くすりを待まちつてでございます」

「これ、おせんちゃん」

「ああもし。——」

「お手間を取らせることじゃない。ちと折いつて、相談したい訳もある。ついそこまで、ほんのしばらく、つき合っておくれでないか」

「さアそれが。……」

「おまえ、お袋さんの、薬を買いに行つたとは、そりや本当かの」

「えッ」

「本当かと訊いてるのさ」

「何んで、あたしが嘘なんぞを。――」

「そんならその薬の袋を、ちよいと見せておくれでないか」

「袋とえ。――」

「持つてはいないとおいいだろう。ふふふ。やつぱりお前は、あたしの手前をつくらつて、根もない嘘をついたんだの、おおかた好きな男に、会いに行つた帰りであろう。それと知つたら、なおさらこのまま帰すことじゃないから、観念おし」

「あれ若旦那。――」

「いいえ、放すものか、江戸中に、女の数に降る程あつても、思い詰めたのはお前一人。ここで会えたな、日頃お願い申した、不動様の御利益に違いない。きょうというきょう

はたとえ半時はんときでもつき合あつてもらわれないことにや。……」

押おえた袂たもとを振り払はらつて、おせんが体からだをひねつたその刹せつ那な、ひよいと徳太郎とくたろうの手首てくびをつかんで、にやり笑わらつたのは、傘かさもささずに、頭あたまから桐油とうゆを被かぶつた彫師ほりしの松五郎まつごろうだった。

「若旦那わかだんな、殺せつ生しょうでげすぜ」

「ええ、うるさい。余計よけいな邪間じやまだてをしないで、引ひッ込こんでおくれ」

「はははは。邪間じやまだてするわけじやござんせんが、御覧ごらんなせえやし。おせんちゃんは、こんなにいやだといつてゐるじやござんせんか。若旦那わかだんな、色いろ男おとこの顔かおがつぶれやすぜ」

過日かじつの敵かたきを討うつたつもりなのであろう。松五郎まつごろうはこういつて、髯ひげあとの青い顎あごを、ぐつと徳太郎とくたろうの方ほうへ突きだした。

六

「はッはッは。若旦那わかだんな、そいつア御無理ごむりでげすよ。おせんは名代なだいの親孝行おやこうこう、薬くすりを買かいに行いつたといやア、嘘うそも隠かくしもござんすまい。ここで逢あつたが百年目ねんめと、とつ捕つかまえて口く説どこうツたつて、そうは問屋とんやでおろしませんや。——この近所きんじよの揚弓場ようきゆうばの姐ねえさんなら

知らねえこと、かりにもお前さん、江戸一番と評判のあるおせんでげすぜ。いくら若

旦那の御威勢でも、こればツかりは、そう易々たアいきますまいて」

おせんを首尾よく逃してやった雨の中で、桐油から半分顔を出した松五郎は、徳太郎をからかうようにこういうと、我れとわが鼻の頭を、二三度平手で引ッこすつた。

腹立たしさに、なかば泣きたい氣持をおさえながら、松五郎を睨みつけた徳太郎の細い眉は、止め度なくびくびく動いていた。

「市公」

思いがけない出来事に、茫然としていた小僧の市松が、ぺこりと下げた頭の上で、若旦那の声はきりぎりすのようにふるえた。

「馬鹿野郎」

「へえ」

「なぜおせんを捕まえないんだ」

「お放しなすつたのは、若旦那でございます」

「ええうるさい。たとえあたしが放しても、捕まえるのはお前の役目だ。——もうお前なんぞに用はない。今すぐここで暇をやるから、どこへでも行っておしまい」

「ははは。若旦那」と、松五郎が口をはさんだ。「そいつアちと責めが強過ぎやしよう。小僧さんに罪はねえんで。みんなあなたの我ままからじやござんせんか」

「松つあん、お前なんぞの出る幕じやないよ。黙つてておくれ」

「それでもござんしようが、市どんこそ災難だ。何んにも知らずにお供に来て、おせんに遭つたばかりに、大事な奉公をしくじるなんざ、辻占の文句にしても悪過ぎやさアね。堪忍してやつとくんない。——こう市どん。おめえもしつかり、若旦那にあやまんねえ」

「若旦那、どうか御勘弁なすつておくんなさいまし」

「いやだよ。お前は、もう家の奉公人でもなけりや、あたしの供でもないんだから、ちつとも速くあたしの眼の届かないところへ消えちまうがいい」

「消えろとおつしやいまして。……」

「判らずやめ。泥の中へでも何んでも、勝手にもぐつて失せるんだ」

「へえ」

尻ツ端折りの尾氈骨のあたりまで、高々と汚泥を揚げた市松の、猫背の背中へ、雨は容赦なく降りかかつて、いつの間にか人だかりのした辺の有様に、徳太郎は思わ

ず亀かめの子このように首くびをすくめた。

「もし、若旦那わかだんな」

円まるく取巻とりまいた中なかから、ひよつこり首くびだけ差し伸のべて、如何いかにも憚はばつた物腰ものこしの、手てを膝ひざ

の下したまでさげたのは、五十いそがらみのぼて振り魚屋さかなやだった。
徳太郎とくたろうは、偷ぬすむように顔かおを挙げた。

「手前てまえでございます。市松いちまつの親父おやじでございます」

「えッ」

「通りとおがかりの御挨拶ごあいさつで、何なんとも恐おそれいますが、どうやら、市松いちまつの野郎やろうが、飛とんだ粗相そそうをいたしました様子ようす。早速さつそく連れて帰かえりまして、性根しょうねの坐すわるまで、責め折檻せつかんをいたします。どうかこのまま。手前てまえにお渡し下くださいまし」

「おツとツとツと。父とつつあん、そいつアいけねえ。おいらが悪いようにしねえから、おめえはそつちに引ひッ込こんでるがいい」

松五郎まつろうが親爺おやじを制せいしている隙すきに、徳太郎とくたろうの姿すがたは、いつか人込ひとごみの中なかへ消きえていた。

「政吉、辰蔵、亀八、分太、梅吉、幸兵衛。――」

殆んどひといきに、二三日前に奉公に來た八歳の政吉から、番頭の幸兵衛まで、やけ半分に呼びながら、中の口からあたふたと駆け込んで來た徳太郎は、鬚の刷毛先に届く、背中一杯の汚泥も忘れたように、廊下の暖簾口で地駄ン駄踏んで、おのが合羽をむしり取つていた。

「へい、これは若旦那、お早いお歸りでございます」

番頭の幸兵衛は、帳付の筆を投げ出して、あわてて暖簾口へ顔を出したが、ひと目徳太郎の姿を見るとつきり、途中で喧嘩でもして來たものと、思い込んでしまったのであろう。頭のとツ辺から足の爪先まで、見上げ見おろしながら、言葉を吃らせた。

「ど、どうなすつたのでございます」

「番頭さん、市松に直ぐ暇をだしてくれ」

「市松が、な、なにか、粗相をいたしましたか」

「何んでもいいから、あたしのいった通りにしておくれ。あたしやきようくらい、恥をか

いたこたアありやしない。もう口惜しくツて、口惜しくツて。……」

「そ、それはまたどんなことでございます。小僧の粗相は番頭の粗相、手前から、どのようなおわびはいたしましょうから、御勘弁願えるものでございましたら、この幸兵衛に御免じ下さいまして。……」

「余計なことは、いわないでくれ」

「へい。……左様でございましょうが、お見世の支配は、大旦那様から、一切お預かりいたして居ります幸兵衛、あとで大旦那様のお訊ねがございました時に、知らぬ存ぜぬでは通りませぬ。どうぞその訳を、仰しやつて下さいまし」

「訳なんぞ、聞くことはないじゃないか。何んでもあたしのいった通り、暇さえ出してくれりやいいんだよ」

駄々子がおもちや箱をぶちまけたように、手のつけられないすね方をして徳太郎の耳へ、いきなり、見世先から聞え来たのは、松五郎の笑い声だった。

「はッはッは、若旦那、まだそんなことを、いつといでなさるんでござんすかい。耳寄りの話を聞いてめえりやした。いい智恵をお貸し申しやすから、小僧さんのしくじりなんざさっぱり水に流しておやんなさいまし」

中ちゆう番頭ばんとうから小僧達こぞうたちまで、一同どうの顔かおが一齊せいに松五郎まつろうの方ほうへ向き直むつた。が、徳太とくたろ郎らうは暖簾口のれんぐちから見世みせの方ほうを睨にらみつけたまま、返事へんじもしなかった。

「もし、若旦那わかだんな。悪いこたア申しやせん。お前まえさんが、鯪銚立しやつちよこだちをしてお喜びよろこなさる、うれしい話を聞いてめえりやしたんで。——ここで話はなしちやならねえと仰おつしやるんなら、そちらへ行はなつてお話しはないたしやす。着物きものもぬれちやア居おりやせん。どうでげす。それともこのまま帰かえりやしようか」

被かぶつていた桐油とうゆを、見世みせの隅すみへかなぐり棄すてて、ふところから取出とりだした鉋豆煙管なたまめぎせるへ、吹かますこなたはこの粉煙草きようを器用きように詰つめた松五郎まつろうは、にゅツと煙草盆たばこぼんへ手てを伸のばしながら、ニヤリと笑わらつて暖簾口のれんぐちを見詰みつめた。

「松まつつあん」

「へえ」

「若旦那わかだんなが、こつちへとおいなさる」

「そいつアどうも。——」

「おつと待まつた。その足あしで揚あがられちやかなわな。辰たつどん、裏うらの盥たらいへ水みずを汲くみな」
番頭ばんとうの幸兵衛こうべえは、壁かべの荒塗あらぬりのように汚泥はねの揚あがっている松五郎まつろうの脛すねを、渋しぶい顔かおをし

てじつと見守つた。

「ふふふ、松五郎は、見かけに寄らねえ忠義者でげすぜ」
ひとり言をいつて顎を突出した松五郎の顔は、道化方の松島茂平次をそのままであつ

た。

八

行水でもつかうように、股の付根まで洗つた松五郎が、北向の裏二階にそぼ降る雨の音を聞きながら、徳太郎と対座していたのは、それから間もない後だった。瓦のおもてに、あとからあとから吸い込まれて行く秋雨の、時おり、隣の家から飛んで来た柳の落葉を、貼り付けるように濡らして消えるのが、何か近頃はやり始めた飛び緋のよう

うに眼に映つた。

銀煙管を握つた徳太郎の手は、火鉢の枠に釘着けにされたように、固くなつて動かなかつた。

「ではおせんにや、ちゃんとした情人があつて、この節じゃ毎日、そこへ通い詰めだと

いうんだね」

「まず、ざっとそんなことなんで。……」

「いったい、そのおせんの情人いろうというのは、何者なにものなんだか、松つあん、はつきりあたしに教おしえておくれ」

「さア、そいつアどうも。――」

「何をなにいつてんだね。そこまで明あかしておきながら、あとは幽霊ゆうれいの足あしにしちまうなんて、馬鹿ばかなことがあるもんかね。――お前まえさんさつき、何んなとといったい。若旦那わかだんなが鯁しやつちよこ銚しやう立だちして喜よろこぶ話はなしだと、見世みせであんなに、大おおきなせりふでいったじやないか。あたしや口惜くやしいけれど聞きいてるんだよ。どうせその氣きで来きたんなら、あからさまに、一から十まで話はなししておくれ。相手あいての名なを聞きかないうちは、氣きの毒どくだが松つあん、ここは滅多めったに動うごかしやアしないよ」

「ちよ、ちよいと待まつとくんささい、若旦那わかだんな。無理むりをおいいなすつちや困こまりやす」

「何が無理むりさ」

「何がなにと仰おつしゃつて、実じつアあつしやア、相手あいての名前なまえまじア知しらねえんで。……」

「名前なまえを知らないツて」

「そうなんで。……」

「そんなら、名前はともかく、どんな男なんだか、それをいつとくれ。お武家か、商人か、それとも職人か。——」

「そいつがやつぱり判らねえんで。——」

「松つあん」

徳太郎の声は甲走った。

「へえ」

「たいがいにしとくれ。あたしや酔狂で、お前さんをここへ通したんじゃないんだよ。おせんが隠れて逢っているという、相手の男を知りたいばかりに、見世の者の手前も構わず、わざわざ二階へあげたんじやないか。名を知らないのはまだしものこと、お武家か商人か、職人か、それさえ訳がわからないなんて、馬鹿にするのも大概におし。——もうそんな人にや用はないから、とつと消えて失せとくれよ」

「帰れと仰しやるんなら、帰りもしましょうが、このまま帰っても、ようござんすかね」
「なんだって」

「若旦那。あつしやアなる程、おせんの相手が、どこの誰だか知っちゃいませんが、そ

んなこたア知ろうと思や、半日とかからねえでも、ちやアんと突きとめてめえりやす。それよりも若旦那。もつとお前さんにや、大事なことがありやアしませんかい」

「そりや何んだい」

「まアようがす。とつとと消えて失せろツてんなら、あんまり畳のあつたまらねえうちに、いい加減で引揚げやしよう。——どうもお邪魔いたしやした」

「お待ち」

「何か御用で」

「あたしの大事なことだという、それを聞かせてもらいましよう」
が、松五郎はわざと頬をふくらまして、鼻の穴を天井へ向けた。

おび
帯

祇園守の定紋を、鶯茶に染め抜いた三尺の暖簾から、ちらりと見える四畳半。床の間に挿した秋海棠が、伊満里の花瓶に影を映した姿もなまめかしく、行燈の焰が香のように立昇って、部屋の中程に立てた鏡台に、鬘下地の人影がおぼろであつた。

所は石町の鐘撞堂新道。白紙の上に、ぽつんと一点、桃色の絵の具を垂らしたように、芝居の衣装をそのまま付けて、すすきりたたずんだ中村松江の頬は、火桶のほてりに上気したのであろう。たべ酔つてでもいるかと思われるまでに赤かつた。

「おこの。——これ、おこの」

鏡のおもてにうつしたおのが姿を見詰めたまま、松江は隣座敷にいるはずの、女房を呼んで見た。が、いずこへ行つたのやら、直ぐに返事は聞かれなかつた。

「ふふ、居らんと見えるの。このようによう映る格好を、見せようとおもとるに。——」

松江はそういういなながら、きやしやな身体をひねって、踊のようなかたちをしながら、再び鏡のおもてに呼びかけた。

「おせんが茶をくむ格好じや、早う見に来たがいい」
「もし、太夫」

暖簾のれんの下したにうづくまつて、鬚まげの刷毛はけ先さきを、ちよいと指ゆびで押おえたまま、ぺこりと頭あたまをさげ
たのは、女房にようぼうのおこではなくて、男衆おとこしゅうの新七しんだった。

「新七しんかいな」

「へえ」

「おこのは何なにをしてじや」

「さア」

「何なんとしたぞえ」

「お上かみさんは、もう一時ときも前まえにお出でかけなすつて、お留守るすでござります」

「留守るすやと」

「へえ」

「どこへ行いつた」

「白壁町しろかべちようの、春信はるのぶさんのお宅たくへ行いくとか仰おつしやいまして、――」

「何なんじやと。春信はるのぶさんのお宅たくへ行いつた。そりや新七しん、ほんまかいな」

「ほんまでござります」

「おこのがまた、白壁町しろかべちようさんへ、どのような用事ようじで行いつたのじや。早はやう聞きかせ」

「御用の筋は存じませぬが、帯をどうとやらすると、いつておいででござりました」

「帯。新七。——その箆笥をあけて見や」

あわてて箆笥の抽斗へ手をかけた新七は、松江のいいつけ通り、片ツ端から抽斗を開け始めた。

「着物も羽織も、みなそこへ出して見や」

「こうでござりますか」

「もつと」

「これも」

「ええもういちいち聞くことかいな。一度にあけてしまいなはれ」

ぎつしり、抽斗一杯に詰った衣装を、一枚残らず畳の上へぶちまけたその中を、松江は夢中で引ツかき廻していたが、やがて眼を据えながら新七に命じた。

「おまえ、直ぐに白壁町へ、おこのの後を追うて、帯を取って戻るのがじや」

「何んの帯でござります」

「阿呆め、おせんのおぼや。あれがのうては、肝腎の芝居がわやになってしまいがな」
剃りたての松江の眉は、青く動いた。

二

その時分、当のおこのは、駕籠を急がせて、月のない柳原の土手を、ひた走りに走らせていた。

鬱金の風呂敷に包んで、膝の上に確と抱えたのは、亭主の松江が今度森田屋のおさんの狂言を上演するについて、春信の家へ日参して借りて来た、いわくつきのおさんの帯であるのはいうまでもなかった。

鉄漿も黒々と、今朝染めたばかりのおこの齒は、堅く右の袂を噛んでいた。

当時江戸では一番だという、その笠森の水茶屋の娘が、どれ程勝れた縹緞にもせよ、浪速は天満天神の、橋の袂に程近い薬種問屋「小西」の娘と生まれて、何ひとつ不自由も知らず、我まま勝手に育てられて来たおこのは、たとい役者の女房には不向にしろ、品なら縹緞なら、人には引けは取らないとの、固い己惚があつたのであろう。仮令江戸に幾千の女がいようともうちの太夫にばかりは、足の先へも触らせることではないと、三年前に婚礼早々大阪を発つて来た時から、肚の底には、梃でも

動かぬ強い心がきまつていた。

この秋の狂言に、良人が選んだ「おせん」の芝居を、重助さんが書きおろすという。もとよりそれには、連れ添う身の異存のあらうはずもなく、本読みも済んで、愈稽古にかかった四五日は、寝る間をつめても、次の間に控えて、茶よ菓子よと、女房の勤めに、さらさら手落はなく過ぎたのであったが、さて稽古が積んで、おのれの工夫が真剣になる時分から、ふと眼についたのは、良人の居間に大事にたたんで置いてある、もみじを散らした一本の女帯だった。

買った衣装というのなら、誰に見しようとて、別に邪間になるまいと思われる、その帯だけに殊更に、夜寝る時まで枕許へ引き付ての愛着は、並大抵のことではないと、疑うともなく疑ったのが、事の始まりというのであろうか。おこのが昼といわず夜といわず、ひそかに睨んだとどのつまりは、独り四畳半に立籠もって、おせんの型にうき身をやつす、良人の胸に巻きつけた帯が、春信えがくところの、おせんの大事な持物だった。

カツとなつて、持ち出したのではもとよりなく、きのうもきょうもと、二日二晩考え抜いた揚句の果てが、隣座敷で茶を入れていると見せての、雲隠れが順よく運んで、

おどおど
大 通 り へ 出 て、 駕 籠 を 拾 う ま だ の 段 取 り は、 誰 一 人 知 る 者 も な か ろ う と 思 っ た の が、
手 落 と い え ば い え よ う が、 そ れ に し て も、 新 七 が 後 を 追 っ て 来 よ う な ぞ と は、 ま っ た く 夢
に も 想 わ な かつ た。

「駕籠屋さん。 済まんが、 急いどくれやすえ」

「へいへい、 合点でげす。 月はなくとも 星 明 り、 足 許 に 狂 い は ご ざ ん せ ん か ら 御 安 心 を」

「酒手はなんぼでもはずみまますさかい、 そのつもりで頼 ン ます」

「相 棒」

「おお」

「聞いたか」

「聞いたぞ」

「流石にいま売だしの、 堺 屋 さん の お 上 さん だ の。 江 戸 の 女 達 に 聞 か し て や り て え 嬉 し い 台 詞 だ」

「その通り。 —— お 上 さん。 太 夫 の 人 気 は 大 し た も ん で げ す ぜ。 こ れ か ら ア、 何 ん に も 恐 い こ た ア ね え、 日 の 出 の 勢 い で げ さ ア」

「そうともそうとも、酒手と聞きいていうんじやねえが、太夫たゆうはでえいち、品ひんがあるツて評判ひようばんだて。江戸役者えどやくしやにや、情なさけねえことに、品ひんがねえからのう」
「おや駕籠屋かごやさん。左様さようにいうたら、江戸えどのお方かたに憎にくまれまッせ」
「飛とんでもねえ。太夫たゆうを誉ほめて、憎にくむような奴やつア、みんなけだものでげさアね」
「そうとも」

柳原やなぎはらの土手どてを左ひだりに折おれて、駕籠かごはやがて三河町かわちようの、大銀杏おおいちようの下したへと差さしかか
つていた。

夜よは正まさに四つだった。

三

白壁町しろかべちようの春信はるのぶの住居すまいでは、今いましも春信はるのぶが彫師ほりしの松五郎まつろうを相手あいてに、今度こんど鶴仙堂かくせんどう
から板いたおろしをする「鷺娘さぎむすめ」の下絵したえを前まえにして、頻しきりに色合いろあわせの相談そうだん中ちゆうであつ
たが、そこへひよっこり顔かおを出だした弟子でしの藤吉とうきちは、団栗眼どんぐりまなこを一層いっそうまるくしながら、
二三度どつづ続けさまに顎あごをしゃくつた。

「お師匠さん、お客でござんす」

「どなたかおいでなすつた」

「堺屋さんの、お上さんがお見えなんで」

「なに、堺屋のお上さんだと。そりやアおかしい。何かの間違いじゃねえのかの」

「間違いだころじやござんせん。真正証銘のお上さんでござんすよ」

「お上さんが、何んの用で、こんなにおそく来なすつたんだ」

「ついに一度も来たことのない、中村松江の女房が、訪ねて来たと聞いただけでは、春信は、直ぐさまその氣になれなかつたのであろう。絵の具から眼を離すと、藤

吉の顔をあらためて見直した。

「何の御用か存じませんが、一刻も早くお師匠さんにお目にかかつて、お願いしたいことがあると、それはそれは、急いでおりますんで。……」

「はアてな。——何んにしても、来たとあれば、ともかくこつちへ通すがいい」

藤吉が、あたふたと行つてしまうと、春信は仕方なしに松五郎の前に置いた下絵を、机の上へ片着けて、かるく舌うちをした。

「飛んだところへ邪間が這入つて、氣の毒だの」

「どういたしやして、どうせあつしやア、外に用はありやアしねえんで。……なんならあつちへ行つて待つとりやしようか」

「いやいや、それにやア及ぶまい。話は直ぐに済もうから、構わずここにいるがいい」

「そんならこつちの隅の方へ、まいまいつぶろのようになつて、一服やつておりやしよう」ニヤリと笑つた松五郎が、障子の隅へ、まるくなつた時だった。藤吉に案内されたおこのの姿が、影絵のように縁先へ現れた。

「師匠、お連れ申しました」

「御免やすえ」

「さア、ずつとこつちへ」

鬱金の包を抱えたおこのは、それでも何やら心が乱れたのであろう。上氣した顔をふせたまま、敷居際に頭を下げた。

「こないに遅う、無様に伺ひまして。……」

「どんな御用か、遠慮なく、ずつとお通りなさるがいい」

「いいえもう、ここで結構でおます」

行燈の灯が長く影をひいた、その鼠色に包まれたまま、石のように硬くなつたお

このの髪が二筋三筋、夜風に怪しくふるえて、心もち青みを帯びた頬のあたりに、ほのかに汗がにじんでいた。

「そうしてお上さんは、こんな遅く、何んの用でおいでなすった」

「拝借の、おせん様の帯を、お返し申しに。――」

「なに、おせん様の帯を。――」

「はい」

「それはまた何んの」

春信は、意外なおこの言葉は、思わず眼を瞠った。

「御大切なお品ゆえ、粗相があつてはならんよつて、速うお返し申すが上分別と、思い立つて参じました」

「では太夫はこの帯を、芝居にや使わないつもりかの」

「はい。折角ながら。……」

おこのは、そのまま固く唇を噛んだ。

四

「ふふふふ、お上さん」

じつとおこの顔を見詰めていた春信は、苦笑に唇を歪めた。

「はい」

「お前さんもう一度、思い直して見なさる気はないのかい」

「おもい直せといやはりますか」

「まずのう」

「なぜでおます」

「なぜかそいつは、そつちの胸に、訊いて見たらば判んなさろう。——その帯は、おせんから頼まれて、この春信が描いたものにや違くないが、まだ向うの手へ渡さないうちに、太夫が来て、貸してくれとのたつての頼み、これがなくては、肝腎の芝居が出来ないとまでいった挙句、いや応なしに持つて行かれてしまったものだ。おせんにやもとより、内所で貸して渡した品物、今更急に返す程なら、あれまでにして、持つて行きはなからう。お上さん。お前、つまらない料簡は、出さないほうがいいぜ」

「そんならなんぞ、わたしがひとりの料簡で。……」

「そうだ。これがおせんの帯でなかつたら、まさかお前さんは、この夜道を、わざわざここまで返しにや来なさるまい。太夫が締めて踊つたとて、おせんの色香が移るという訳じやアなし、芸人のつれあいが、そんな狭い考えじや、所詮うだつは揚がらないというものだ。余計なお接介のようだが、今頃太夫は、帯の行方を探しているだろう。お前さんの来たこたア、どこまでも内所にしておこうから、このままもう一度、持つて帰つてやるがいい」

「ほほほ、お師匠さん」

おこのは冷たく額で笑つた。

「え」

「折角の御親切でおますが、いったんお返ししようと、持つて参りましたこの帯、また拝借させて頂くとしましても、今夜はお返し申します」

「ではどうしても、置いて行こうといいなさるんだの」

「はい」

「そうかい。それ程までにいうんなら、仕方がない、預かろう。その換り、太夫が借りに来たにしても、もう二度と再び貸すことじやないから、それだけは確と念を押しとくぜ」

「よう判りました。この上の御迷惑はおかけしまへんよつて。……」

「はッはッはッ」と、今まで座敷の隅に黙りこくつていた松五郎が、急に煙管をつかんで大笑いに笑つた。

「どうした松つあん」

「どうもこうもありませんが、あんまり話が馬鹿げてゐるんで、とうとう辛抱が出来なくなりやしたのさ。——師匠、ひとつあつしに、ちつとばかりしやべらしておくんなせえ」

「何んとの」

「身に降りかかる話じやねえ。どうせ人様のことだと思つて、黙つて聴いて居りやした。——もし堺屋さんのお上さん、つまらねえ焼きもちは、焼かねえ方がよがすぜ」

「なにいいなはる」

「なにも蟹もあつたもんじやねえ。蟹なら横にはうのが近道だろうに、人間はそうはいかねえ。広いようでも世間は狭いものだ。どうか真ッ直向いて歩いておくんなせえ」

「あんたはん、どなたや」

「あつしやア松五郎という、けちな職人でげすがね。お前さんの仕方が、あんまり情な過ぎるから、口をはさましてもらつたのさ。知らなきやいつて聞かせるが、笠森のお

せん坊ほうは、男おとこ嫌きらいで通とおつてゐるんだ。今いまさらお前まえさんとこの太夫たゆうが、金きん鉾びようを打うつた駕籠かごで迎むかえに來きようが、毛筋けすじ一本動ぽんどうかすような女おんなじゃねえから安心あんしんしておいでなせえ。痴話喧嘩ちわげんかのとぼつちりがこゝまでくるんじや、師匠ししようも飛とんだ迷めい惑わくだぜ」

松五郎まつろうはこゝういつて、ぐつとおこのを睨にらみつけた。

五

暗やみの中なかを、鼠ねずみのようになつて、まつしぐらに駆かけて來きた堺屋さかいやの男おとこ衆しゅう新七しんしちは、これもおこのと同じおなように、柳原やなぎはらの土手どてを八辻つじヶ原はらへと急いそいだが、夢中むちゆうになつて走はしり続つづけてきたせいであろう。右みぎへ行いく白壁町しろかべちようへの道みちを左ひだりへ折おれたために、狐きつねにつままれでもしたように、方角ほうかくさえも判わからなくなつた折おりも折おり、彼方かなたの本多豊前邸ほんだぶぜんていの練堀ねりべいの影かげから、ひた走はしりに走はしつてくる女の氣配おんなけはい。まさかと思おもつて眼めをすえた刹那せつな瞼ぶたににじんだ髪かみかたちは、正ただしくおこの姿すがただつた。

新七しんしちは、はッとして飛とび上あがつた。

「おお、お上かみさん」

「あッ。お前はどこへ」

「どこへどころじやござりません。お上さんこそ今時分、どちらへおいでなさいました」

「わたしは、お前も知つての通り、あの絵師の春信さんのお宅へ、いつて来ました」

「そんならやつぱり、春信師匠のお宅へ」

「お前がまた、そのようなことを訊いて、何んにしやはる」

「手前は太夫からのおいにつけて、お上さんをお迎えに上つたのでござります」

「わたしを迎えに。――」

「へえ。――そうしてあの帯をどうなされました」

「何、帯とえ」

「はい。おせんさんの帯は、お上さんが、お持ちなされたのでござりましょう」

「そのような物を、わたしが知ろかいな」

「いいえ。知らぬことはございますまい。先程お出かけなさる時、帯を何んとやら仰し

やつたのを、新七は、たしかにこの耳で聞きました」

「知らぬ知らぬ。わたしが春信さんをお訊ねしたのは帯や衣装のことではない。今度

鶴仙堂から板おろしをしやはるという、鷺娘の絵のことじや。――ええからそこを

退のきなされ」

「いいや、それはなりません。お上かみさんは、確たしかに持もつてお出いでなされたはず。もう一度手前どてまえと一緒に、白壁しろかべ町のお宅たくへ、お戻もどりなすつて下さりませ」

「なにいうてんのや。わたしが戻もどつたとて、知らぬものが、あろうはずがあるかいな。――
――こうしてはいられぬのじや。そこ退のきやいの」

おこのが払はらつた手てのはずみが、ふと肩かたから滑すべつたのであろう。袂たもとを放はなしたその途端とたんに、
新七しんはいやという程ほど、おこのに頬ほを打うたれていた。

「あッ。お打うちなさいましたな」

「打うつたのではない。お前まえが、わたしの手てを取りとやはつて。……」

「ええ、もう辛抱しんぼうがなりませぬ。手前てまえと一緒にしょもう一度ど、春信はるのぶさんのお宅たくまで、とつ
ととおいでなさりませ」

ぐつとおこのの手首てくびをつかんだ新七しんには、もはや主従しゅじゆうの見みさかいもなくなつていた
のであろう。たとえ何なんであろうと、引ひずつても連つれて行いかねばならぬという、強つよい意地いじ
が手伝てつだつて、荒々あらあらしく肩かたに手てをかけた。

「これ、新七しん、何なにをしやる」

「何もかもござりませぬ。あの帯は、太夫が今度の芝居にはなくてはならない大事な衣装、手前がひとりで行ったとて、春信さんは渡しておくんなさいますまい。どうでもお前様を一緒に連れて。――」

「ええ、行かぬ。何んというてもわしや行かぬ」

星のみ光った空の下に、二つのかたちは、犬の如くに絡み合っていた。

「ふふふ。みつともねえ。こんなことであろうと思つて、後をつけて来たんだが、おさん、こいつア太夫さんの辱なるぜ」

「えッ」

「おれだよ。彫職人の松五郎」

六

留めるのもきかずに松五郎が火のようになって出て行つてしまった後の画室には、春信がただ一人おこのの置いて行つた帯を前にして、茫然と煙管をくわえていたが、やがて何か思いだしたのであろう。突然顔をあげると、吐きだすように藤吉を呼んだ。

「藤吉。——これ藤吉」

「へえ」

いつにない荒い言葉に、あわてて次の間から飛んで出た藤吉は、敷居際で、もう一度ぺこりと頭を下げた。

「何か御用で」

「羽織を出しな」

「へえ。——どツかへお出かけなさるんで。……」

「余計な口をきかずに、速くするんだ」

「へえ」

何が何やら、一向見当が付かなくなつた藤吉は、次の間に取つて返すと、筆筒をがたぴしいわせながら、春信が好みの鶯茶の羽織を、捧げるようにして戻つて来た。

「これでよろしいんで。……」

それには答えずに、藤吉の手から羽織を、ひつたくるように受取つた春信の足は、早くも敷居をまたいで、縁先へおりていた。

「師匠、お供をいたしやす」

「ひとりでいい」

「お一人で。……そんなら提灯を。——」

が、春信の心は、やたらに先を急いでいたのであろう。いつもなら、藤吉を供に連れてさえ、夜道を歩くには、必ず提灯を持たせるのであったが、今はその提灯を待つ間ももどかしく、羽織の片袖を通してまま、早くも姿は枝折戸の外に消えていた。

「藤吉。——藤吉」

「へえ」

奥からの声は、この春まで十五年の永い間、番町の武家屋敷へ奉公に上っていた。春信の妹梶女だった。

「へえ来や」

「へえ」

お屋敷者の見識とでもいうのであろうか。足が不自由であるにも拘らず、四十に近い顔には、触れば剥げるまでに濃く白粉を塗って、寝る時より外には、滅多に放したところのない長煙管を、いつも膝の上についていた。

「お兄様は、どちらにお出かけなされた」

「ギア、どこへおいでなさいましたか、つい仰しやらねえもんでござんすから。……」

「何をうかうかしているのじや。知らぬで済もうとお思いか。なぜお供をせぬのじや」

「そう申したのでござんすが、師匠はひどくお急ぎで、行く先さえ仰しやらねえんで。

……」

「直ぐに行きや」

「へ」

「提灯を持って直ぐに、後を追うて行きやというのじや」

「と仰しましても、どっちへお出かけか、方角も判りやアいたしやせん」

「まだ出たばかりじや。そこまで行けば直ぐに判ろう。たじろいでいる時ではない。速う。

速う」

この上躊躇していたら、持った煙管で、頭のひとつも張られまじき気配となつては、

藤吉も、立たない訳には行かなかつた。

提灯は提灯、蠟燭は蠟燭と、右と左に別々につかんだ藤吉は、追われ

るように、梶女の眼からおもてに遁れた。

七

鏡のおもてに映した眉間に、深い八の字を寄せたまま、ただいらいらした気持を繰返していた中村松江は、ふと、格子戸の外に人の訪れた気配を感じて、じつと耳を澄した。

「もし、今晚は。——今晚は」

（おお、やはりうちかいな）

そう、思った松江は、次の座敷まで立つて行って、弟子のいる裏二階へ声をかけた。

「これ富江、松代、誰もいぬのか。お客さんがおいでなされたようじゃ」

が、先刻新七におこのの後を追わせた隙に、二人とも、どこぞ近所へまぎれて行ったのであろう。もう一度呼んで見た松江の耳には、容易に返事が戻っては来なかった。

「ええけつたいな、何んとしたのじや。お客さんじやというのに。——」

口小言をいいながら、自ら格子戸のところまで立つて行った松江は、わざと声を低く訊ねた。

「どなた様でござります」

「わたしだ」

「へえ」

「白壁町の春信だよ」

「えッ」

驚きと、土間を駆け降りたのが、殆ど同時であつた。

「お師匠さんでおましたか。これはまア。……」

がらりと開けた雨戸の外に、提灯も持たずに、独り蒼白く佇んだ春信の顔は暗かつた。

「面目次第もござりませぬ。——でもまア、ようおいで。——」

「ふふふ。あんまりよくもなからうが、ちと、来ずには済まされぬことがあつての」

「そこではお話も出来ませんで。……どうぞ、こちらへお通り下さりませ」

「しかし、わたしが上つても、いいのか」

「何を仰しやいます。狭苦しゆうはござりますが、御辛抱しやはりまして。……」

「では遠慮なしに、通してもらいましょうか。……のう太夫」

座敷へ上つて、膝を折ると同時に、春信の眼は陰しく松江を見詰めた。

「今更あらためて、こんなことを訊くのも野暮の沙汰だが、おこのさんといいなさるの
は、確にお前さんの御内儀だろうのう」

「何んといやはります」

松江のおもてには、不安の色が濃い影を描いた。

「深いことはどうでもいいが、ただそれだけを訊かしてもらいたいと思つての。あれが太
夫の御内儀なら、わたしはこれから先、お前さんと、二度と顔を合わせまいと、心に固く
極めて来たのさ」

「えッ。ではやはり。……」

「太夫。つまらない面あてでいう訳じゃないが、お前さんは、いいお上さんを持ちなすつ
て、仕合だの。——帯はたしかにわたしの手から、おせんのとこへ返そうから、少しも
懸念には、及ばねえわな」

「どうぞ堪忍しておくれやす」

「お前さんにあやまらせようと思つて、こんなにおそく、わざわざひとりで出て来た訳
やアさらさらない。詫なんぞは無用にしておくんなさい」

「なんで、これがお詫せいでおられましょう。愚なおこのが、いらぬことを仕出来しまし

た心なきからお師匠さんに、このようないやな思いをおさせ申しました。堺屋、穴があつたら這入りとうおます」

松江は、われとわが手で顔を掩つたまま、暫し身じろぎもしなかつた。霜の来ぬ間に、早くも弱り果てた蟋蟀であろう。床下にあえぐ音が細々と聞かれた。

つき
月

一

「——そら来た来なんせ、土平の飴じや。大人も子供も錢持つておいで。当時名代の土平の飴じや。味がよくつてでがあつて、おまけに肌理が細こうて、笠森おせんの羽二重肌を、紅で染めたような綺麗な飴じや。買つて往かんせ、食べなんせ。天竺渡来の人参飴じや。何んと皆の衆合点か」

もはや陽が落ちて、空には月さえ懸つていた。その夕月の光の下に、おのが淡い影を踏みながら、言葉のあやも面白おかしく、舞いつ踊りつ来懸つたのは、この春頃から江戸中を、隈なく歩き廻っている飴売土平。まだ三十にはならないであろう。おどけてはいるが、どこか犯し難いところのある顔かたちは、敵持つ武家が、世を忍んでの飴売だとさえ噂されて、いやが上にも人気が高く、役者ならば菊之丞、茶屋女なら笠森おせん、飴屋は土平、絵師は春信と、当時切つての評判者だつた。

「わッ、土平だ土平だ」

「それ、みんな来い、みんな来いやアイ」

「お母ア、銭くんな」

「父、おいらにも銭くんな」

「あたいもだ」

「あたしもだ」

軒端に立つ蚊柱のように、どこからともなく集まつて来た子供の群は、土平の前後左右をおツ取り巻いて、買うも買わぬも一様にわッわッと囃したてる賑やかさ、長屋の井戸端で、一心不乱に米を磨いでいたお上さん達までが、手を前かけで、拭きながら、ぞろ

ぞろつながつて出てくる有様は、流石に江戸は物見高いと、勤番者の眼の玉をひつくり返さずにはおかなかつた。

「——さアさ来た来た、こつちへおいで、高い安いのお思案は無用。思案するなら谷中へござれ。谷中よいとおせんの茶屋で、お茶を飲みましよ。煙草をふかそ。煙草ふかして煙だして、煙の中からおせんを見れば、おせん可愛や二九からぬ。色気程よく罨が霞む。霞む罨をちよいとつつ突いて、もしもしそこなおせん様。おはもじながらここもとは、そもじ思うて首ツたけ、鳥の鳴かぬ日はあれど、そもじ見ぬ日は寝も寝つかれぬ。雪駄ちやらちやら横眼で見れば、咲いた桜か芙蓉の花か、さても見事な富士びたえ。——さツさ買いなよ買わしやんせ。土平自慢の人参飴じや。遠慮は無用じや。買わしやんせ。買つておせんに惚れしやんせ」

手振りまでまじえての土平の唄は、月の光が冴えるにつれて、愈益益々面白く、子供ばかりか、ぐるりと周囲に垣を作つた大方は、通りがかりの、大人の見物で一杯であつた。

「はッはッはッ。これが噂の高い土平だの。いやもう感心感心。この咽では、文字太夫も跣足だて」

「それはもう御隠居様。滅法名代の土平でござんす。これ程のいい声は、鉦と太鼓で探しても、滅多にあるものではござんせぬ」

「御隠居は、土平の声を、始めてお聞きなすつたのかい」

「左様」

「これはまた迂濶千万。飴売土平は、近頃江戸の名物でござんせ」

「いや、噂はかねて聞いておつたが、眼で見たのは今が初めて。まことにはや。面目次第もござりませぬ」

「はははは。お前様は、おなじ名代なら、やつぱりおせんの方が、御鼻屑でござんせ」

「決して左様な訳では。……」

「お隠しなさいますな。それ、そのお顔に書いてある」

見物の一人が、近くにゐる隠居の顔を指した時だった、誰かが突然頓狂な声を張り上げた。

「おせんが来た。あすこへおせんが帰つて来た」

「なに、おせんだと」

「どこへどこへ」

飴売土平の道化た身振りに、われを忘れて見入つていた人達は、降つて湧いたような「おせんが来た」という声を聞くと、一齊に首を東へ振り向けた。

「どこだの」

「あすこだ。あの松の木の下へ来る」

斜めにうねつた道角に、二抱えもある大松の、その木の下をただ一人、次第に冴えた夕月の光を浴びながら、野中に咲いた一本の白菊のように、静かに歩みを運んで来るほのかな姿。それはまごう方ない見世から帰りのおせんであつた。

「違えねえ。たしかにおせんだ」

「そら行け」

駆け出す途端に鼻緒が切れて、草履をさげたまま駆け出す小僧や、石に躓いてもんどり打って倒れる職人。さては近所の生臭坊主が、俗人そのけに目尻をさげて追いつがるていたらく。所詮は男も女もなく、おせんにとつては迷惑千万に違いなか

ろうが、遠慮会釈はからりと棄てた厚かましきからつるんだ犬を見に行くよりも、一層勢い立つて、どつとばかりに押し寄せた。

「いやだよ直さん、そんなに押しちやア軋じまうよ」

「人の軋ぶことなんぞ、遠慮してたまるもんかい。速く行つて触らねえことにや、おせんちゃんも帰つちまわア」

「おツと退いた退いた。番太郎なんぞの見るもんじゃねえ」

「馬鹿にしなさんな。番太郎でも男一匹だ。綺麗な姐さんは見てえや」

「さア退いた、退いた」

「火事だ火事だ」

人の心が心に乗つて、愈調子づいたのであろう。茶代いらすのその上にどさくさまぎれの有難さは、たとえ指先へでも触れば触り得と考へての悪戯か。ここぞとばかり、息せき切つて駆けつけた群衆を苦笑のうちに見守つていたのは、飴売の土平だつた。

「ふふふ。飴も買わずに、おせん坊へ突ツ走つたな豪勢だ。こんな鉄錆のような顔をしたおいらより、油壺から出たよなおせん坊の方が、どれだけいいか知れねえから

の。いやもう、浮世うきよのことは、何なにをおいても女おんなが大事だいじ。おいらも今度こんどの世よにやア、犬いぬになつても女おんなに生うまれて来くることだ。――はツくしよい。これアいけねえ。みんなが急きゆうに散ちつたせいか、水みずッ漬ばながで出きて来きたぜ。風邪かぜでも引ひいちやアたまらねから、そろそろ帰かえるとしべえかの」

「おツと、飴屋あめやさん」

「はいはい、お前まえさんは、何なにんであつちへ行いきなさらない」

「行いきたくねえからよ」

「行いきたくないとの」

「そうだ。おいらはこれでも、辱はじを知しつてゐるからの」

「面おも白しろい。人にん間げん、辱はじを知しつてゐたア何なによりだ」

「何なにより小こより御存ごぞんじよりか。なまじ辱はじを知しつてゐるばかりに、おいらア出しゅ世つせがで来きねえ

んだよ」

「お前まえさんは、何なにをしなさる御家業おかぎようだの」

「絵えかきだよ」

「名な前は」

「名前なまえなんざあるもんか」

「誰だれのお弟子でしだの」

「おいらはおいらの弟子でしよ。絵えかきに師匠ししょうや先生せんせいなんざ、足手あしでまといになるばツかりで、物ものの役やくにや立たたねえわな」

そういいながら、鼻はなの頭あたまを擦こすつたのは、変かわり者ものの春重はるしげだった。

三

「おツとツとツと、おせんちゃん。何なんでそんなに急いそぎなさるんだ。みんながこれ程ほど騒さわいでるんだぜ。罽えくぼの一つも見みせてツてくんねえな」

「そうだそうだ。どんなに待まったか知しれやアしねえよ。おめえに急いそいで帰かえられたんじや、待まつてたかいがありやアしねえ」

それと知しつて、おせんを途とち中ちゆうに押おツ取とりかこんだ多勢おおぜいは、飴屋あめやの土平どへいがあつ気けに取とられてることなんぞ、疾とうの昔むかしに忘わすれたように、我われ先さきにと、夕ゆぐれ時ときのあたりあたりの暗くらさを幸さいわいにして、鼻はなから先さきへ突出つきだしていた。

が、いつもなら、人にいわれるまでもなく、まずこつちから愛嬌を見せるにきまつていたおせんが、きようは何んとしたのであらう。壓を見せないのはまだしも、まるで別人のようにせかせかと、先を急いでの素気ない素振に、一同も流石におせんの前へ、大手をひろげる勇氣もないらしく、ただ口だけを達者に動かして、少しでも余計に引止めようと、あせるばかりであつた。

「もし、そこを退いておくんなさいな」

「どいたらおめえが帰ツちまうだらう。まアいいから、ここで遊んで行きねえ」

「あたしや、先を急ぎます。きようは堪忍しておくんなさいよ」

「先ツたつて、これから先ア、家へ帰るより道はあるめえ。それともどこぞへ、好きな人でも出来たのかい」

「なんでそんなことが。……」

「ねえンなら、よかろうじやねえか」

「でもお母さんが。——」

「お袋の顔なんざ、生れた時から見てるんだらう。もう大概、見あきてもよさそうなんだぜ」

「そうだ、おせんちゃん。帰る時にや、みんなで送ってツてやろうから、きょう一（いち）日の見世（みせ）の話（はなし）でも、聞かしてくんねえよ」

「お見世（みせ）のことなんぞ、何（な）んにも話（はなし）はござんせぬ。——どうか通（とお）しておくんさい」

「紙屋（かみや）の若旦那（わかだんな）の話（はなし）でも、名主（なぬし）さんのじやんこ息子（むすこ）の話（はなし）でも、いくらもあるというもんじやねえか」

「知りませんよ。お母（つか）さんが風邪（かぜ）を引（ひ）いて、独（ひと）りで寝（ね）ててござんすから、ちつとも速（はや）く帰（かえ）らないと、あたしや心配（しんぱい）でなりませんのさ」

「お袋（ふくろ）さんが風邪（かぜ）だツて」

「あい」

「そいつアいけねえ。何（な）んなら見舞（みまい）に行（い）ってやるよ」

「おいらも行（い）くぜ」

「わたしも行（い）く」

「いいえ、もうそんなことは。——」

少し（すこ）も長（なが）く、おせんを引（ひ）き止（と）めておきたい人（にん）情（じょう）が、互（た）の口（くち）を益（ます）々（ます）軽（かる）くして、まるく囲（かこ）んだ人（ひと）垣（がき）は、容（よう）易（い）に解（と）けそうにもなかつた。

すると突然、はッはッはと、腹の底から絞り出したような笑い声が、一同の耳許に湧き立った、

「はッはッは。みんな、みつともねえ真似をしねえで、速くおせんちゃんを、帰してやつたらどんなもんだ」

「おめえは、春重だな」

「つまらねえ差し出口はきかねえで、引ッ込んだ、引ッ込んだ」

「ふふふ。おめえ達、あんまり気が利かな過ぎるぜ。おせんちゃんにや、おせんちゃんの用があるんだ。野暮な止めだてするよりも、一刻も速く帰してやんねえ」

「馬鹿アいわッし。そんなお接介は受けねえよ」

一同の視線が、春重の上に集まっている暇に、おせんは早くも月の下影に身を隠した。

四

「お母さん」

「おや、おせんかえ」

「あい」

猫に追われた鼠のように、慌しく駆け込んで来たおせんの声に、折から夕餉の支度を急いでいた母のお岸は、何やら胸に凶事を浮べて、勝手の障子をがらりと明けた。

「どうかおしかえ」

「いいえ」

「でもお前、そんなに息せき切つてさ」

「どうもしやアしませんけれど、いまそこで、筆屋さんの黒がじやれたもんだから。……」

「ほほほ。黒が尾を振つてじやれるのは、お前を慕っているからだよ。あたしやまた、悪いいたずらでもされたかと思つて、びつくりしたじやアないか。何も食いつくような黒

じやなし、逃げてなんぞ来ないでも、大丈夫金の脇差だわな。——こつちへおいで。頭を撫で付けてあげようから。……」

「おや、髪がそんなに。——」

母の方へは行かずに、四畳半のおのが居間へ這入つたおせんは、直ぐさま鏡の蓋を外して、薄暮の中にじつとそのまま見入つたが、二筋三筋襟に乱れた鬢の毛を、手早く搔

き揚げてしまうと、今度はあらためて、あたりをぐるりと見廻した。

「お母さん」

「あいよ」

「あたしの留守に、ここに誰か這入りやしなかったかしら」

「おやまア滅相な。そこへは鼠一匹も滅多に入るこつちやアないよ。——何んぞ変わったことでもおありかえ」

「さア、ちつとばかり。……」

「どれ、何なの。——」

障子の隙間から、顔を半分窺かせた母親を、おせんはあわてて遮った。

「氣にする程でもござんせぬ。あつちへ行つておくんなさい」

「ほんにまア、ここへは来るのじやなかったツけ」

三日前の夜の四つ頃、浜町からの使いといつて、十六七の男の子が、駕籠に乗つた女を送つて来たその晩以来、お岸はおせんの口から、観音様への願かけゆえ、向う三十日の間何事があつても、四畳半へは這入つておくんなさいますな。あたしの留守にも、ここへ足を入れたが最後、お母さんの眼はつぶれましよう、きつくいわれたそれ

からこつち、何が何やら分らないままに、おせんの頼みを堅く守つて、お岸は、鬼門へ触るように恐れていた座敷だったが、留守に誰かが這入つたと聞いては、流石にあわてずにいられなかつたらしく、拵らえかけの蜷汁を、七厘へ懸けッ放しにしたまま、片眼でいきなり窺き込んだのであろう。

部屋の中は、窓から差すほのかな月の光で、漸く物のけじめがつきはするものの、ともすれば、入れ換えたばかりの青畳の上にさえ、暗い影が斜めに曳かれて、じつと見詰めている眼先は、海のように深かつた。

母は直ぐに勝手へ取つて返したと見えて、再び七厘の下を煽ぐ渋団扇の音が乱れた。暗い、何者もはつきり見えない部屋の中で、おせんはもう一度、じつと鏡の中を見詰めた。底光のする鏡の中に、澄めば澄む程ほのかになつてゆく、おのが顔が次第に淡く消えて、三日月形の自慢の眉も、いつか糸のように細くうずもれて行つた。

「吉ちゃん。――」

ふと、鏡のおもてから眼を放したおせんの唇は、小さく綻びた。と同時に、すり寄るように、体は戸棚の前へ近寄つた。

「済みません。ひとりぼっちで、こんなに待たせて。――」

そういいながら、おせんのふるえる手は襖の引手を押えた。

五

部屋の中は益々暗かった。

その暗い部屋の片隅へ、今しもおせんが、辺に気を配りながら、胸一杯に抱え出したのは、つい三日前の夜、由齋の許から駕籠に乘せて届けてよこした、八百屋お七の舞台姿をそのままの、瀬川菊之丞の生人形であつた。

おせんは抱えた人形を、東に向けて座敷のまん中に立てると、薄月の光を、まともに受けさせようがためであろう。音せぬ程に、窓の障子を徐に開け始めた。

庭には虫の声もなく、遠くのを渡る雁のおとずれがうつろのように、耳に響いた。

「吉ちゃん。——いいえ、太夫、あたしや会いとうござんした」

生きた相手にいう如く、如何にもなつかしように、人形を仰いだおせんの眼には、情の露さえ仇に宿つて、思いなしか、声は一途にふるえていた。

「——朝から晩まで、いいえ、それよりも、一生生涯、あたしや太夫と一緒にいとうご

ざんすが、なんといつても、お前は今を時めく、江戸一番の女形。それに引き換えあたし
やそこらに履き捨てた、切れた草鞋もおんなじような、水茶屋の茶汲み娘。百夜の路を
通ったとて、お前に逢つて、昔話もかなうまい。それゆえせめての心から、あたしが
いつも夢に見るお前のお七を、由齋さんに仕上げてもらつて、ここまで内緒で運んだ
始末。お前のお宅にくらべたら、物置小屋にも足りない住居でござんすが、ここばかり
は、邪間する者もない二人の世界。どうぞ辛抱して、話相手になつておくんなさいま
し、——あたしや、王子で育つた十年前も、お見世へ通うきようこの頃も、心に毛筋
程の变りはござんせぬ。吉ちゃんとは夫婦だと、ままごと遊びにから
かわれた、あの春の日が忘れられず、枕を濡らして泣き明かした夜も、一度や二度ではご
ざんせんし。おせんも年頃、好きなお客の一人くらいはあろうかと、折節のお母さん
の心配も、あたしの耳には上の空。火あぶりで死んだお七が羨ましいと、あたしやいつ
も、思い續けてまいりました。——太夫、お前は、立派なお上さんのその外に、二つも寮
をお持ちの様子。引くてあまたの、御鼻筋もござんしょうが、あたしやこのままこがれ
死んでも、やつぱりお前の女房でござんす」

思わず知らず、我れとわが袖を濡らした不覚の涙に、おせんは「はッ」として首を上げ

たが、どうやら勝手許の母の耳へは這入らなかつたものか、まだ抜け切らぬ風邪の咳が二つ三つ、続けざまに聞こえたばかりであつた。

しばしおせんは、俯向いたまま眼を閉じていた。その眼の底を、稲妻のように、幼い日の思い出が突つ走つた。

「おせんや」

母の声が聞かれた。

「あい」

「この暗いのに、行燈もつけずに」

「あい。さして暗くはござんせぬ」

「何をしておいでだか知らないが、支度が出来たから御飯にしようわな」

「あい、いまじきに」

「暗い所に一人でいると、鼠に引かれるよ」

隣座敷では、母が燈芯をかき立てたのであろう。障子が急に明るくなつて、膳

立をする音が耳に近かつた。

よろめくように立上つたおせんは、窓の障子に手をかけた。と、その刹那、低いし

かも聞き慣れない声が、窓の下から浮き上った。

「おせん」

「えッ」

「驚くにや当らねえ。おいらだよ」

おせんは、火箸のように立ちすくんでしまった。

六

「ど、どなたでござんす」

「叱つ、静かにしねえ。怪しいものじゃねえよ。おいらだよ」

「あッ、お前は兄さん。——」

「ええもう、静かにしろというのに。お袋の耳へえッたら、事が面倒になる」

そういうながら、出窓の縁へ肘を懸けて、するりと体を持ちあげると、如何にも器用に履いた草履を右手で脱ぎながら、腰の三尺帯へはさんで、猫のように青畳の上へ降り立ったのは、三年前に家を出たまま、噂にさえ居所を知らせなかった兄の千吉だ

つた。――藍微塵あいみじんの素衾すあわせに算盤玉そろばんたまの三尺じやくは、見るから堅氣かたぎの着付きつけではなく、殊ことに取とつた頼冠ほおかむりの手拭てぬぐいを、驚わしづか掴できみにしたかたちには、憎にくいまでの落着おちつきがあつた。

まったく夢想むそうもしなかつた出来事できごとに、おせんは、その場に腰ばこしを据すえたまま、直すぐには二の句くが次つげなかつた。

「おせん。おめえ、いくつンなつた」

「十八でござんす」

「十八か。――」

千吉さちちはそういつて苦笑くしやうするように頷うなずいたが、隣座敷となりざしきを氣きにしながら、更さらに声こゑを低ひくめた。

「怖こわがるこたアねえから、後あとずさりをしねえで、落着おちついていくんねえ。おいらア何なにも、久ひさし振ふりに会あつた妹いもうとを、取とつて食くおうたアイやアしねえ」

「あかりを、つけさせておくんなさい」

「おつと、そんな事をされちやアたまらねえ。暗やみでもてえげえ見みえるだろうが、おいらア堅氣かたぎの商人しょうにんで、四角かくい帶おびを、うしろで結むすんで来きた訳わけじゃねえんだ。面めん目ぼくねえが五ご一いち三さん分ぶ

六のやくぎ者だ。おめえやお袋に、会わせる顔はねえんだが、ちつとばかり、人に頼まれたことがあつて、義理に挟まれてやつて来たのよ。おせん、済まねえが、おいらの頼みを聞いてくんねえ」

「そりやまた兄さん、どのようなことでござんす」

「どうのこうのと、話せば長え訳合だが、手ッ取早くいやア、おいらア金が入用な

んだ」

「お金とえ」

「そうだ」

「あたしや、お金なんぞ。……」

「まア待った。敷から棒に飛び込んで来た、おいらの口からこういつたんじや、おめえがかぶりを振るのもつともだが、こつちもまんざら目算なしで、出かけて来たという訳じゃねえ。そこにやちつとばかり、見かけた蔓があつてのことよ。——のうおせん。おめえは通油町の、橘屋の若旦那を知つてるだろう」

「なんとえ」

「徳太郎という、始末の良くねえ若旦那だ」

「さア、知^しつてゐるような、知^しらないような。……」

「ここア別^{べつ}に白洲^{しらす}じゃねえから、隠^{かく}しだてにや及^{およ}ばねえぜ。知^しらねえといったところが、
どうでそれじゃア通^{とお}らねえんだ。先^{さき}アおめえに、家藏^{いえくらう}売^うつてもいとわぬ程^{ほど}の、首^{くび}ツたけ
だというじゃねえか」

「まア兄^{にい}さん」

「恥^{はず}かしがるにやア当^{あた}らねえ。何^{なに}もこつちから、血道^{ちみち}を^あ上げてるとい^{わけ}う訳^{わけ}じゃなし、おめ
えに惚^ほれてゐるな、向^{むこ}う様^{さま}の勝手^{かつて}次第^{しだい}だ。——おせん。そこでおめえに相談^{そうだん}だが、ひとつ
こつちでも、氣^きのある風^{ふう}をしちやあくれめえか」

「えッ」

「おめえも十八だというじゃアねえか。もうてえげえ、そのくれえの芸当^{げいとう}は、出^で来^きても
辱^{はじ}にやアなるめえぜ」

千吉^{きち}は、たじろぐおせんを見詰^{みつ}めながら、四角^{かく}く坐^{すわ}つて詰^つめ寄^よつた。

「もし、兄さん」

つきくも おお 月は雲に覆われたのであろう。障子しょうじを漏れる光ひかりさえない部屋へやの中なかは、僅わずかに隣となりから差さす行燈あんどんの方影かたかげに、二人ふたりの半身はんしんを淡く見みせているばかり、三年振ねんぶりで向むき合あった兄あにの顔かおも、おせんははつきり見極みきわめることが出来できなかつた。

その方暗かたやみの中に、おせんの声こえは低くふるえた。

「兄さん」

「え」

「帰かえっておくんなさい」

「何なんだって。おいらに帰けえれッて」

「あい」

「冗談じょうだんじゃねえ。用ようがありやこそ、わざわざやって来きたんだ。なんでこのまま帰けえれるものか。そんなことよりおいらの頼たのみを、素直すなおにきいてもらおうじゃねえか。おめえさえ首くびを縦たてに振ふってくれりやア、からきし訳わけはねえことなんだ。のうおせん。赤あかの他人たにんでさえ、事ことを分わけて、かくかくの次第しだいと頼たのまれりや、いやとばかりやアいえなからう。おいらアおめえの兄貴あにきだよ。——血ちを分わけた、たった一人ひとりの兄貴あにきだよ。それも、百とまとまった金かねが

入用だという訳じゃねえ。四半分の二十五両で事が済むんだ」

「二十五両。——」

「みつともねえ。驚く程の高でもあるめえ」

「でも、そんなお金は。……」

「だからよ。初手からいつてる通り、おめえやお袋の臍くりから、引っぱり出そうたアイやアしねえや。狙いをつけたなあおの若旦那、橘屋の徳太郎というでくの棒よ。ふふふ。何んの雑作もありアしねえ。おめえがここでたつた一言。おなつかしゅうござんす、とかなんとかいってくれさえすりア、おいらの頼みア聴いてもらえようツてんだ。お釈迦が甘茶で眼病を直すより、もつとわけねえ仕事じゃねえか」

「それでもあたしや。心にもないことをいつて。……」

「そ、その料簡がいけねえんだ。腹にあらうがなからうが、武士は戦略、坊主は方便、時と場合じゃ、人の寝首をかくことさえあらうじゃねえか。——さ、ここに筆と紙がある。いろはのいの字とろの字を書いて、いろよい返事をしてやんねえ」

千吉がふところから取出したのは、巻紙と矢立であつた。

おせんは、あわてて手を引ッ込めた。

「堪忍しておくんなさい」

「何もあやまるこたアありやアしねえ。暗くツて書けねえというンなら、仕方がねえ。行燈をつけてやる」

「もし。――」

「今度はおせんが、千吉の手をおさえた。」

「何をするんだ」

「あたしや、どうでもいやでござんす」

「そんならこれ程までに、頭をさげて頼んでもか」

「外のこととは訳が違い、あたしや数あるお客のうちでも、いの一番に嫌いなお人、たとえ嘘でも冗談でも、気の済まないことはいやでござんす」

「おせん。おめえ、兄貴を見殺しにするつもりか」

「何んとなえ」

「おめえがいやだとかぶりを振りやア、おいらは人から預かった、大事な金を落としたかどで、いやでも明日は棒縛りだ。――そいつもよかろう。おめえはかげで笑っていいえ」

「兄さん」

「もう何んにも頼まねえ。これから帰って縛られようよ」
 千吉は、わざとやけに立上って窓辺へつかつかと歩み寄った。
 とつぜんとなりざしき
 突然隣座敷から、お岸のすすり泣く声が、障子越しに聞えて来た。

ふみ
文

一

「若旦那、もし、油町の若旦那」

「おお、お前は千吉つあん」

「そんなに急いで、どこへおいでなせえやす」

「お前のとこさ」

「何、あつしんとこでげすツて。——あつしんとこなんざ、若旦那においでを願うよう
 な、そんな気の利いた住居じゃござんせん。火口箱みてえな、ちつぽけな棟割長屋なん

で……」

「小さかろうが、大きかろうが、そんなことは考えちゃいられないよ」

「何んと仰しやいます」

「あたしやお前に頼んだ返事を、聞かせてもらいに、往くところじやないか」

「はッはッは。それでわざわざお運び下さろうッてんでげすか。これあどうも恐れいりやした。そのことなら、どうかも御心配は、御無用になすっておくんなさいまし」

「おお、そんなら千吉さん、おせんの返事を。――」

「憚りながら、いったんお引受け申しやした正直千吉、お約束を違えるようなこと

アいたしやせん」

「済まない。あたしはそうとは思っていたものの、これがやつぱり恋心か。ちつとも速く返事が聞き度くて、帳場格子と二階の間を、九十九度も通った拳句、とうとう辛抱が出来なくなつたばかりに、ここまで出向いて来た始末さ。そうと極つたら、どうか直ぐに色よい返事を聞かせておくれ」

「ま、ま、待つておくんなせえやし。そんなにお急ならねえでも、おせんの返事は、直ぐさまお聞かせ申しやすが、ここは道端、誰に見られねえとも限りやせん。筋の通つた

いい所で、ゆつくりお目^めにかけようじゃござんせんか」

「そりやもう、いずれおまんまでも食^たべながら、ゆつくり見^みせてもらおうが、まず文^{ふみ}の上^う書^{わがき}だけでも、ここであつと、のぞかせておくれでないか」

「御安心^{ごあんしん}くださいまし。上書^{うわがき}なんぎ二の次^{つぎ}三の次^{つぎ}、中味^{なかみ}から封^{ふう}じ目^めまで、おせんの手^てに相違^{そうい}はございませぬ。あいつア七八つの時分^{じぶん}から、手習^{てならひ}ツ子の仲間^{なかま}でも、一といつて二と下つたことのねえ手筋^{てすじ}自慢^{じまん}。あつしやア質屋^{しちや}の質^{しち}の字^じと、万金^{まんきん}丹^{たん}の丹^{たん}の字^じだけしきや書^かけやせんが、おせんは若旦^{わかだんな}那^なのお名前^{なまえ}まで、ちやアんと四角^{かく}い字^じで書^かけようという、水茶屋^{みずぢや}女^やにや惜^おしいくらい^なの立派^{りっぱ}な手書^{てが}き。——この通り^{とお}、あつしがふところに預^{あず}かつておりやすから、どうか親船^{おやぶね}に乗^のつた氣^きで、おいでなすつておくんなせえやし」

「安心^{あんしん}はしているけれど、ちつとも速^{はや}く見^みたいのが人^{にん}情^{じやう}じやないか。野暮^{やぼ}をいわずに、ちよいとでいいから、ここでお見^みせよ」

「堪^{かん}忍^{にん}しておくんなさい。道^{みち}ツ端^{ぱた}ではお目^めにかけねえようにと、こいつ妹^{いもうと}からの、堅^{かた}い頼^{たの}みでござんすので。……」

「はてまア、何^なんという野暮^{やぼ}だらうのう」

「どうか察^{さつ}しておやんなすつて。おせんにして見^みりや、自分^{じぶん}から文^{ふみ}を書^かいたな始^{はじ}めての、

いわば初恋^{はつこい}とでも申しやしようか。はずかしい上^{うへ}にもはずかしいのが人情^{にんじやう}でげしう。道^{みち}ツ端^{はた}で展^{ひろ}げたところを、ひよつと誰^{だれ}かに見^みられた日^ひにやア、それこそ若旦那^{わかだんな}、氣^きの弱^{よわ}いおせんは、どんなことになるか、知^しれたもんじやござんせん。野暮^{やぼ}は承知^{しょうち}の上^{うへ}でござんす。どうか、ここんところをお察^{さつ}しなすつて……」

谷中^{やなか}から上野^{うえの}へ抜^ぬける、寛永寺^{かんえいじ}の土塀^{どべい}に沿^そつた一筋道^{すじみち}、光琳^{こうりん}の絵^えのような桜^{さくら}の若葉^{わかば}が、道^{みち}に敷^しかれたまん中^{なかつた}に佇^たんだ、若旦那^{わかだんな}徳太郎^{とくたろう}とおせんの兄^{あに}の千吉^{きち}とは、折^{おり}からの夕陽^{ゆうひ}を浴^あびて、色^{いろ}よい返事^{へんじ}を認^めめたおせんの文^{ふみ}を、見^みせろ見^みせないのいさかいに、しばし心^{こころ}を乱^{みだ}していたが、この上^{うへ}の争^{あらそ}いは無駄^{むだ}と察^{さつ}したのであろう。やがて徳太郎^{とくたろう}は細^{ほそ}い首^{くび}をすくめた。

「あたしや氣^きが短^{みじ}いから、どこへ行く^{ゆく}にしても、とても歩^{ある}いちや行^いかれない。千吉^{きち}つあん、直^すぐに駕籠^{かご}を呼^よんでもらおうじやないか」

「合^が点^{てん}でげす」

千吉^{きち}は二^{ふた}つ返事^{へんじ}で頷^{うなず}いた。

徳太郎と千吉とが、不忍池畔の春草亭に駕籠を停めたのは、それから間もない後だった。

徳太郎は女中の案内も待たず、駆け込むように千吉の手をとって、奥の座敷へ連れ込んだ。

「さ、千吉さん」

「へえ」

「早くお見せ」

「何をでござんす」

「おや、何はあるまい。おせんのおみじやないか」

「おそうだ。これはすっかり忘れて居りやした」

「お前は道端じや見せられないというから、わざわざ駕籠を急がせて、ここまで来たんだよ。さ大事な文を、少しでも速く見せてもらいましょう」

「お見せいたしやす」

「口ばかりでなく、速くお出しッたら」

「出しやす。――が、ちよいとお待ちなすつておくんなさい。その前に、あつしやア若^{わかだ}旦那に、ひとつお願い申^{ねが}してえことがござんすので。……」

「何^なんだえ、あらたまつて。――」

「実^{じつ}アその、おせんの奴^{やつ}から。……」

「なに、おせんから、あたしに頼^{たの}みとの」

「へえ」

「そんならなぜ、もつと早^{はや}くいわないのさ」

「申^{もうしあ}上げたいのは山^{やま}々でござんすが、ちと厚^{あつ}かましい筋^{すじ}だもんでげすから、ついその、

あつしの口^{くち}からも、申^{もうしあ}上げにくかつたような訳^{わけ}でげて」

「馬^ば鹿^かな。つまらない遠^{えんりよ}慮^{りよ}なんか、水^{みず}臭^{くさ}いじやないか。そんな遠^{えんりよ}慮^{りよ}はいらないから、

いっとくれ。あたしでかなうことなら、どんな願^{ねが}いでも、きつと聞^きいてあげようから。……

……

「そりやどうも。おせんに聞^きかしてやりましたら、どれ程^{ほど}喜^{よろこ}ぶか知^しれやアしません。――

ところで若^{わかだんな}旦那」

「なにさ」

「そのお願いと申しますのは」

「その頼みとは」

「お金を。――」

「何んのことかと思つたら、お金かい。憚りながら、あたし江戸でも人様に知られた、橘屋の徳太郎、おせんの頼みとあれば、決していやとはいわれないから、かまわずにいつて御覧。たとえどれ程の大金でも、あれのためなら、首は横にや振らないつもりだよ」

「へえへえ、どうも恐れいりやした。いやもう、おせん、おめえよく捕つたぞ。これ程の鼠たア、まさか思つちや。……」

「これ千吉つあん、何をおいいだ。あたしのことを鼠とは。……」

「ど、どういたしやして、鼠なんぞた申しやしません。若旦那にはこれからも、鼠のように、チウ義をおつくし申せと、こう申したのでございます」

「お前は口が上手だから。……」

「口はからきし下手の皮、人様の前へ出たら、ろくにおしやべりも出来る男じゃござんせんが、若旦那だけは、どうやら赤の他人とは思われず、ついへらへらとお喋りもいた

しやす。——ねえ若旦那。どうかおせんに、二十五両だけ、貸してやっておくんなせえやし」

「何、二十五両。——」

「江戸で名代の橘屋の若旦那。二十五両は、ほんのお小遣じやござんせんか」

千吉はそういうしながら、ふところ深くひそませた、おせんのふみを取りだした。

ありがたく存じ候かしこ

せん より

若旦那さま

ふみのおもては、ただこれだけだった。

三

朝つばらの柳湯は、町内の若い者と、楊枝削りの御家人と道楽者の朝帰り
とが、威勢のよしあしを取まぜて、石榴口の内と外とにとぐろを巻いたひと時の、辱も
外聞もない、手拭一本の裸絵巻を展げていたが、こんな場合、誰の口からも同じよ

うに吐はかれるのは、何なに吉きちがどこの賭場とばで勝かつたとか、どこそこのお何なにが、近頃ちかごろ誰だれにのぼせているとか、さもなければ芝居しばいの噂うわさ、吉原よしわらの出来事できごと、観音かんのん様の茶屋女ちややおんなの身みの上うへなど、おそらく口くちを開ひらけば、一様ようにおのれの物知ものしりを、少しも速すみく人に聞きかせたいとの自じ慢まんからであらう。玉たまのような汗あせを額ひたいにためながら、いずれもいい氣持きもちでしやべり続ける面おも白しろさ。中なかには、顔かおさえ洗あらやもう用ようはねえと、流ながしのまん中に頑張がんばつて、四斗樽とだるのような体からだを、あつちへ曲まげ、こつちへ伸のびして、隣近所となりきんじよへ泡あわを飛ばす暇ひまな隠居いんきよや、膏藥こうやくだらけの背中せなかを見みせて、弘法灸こうぼうきゅうの効能こうのうを、相手あいて構かまわず吹ふき散ちらす半病人はんびょうにんもある有あり様さま。湯屋ゆやは朝あさから寄合所よりあいしよのように賑にぎわいを見みせていた。

「長兄ちやうあにイ。聞きいたか」

「何をなに」

「何をなにじゃねえ、千吉きちがしこたま儲もうけたツて話はなしをよ」

「うんにや。聞きかねえよ」

「迂濶うかつだな」

「だつておめえ、知しらねえもなア仕方しかたがねえや。——いってえ、あの怠け者なまものが、どこでそんなに儲もうけやがつたんだ」

「どこツたつておめえ、そいつが、てえそうないかさまんだぜ」

「ふうん、奴にそんな器用なことが出来るのかい」

「相手がいいんだ」

「椋鳥か」

「ちやきちやきの江戸っ子よ」

「はアてな、江戸っ子が、奴のいかさまに引ツかかるたアおかしいじゃねえか」

「いかさまツたつて、おめえ、丁半じゃねえぜ」

「ほう、さいころじゃねえのかい」

「女が餌だ」

「女。——」

「相手を釣つて儲けたのよ」

「そいつア尚更初耳だ。——その相手ツてな、どこの誰よ」

「油町の紙問屋、橘屋の若旦那だ」

「ほう、そいつアおもしれえ」

「あれだ。おもしれえは気の毒だぜ。千吉は妹のおせんを餌にして、若旦那から、二十

五両りようという大金たいきんをせしめやがつたんだ」

「なに二十五両りようだつて」

「どうだ。てえしたもんだろう」

「冗談じやうだんじゃねえ。二十五両りようといやア、小判こばんが二十五枚まいだぜ。こいつが二両りようとか、二両りよう

二分ぶとかいうンなら、まだしも話はなしの筋すじが通るが、二十五両りようは飛とんでもねえ。あいつの首くびを引換ひきかえにしたつて、借りかられる金かねじゃアねえぜ。冗談じやうだんも休みやすみ休みやすみいってくんねえ」

「ふん、知らねえツてもなアおツかねえや。おいらア現げんにたつた今いま、この二つの眼めで、睨にらんで来たきばかりなんだ。山吹色やまぶきいろで二十五枚まい、滅多めったに見みられるかさじゃアねえて」

「ふふふ、金の字きん。その話はなしをうちつと委くわしく聞きかせねえか」

そういいながら、柘榴口ざくろぐちから、にゅツと首くびを出だしたのは、絵師えしの春重はるしげだった。

「春重はるしげさん、お前まえさんいたのかい」

「いたから顔かおを出だしたんだがの。大分話だいぶんわが面白おもしろそうじゃねえか」

春重はるしげは、もう一度どニヤリと笑わらった。

四

「ふふふ、金の字、なんで急に唾のように黙り込んだ。話して聞かせねえな。どうせおめえの腹が痛む訳でもあるめえしよ」

柘榴口から流しへ出て来た春重の様子には、いつも通りの、妙な粘りツ気が絡みつ
いていて、傘屋の金蔵の心持を、ぞつとする程暗くさせずにはおかなかった。

「てえした面白え話でもねえからよ」

「なに面白くねえことがあるもんか。二十五両といやア、おいらのような貧乏人は、まごまごすると、生涯お目にやぶら下がない大金だぜ。そいつをいかさまだかさ
かさまだかにつるさげて、物にしたと聞いちやア、志道軒の講釈じゃねえが、嘘に
も先を聞かねえじやいらねえからの。——相手が橘屋の若旦那だつたてえな、ほ
んまかい」

「おめえさん、それを聞いてどうしようツてんだ」

顔をしかめて、春重を見守つたのは、金蔵に兄イと呼ばれた左官の長吉であつ
た。

「どうもしやアしねえがの。そいつがほんまなら、おいらもちつとばかり、若旦那に借

りてえと思つてよ」

「若旦那に借りるツて」

「まずのう。だが安心しなよ。おいらの借りようツてな、二十五兩の三十兩のという、大それた訳のものじゃねえ。ほんの二分か一兩が関の山だ。それも種や仕かけで取るようなけちなこたアしやアしねえ。真証間違いなしの、立派な品物を持つてつて、若旦那の喜ぶ顔を見ながら、拝借に及ぼうツてんだ」

「そいつア駄目だ」

「なんだつて」

「駄目ツてことよ。橘屋の若旦那は、たとえお大名から拝領の鎧兜も持つてツたつて、金ア貸しちやアくれめえよ。——あの人の欲しい物ア、日本中にたつたひとつ、笠森おせん的情より外にや、ありやアしねツてこつた」

「だから、そのおせんの、身から分けた物を、おいらア買つてもらいに行こうツてえのよ」

「身から分けた物。——」

「そうだ。他の者が望んだら、百兩でも譲れる品じゃねえんだが、相手がおせんに首ツたけの若旦那だから、まず一兩がとこで辛抱してやろうと思つてゐるんだ」

分よ。この混じりツけのねえおせんつめの爪が、たつた小判一枚こばんまいとなりや、若旦那わかだんなが猫ねこのように飛びつくなア、磨とぎたての鏡かがみでおのが面つらを見るより、はつきりしてるぜ」
春重はるしげのまわりには、いつか、ぐるりと裸はだかの人垣ひとがきが出来できていた。

五

「千の字。おめえ、いい腕うでなつたの」

「ふふふ」

「笑いごつちやねえぜ。二十五両りようたア、大束おおたばに儲もうけたじやねえか」

「どこで、そいつを聞きいた」

「壁かべに耳みみありよ。さつき、通とおりがかりに飛び込こんだ神田かんだの湯屋ゆやで、傘屋かさやの金蔵きんぞうとかいう奴やつが、てめえのことにように、自慢じまんらしく、みんなに話はなして聞きかせてたんだ」

「あいつ、もうそんな余計よけいなことを喋しゃべりやがったかい」

「喋しゃべつたの、喋しゃべらねえの段だんじやねえや。紙屋かみやの若旦那わかだんなをまるめ込こんで。――」

下総武蔵しもふさむさしの国境くにぎかいだという、両国橋りようごくばしのまん中で、ぼんやり橋桁はしげたにもたれたま

ま、薄汚い婆さんが一匹五文で売っている、放し亀の首の動きを見詰めていた千吉は、通りがかりの細川の厩中、間竹五郎に、ぽんと背中をたたかれて、立て続けに聞かされたのが、柳湯で、金蔵がしやべったという、橘屋の一件であつた。

が、もう一度竹五郎が、鼻の頭を引ツこすつて、ニヤリと笑つたその刹那、向うから来かつた、八丁堀の与力井上藤吉の用を聞いている鬼七を認めた千吉は、素速く相手を眼で制した。

「叱ッ。いけねえ。行つちめえねえ」

「合点だ」

するりと抜けるようにして、竹五郎が行つてしまふと、はやくも鬼七は、千吉の眼の前
に迫つていた。

「千吉。おめえ、こんなところで、何をうろうろしてるんだ」

「へえ。きようは親父の、墓詣りにめえりやした。その帰りがけでござんして。……」

「墓詣り」

「へえ」

「いつツから、そんな心がけになつたんだ」

「どうか御勘弁を」

「勘弁はいいが、——丁度いい所でおめえに遭った。ちつとばかり訊きてえことがあるから、つきあつてくんねえ」

「へえ」

「びくびくすることアありやしねえ。こいつあこつちから頼むんだから、安心してついて来ねえ」

鬼七と呼ばれてはいるが、名前とはまったく違った、すつきりとした男前の、結いたての鬘を川風に吹かせた格好は、如何にも颯爽としていた。

折柄の上潮に、漫々たる秋の水をたたえた隅田川は、眼のゆく限り、遠く筑波山の麓まで続くかと思われるまでに澄渡つて、綾瀬から千住を指して遡る真帆方帆が、黙々と千鳥のように川幅を縫つていた。

その絵巻を展げた川筋の景色を、見るともなく横目で見ながら、千吉と鬼七は肩をならべて、静かに橋の上を浅草御門の方へと歩みを運んだ。

「千吉、おめえ、おせんのところへは出かけたろうの」

「どういたしやして。妹にや、三年この方、てんで会やアいたしません」

「ふふふ。つまらねえ隠し立ては止めねえか。いまもいった通り、おいらアおめえを、洗い立てるッてんじやねえ。こつちの用で訊きてえことがあるんだ。悪いようにやしねえか、はつきり聞かしてくんねえ」

「どんな御用で。……」

「おせんのとこへ、菊之丞が毎晩通うッて噂を聞き込んだんだが、そいつをおめえは知ってるだろうの」

こう訊きながら、鬼七の眼は異様に光った。

六

鬼七の問は、まったく千吉には思いがけないことであつた。——子供の時分から好きでこそあれ、嫌いではない菊之丞を、おせんがどれ程思い詰めているかは、いわずと知れているものの、今では江戸一番の女形といわれている菊之丞が、自分からおせんの許へ、それも毎晩通つて来ようなどとは、どこから出た噂であろう。岡焼半分の悪刷にしても、あんまり話が食い違い過ぎると、千吉は思わず鬼七の顔を見返した。

「何^なんで、そんな不審^{ふしん}そうな顔^{かお}をするんだ」

「何^なんでと仰^{おつ}しやいますが、あんまり親^{おやかた}方^{かた}のお聞^ききなさることが、解^げせねえもんでござんすから。……」

「おいらの訊^きくことが解^げせねえツて。——何^{なに}が解^げせねえんだ」

「浜^{はまむらや}村^{むら}屋^やは、おせんのところへなんざ、命^{いのち}を懸^かけて頼^{たの}んだつて、通^{かよ}つちやくれませんや」

「おめえ、まだ隠^{かく}してるな」

「どういたしやして、嘘^{うそ}も隠^{かく}しもありやアしません。みんなほんまのことを申^{もうし}上げて居^おりやすんで。……」

「千吉^{きち}」

「へ」

「おめえ、二三日^{にちまえ}前^{まえ}に行^いつた時^{とき}、おせんが誰^{だれ}と話^{はなし}をしてえたか、そいつをいつて見^みねえ」
「話^{はなし}でげすつて」

「そうだ。おせん一人^{ひとり}じやなかつたろう。たしか相^あ手^てがいたはずだ」

「お袋^{ふくろ}が、隣^{となり}座^ざ敷^{しき}にいた外^{ほか}にや、これぞといつて、人^{ひと}らしい者^{もの}アいやアいたしません」

「ふふふ、お七^{お七}はいなかつたか」

「お七ッ」

「どうだ、お七の衣装いしやうを着た浜村屋はまむらやが、ちゃアんと一人ひとりいたはずだ。おめえはその眼めで見たじやねえか」

「ありやア親方おやかた。――」

「あれもこれもありやアしねえ。おいらはそいつを訊きいてるんだ」

「人形にんぎようじやござんせんか」

「とぼけちやいけねえ。人間にんげんを人形にんぎようと見違みちがえる程ほど、鬼七おにアまだ耄碌もうろくしちやアイね

えよ。ありやア菊之丞きくのじように違ちがえあるめえ」

「確たしかにそうたア申上もうしあげられねえんで。……」

「おめえ、眼めが上あつたな。判わかつた。――もういいから帰けンな」

「有難ありがとうござんすが、――親方おやかた、あれがもしか浜村屋はまむらやだったら、どうなせえやすんで。

……」

「どうもしやアしねえ」

「どうもしねンなら、何なにも。――」

「聞ききてえか」

「どうか、お聞かせなすつておくんせえやし」

「浜村屋は、役者を止めざアならねえんだ」

「何んでげすツて」

「口が裂けてもいうじやアねえぞ。——南御町奉行の、信濃守様の妹御のお蓮様は、浜村屋の日本一の御最良なんだ」

「ではあの、壱岐様からのお出戻りの。——」

「叱つ。余計なこたアいつちやならねえ」

「へえ」

「さ、帰ンねえ」

「有難うござんす」

千吉は、ふところの小判を気にしながら、ほつとして頭を下げた。
襟に当る秋の陽は狐色に輝いていた。

無理やり、手習いツ子に筆を握らせるようにして、たった二行の文ではあったが、いや応なしに書かされた、ありがたく存じ候かしこの十一文字が気になるままに、一夜をまんじりともしなかつたおせんは、茶の味もいつものようにさわやかでなく、まだ小半時も早い、明けたばかりの日差の中を駕籠に揺られながら、白壁町の春信の許を訪れたのであった。

弟子の藤吉から、おせんが来たとの知らせを聞いた春信は、起き出たばかりで顔も洗つていなかったが、とりあえず画室へ通して、磁器の肌のように澄んだおせんの顔を、じつと見詰めた。

「大そう早い」

「はい。少しばかり思い余つたことがござんして、お智恵を拝借に伺いました」
「智恵を貸せとな。はッはッは。これは面白い。智恵はわたしよりお前の方が多分に持合せているはずだ」

「まアお師匠さん」

「いや、それア冗談だが、いったいどんなことが持上つたといなさるんだ」

「あのう、いつもお話しいたします兄が、ゆうべひよつこり、帰つて来たのでござんす」

「なに、兄にいさんが帰かえつて来きたと」

「はい」

「よく聞きくお前まえの話はなしでは、千吉きちとやらしい兄にいさんは、まる三年ねんも行方ゆくえ知れずになっていたとか。——それがまた、どうして急きゆうに。——」

「面目次第めんぼくしだいもござんせぬが、兄にいさんは、お宝たからが欲しいばかりに、帰かえつて来きたのだと、自分の口くちからいつてでござんす」

「金かねが欲しいとの。したがまさか、お前まえを分限者ぶんげんじやだとは思おもうまいがの」

「兄にいさんは、あたしを困おとにして、よその若旦那わかだんなから、お金かねをお借かり申もうしたのでござんす」
「ほう、何なんとして借かりた」

「いやがるあたしに文ふみを書かせ、その文ふみを、二十五兩りように、買かつておもらい申もうすのだと、引ひツたくるようにして、どこぞへ消え失うせましたが、そのお人ひとは誰だれあろう、通油町とおりあぶらちようの、橘屋たちばなやの徳太郎とくたろうさんという、虫むしずが走るくらい、好すかないお方かたでござんす」

「そんなら千吉きちさんは、橘屋たちばなやの徳さんから、その金かねを借かりて。——」

「はい。今頃いまごろはおおかた、どこぞお大名屋敷だいみょうやしきのお厩うまやで、好すきな勝負しょうぶをしてでござんしょうが、文ふみを御覧ごらんなすつた若旦那わかだんなが、まッことあたしからのお願ねがいとお思おもいなされ

て、大枚のお宝をお貸し下さいましたら、これから先あたしや若旦那から、どのような難題をいわれても、返す言葉がござんせぬ。——お師匠さん。何としたらよいものでござんしょう」

まったく途方に暮れたのであろう。春信の顔を見あげたおせんは、露を含んだ花弁のように潤んで見えた。

「さアてのう」

腕をこまねいて、あごを引いた春信は、暫し己が膝の上を見詰めていたが、やがて徐に首を振った。

「徳さんも、人の心の読めない程馬鹿でもなからう。どのような文句を書いた文か知らないが、その文一本で、まさか二十五両の大金は出すまいよ」

「それでも兄さんは、ただの二字でも三字でも、あたしの書いた文さえ持つて行けば、お金は右から左とのことでござんした」

「そりや、いつのことだの」

「ゆうべでござんす」

おせんがもう一度、顔を上げた時であつた。突然障子の外から、藤吉の声が低く

聞きこえた。

「おせんさん、大たいへん変なことができましたぜ。浜はま村屋むらやの太夫たゆうが、急きゆう病びようだつてこつた」
おせんは「はッ」と胸むねが詰つままつて、直すぐには口くちが听きけなかつた。

夢ゆめ

一

子ね、丑うし、寅とら、卯う、辰たつ、巳み、——と、客きやくのない上あがりかまちに腰こしをかけて、独ひとり十二支しじゆんを順しゆんに指折ゆびおり数かずえていた、仮名床かなどこの亭主ていしゆ伝吉でんきちは、いきなり、息いきがつまるくらい荒あらッぽく、拳固げんこで背せ中なかをどやしつけられた。

「痛いたッ。——だ、だれだ」

「だれだじゃねえや、てえへんなことがおつ始はじまつたんだ。子丑寅ねうしとらもなんにもあつたもんじゃねえ。あしたッから、うちの小屋こやは開あかねえかも知しれねえぜ」

火事場の纏持のように、息せき切つて駆け込んで来たのは、同じ町内に住む市村座の木戸番長兵衛であつた。

伝吉はぎよつとして、もう一度長兵衛の顔を見直した。

「な、なにがあつたんだ」

「なにがも、なにがあるもんじゃねえ、まかり間違や、てえした騒ぎになろうツてんだ。おめえンとこだつて、芝居のこぼれを拾つてる家業なら、万更かかり合のねえこともなからう。こけが秋刀魚の勘定でもしてやしめえし、指なんぞ折つてる時じやありやアしねえぜ」

「いつてえ、どうしたツてんだ、長さん」

「おめえ、まだ判らねえのか」

「聞かねえことにや判らねえや」

「なんて血のめぐりが悪く出来てるんだ。——浜村屋の太夫が、舞台で踊つてたまま倒れちやつたんだ」

「何んだツてそいつアおめえ、本当かい」

「おれにや、嘘と坊主の頭アいえねえよ。——飯にもおんなじ芝居の者が、こんなことを、

ありもしねえのにいつて見ねえ。それこそ簀巻にして、隅田川のまん中へおツ放り込まれらアな」

「長さん」

「ええびつくりするじやねえか。急にそんな大きな声なんざ、出さねえでくんねえ」

「何をいつてるんだ。これがおめえ、こそこそ話にしてられるかい。おいらア誰が好きだといつて、浜村屋の太夫くれえ、好きな役者衆はねえんだよ。芸がよくつて愛嬌があつて、おまけに自慢氣なんざ薬にしたくもねえツてお人だ。——どこが悪くツて、

どう倒れたんだか、さ、そこをおいらに、委しく話して聞かしてくんねえ」

どやしつけられた、背中の痛さもけろりと忘れて、伝吉は、元結が輪から抜けて足もとへ散らばつたのさえ氣付かずに夢中で長兵衛の方へ膝をすり寄せた。

「丁度二番目の、所作事の幕に近え時分だと思ひねえ。知つての通りこの狂言は、

三五郎さんの頼朝に、羽左衛門さんの梶原、それに太夫は鶯娘で出るといふ、豊前さんの浄瑠璃としつくり合つた、今度の芝居の呼び物だらうじやねえか。はねに近くなつたつて、お客は唯の一人だつて、立とうなんて料簡の者アねえやな。舞台ははずむ、お客はそろつて一寸でも先へ首を出そうとする。いわば紙一重の隙もねえツてとこだ

つた。どうしたはずみか、太夫の踊つてた足が、躓いたようによろよろつとしたかと思うと、あツという間もなく、舞台へまともに突ツ俯しちまったんだ。——客席からは浜村屋ツという声が、石を投げるように聞こえて来るかと思うと、御簾の泣く声、喚く声、そいつが忽ち渦巻になつて、わッわッといつてゐるうちに、道具方が氣を利かして幕を引いたんだが、そりやおめえ、ここでおれが話をしているようなもんじゃアねえ、芝居中がひっくり返るような大騒ぎだ。——そのうちに頭取が駆けつける、弟子達が集まるで、倒れた太夫を、鷺娘の衣装のまま楽屋へかつぎ込んだが、まだおめえ、宗庵先生のお許しが出ねえから、太夫は楽屋に寝かしたまま、家へも帰れねえんだ」

「よし、お花、おいらに羽織を出してくんねえ」
伝吉は突然こういつて立上った。

二

「お前さん、どこへ行くんだよ。真ッ昼間ッからお見世を空けて出て行つたんじゃ、お客

やくさま
様に申訳がないじやないか。太夫さんとこへお見舞に行くなら、日が暮れてから

にしとくれよ。——ようッてば」

下剃一人をおいて出られたのでは、家業に障ると思つたのであろう。一張羅の羽織を、波々筆筒から出して来たお花は、亭主の伝吉の袖をおさえて、無理にも引止めようと顔を覗き込んだ。

が、伝吉は、いきなり吐きだすようにけんのみを食わせた。

「馬鹿野郎。何をいつてやがるんだ。亭主のすることに、女なんぞが口を出すこたアねえから黙つて引ッ込んでろ。外のことならともかく、太夫が急病だツてのを、そのまにしといたんじや、世間の奴等になんていわれると思うんだ。仮名床の伝吉の奴ア、ふだん浜村屋が好きだの蜂の頭だのと、口幅ツてえことをいつてやがるくせに、なんてざまなんだ。手間が惜しさに見舞にも行かねえしみツたれ野郎だ、とそれこそ口をそろえて悪くいわれるなア、加賀様の門よりもよく判つてるぜ。——つまらねえ理屈アいわねえで、速く羽織を着せねえかい。こうなつたり一刻だつて、待てしばしはねえんだ」

お花の手から羽織を引ッたくつた伝吉は、背筋が二寸も曲がつたなりに引ッかけると、もう一度お花の手を振りもぎつて、喧嘩犬のように、夢中で見世を飛び出した。

「待ちねえ、伝さん」

長兵衛は背後から声をかけた。

「何んの用だ」

「用じやアねえが、おかみさんもああいうンだから、晩にしたらどうだ。どうせいま行つたつて、会えるもんでもねえンだから。――」

「ふん、おめえまで、余計なことはおいてくんねえ。おいらの足でおいらが歩いてくんだ。どこへ行こうが勝手じやねえか」

「ほう、大まかに出やアがったな。話をしたなアおれなんだぜ。行くんなら、せめておれの髻だけでもあたツてツてくんねえ」

「髻は帰つて来てからだ」

「帰つて来てからじや、間に合わねえよ」

「間に合わなかつたら、どこいでも行つて、やつてもらつて来るがいいやな。――ええもう面倒臭え、四の五のいつてるうちに、日が暮れちまわア」

前つぼの固い草履の先で砂を蹴つて、一目散に駆け出した伝吉は、提灯屋の角まで来ると、ふと立停つて小首を傾げた。

「待てよ。こいつア市村座へ行くより先に、もつと大事などところがあるぜ。——そうだ。まだおせんちゃん知らねえかもしれねえ。こんな時に人情を見せてやるのが、江戸ッ子の腹の見せどころだ。よし、ひとつ駕籠をはずんで、谷中まで突ッ走つてやろう」
 おお、うなず 大きく領いた伝吉は、折から通り合せた辻駕籠を呼び止めて、笠森稲荷の境内までだと、酒手をはずんで乗り込んだ。

「急いでくんねえよ」

「ようがす」

「急病 人の知らせに行くんだからの」

「合点だ」

返事は如何にも調子がよかつたが、肝腎の駕籠は、一向突ッ走つてはくれなかつた。
 「ちえッ。吉原だといやア、豪勢飛びやアがるくせに、谷中の病人の知らせだと聞いて、馬鹿にしてやがるんだらう。伝吉アただの床屋じやねえんだぜ。当時江戸で名高え笠森おせん、襟を剃るなアおいらより外にや、広い江戸中に二人たねえんだ」
 伝吉が駕籠の中で鼻の頭を引ッこすつてのひとり啖呵も、駕籠屋には少しの効き目もないらしく、駕籠の歩みは、依然として緩やかだった。

三

床屋の伝吉が、笠森の境内へ着いたその時分、春信の住居で、菊之丞の急病を聞いたおせんは無我夢中でおのが家の敷居を跨いでいた。

「お母さん」

「おやおまえ、どうしたというの、何かお見世にあつたのかい」

今ごろ帰つて来ようとは、夢にも考えていなかったお岸は、慌しく駆け込んで来たおせんの姿を見ると、まず、怪我でもしたのではないかと、穴のあく程じつと見詰めながら、静かに肩へ手をかけたが、いつもと様子の違つたおせんは、母の手を振り払うようにして、そのまま畳ざわりも荒く、おのが居間へ駆け込んで行った。

「どうおしだよ、おせん」

「お母さん、あたしや、どうしよう」

「まアおまえ。……」

「吉ちゃん、——あの菊之丞さんが、急病との事でござんす」

「なんとえ。太夫さんが急病とえ。——」

「あい。——あたしやもう、生きてる空がござんせぬ」

「何をいいだえ。そんな気の弱いことでどうするものか。人の口は、どうにでもいえるもの。急病といったところが、どこまで本当のことかわかったものではあるまいし。

……」

「いえいえ、嘘でも夢でもござんせぬ。あたしやたしかに、この耳で聞いて来ました。これから直ぐに市村座の楽屋へお見舞に行つて来とうござんす。お母さん、そのお七の衣装を脱がせておくんなさいまし」

「えッ、これをおまえ」

「吉ちゃん、去年の芝居が済んだ時、黙つて届けておくんなすつたお七の衣装、あたしに着ろとの謎でござんしょう」

「それでもこれは。——」

「お母さん」

おせんは、部屋へやの隅すみに立たてかけてある人形にんぎょうの傍そばへ、自分じぶんから歩あゆみ寄よると、いきなり帯おびに手てをかけて、まるで芝居しばいの衣装いしやう着つけがするように、如何いかにも無造作むぞうさに衣装いしやうを脱ぬが

せ始め^{はじ}めた。

「お止^よし」

「いいえ、もう何^なんにもいわないでおくんなさい。あたしやお七とおんなじ心^{こころ}で、太夫^{たゆう}に会^あいに行^ゆきとうござんす」

ばらりと解^といたお七の帯^{おび}には、夜毎^{よごと}に焚^たきこめた伽羅^{きやら}の香^{かお}りが悲^{かな}しく籠^{こも}つて、静^{しず}かに部屋^への中^{なか}を流^{なが}れそめた。

「ああ。――」

おせんはその帯^{おび}を、ずツと胸^{むね}に抱^だきしめた。

「おせんや」

お岸^{きし}は優^{やさ}し眼^めをふせた。

「あい」

「おまえ、一人^{ひとり}で行^きく気^きかえ」

「あい」

衣装^{いしやう}を脱^ぬがせて、襦袢^{じゆばん}を脱^ぬがせて、屏風^{びやうぶ}のかげへ這入^{はい}ったおせんは、素速^{すばや}くおのが着物^{きもの}と着換^{きか}えた。と、この時格^{ときこう}子戸^{しど}の外^{そと}から降^ふつて湧^わいたように、男^{おとこ}の声^{こえ}が大大^{おお}きく聞^{きこ}え

た。

「おせんさん、仮名床の伝吉でござんす。浜村屋の太夫さんが、急病と聞いて、何より先にお知らせしてえと、駕籠を飛ばしてやつてめえりやした。笠森様においでがねえんでこつちへ廻つて来やした始末。ちつとも速く、葺屋町へ行つとくンなせえやし」
 「親方、その駕籠を、待たせといておくんなさい」
 「合点でげす」

おせんの声は、いつになく甲高かつた。

四

ひとめ人目を避けるために、わざと蘆巻を深く垂れた医者駕籠に乗せて、男衆と弟子のふたり二人だけが付添つたまま、菊之丞の不随の体は、その日の午近くに、石町の住居に運ばれて行つた。

が、たださえ人氣の頂点にある菊之丞が、舞台で倒れたとの噂は、忽ち人から人へ伝えられて、今は江戸の隅々まで、知らぬはこけの骨頂とさえいわれるまでにな

つていた。他目からは、どう見ても医者の見舞としか想われなかった駕籠の周囲は、いつの間にやら五人十人の男女で、百万遍のように取囲んで、追えば追う程、その数は増して来るばかりであつた。

「ちよいとお前さん、何んだつてあんなお医者の駕籠に、くつついて歩いているのさ」

「なんだ神田の、明神様の石の鳥居じゃないが、お前さんもきがなさ過ぎるよ。ありやアただのお医者様の駕籠じゃないよ」

「だつてお辰つあん、どう見たつて。……」

「叱ッ、静かにおしなね。あんな中にや、浜村屋の太夫さんが乗ってるんだよ」

「浜村屋の太夫さん。——」

「そうさ。きのう舞台で倒れたまま、今が今まで、楽屋で寝てえたんじやないか。それをお前さん、どうでも家へ帰りたいと駄々をこねて、とうとうあんな塩梅式に、お医者と見せて帰る途中だつてことさ」

「おやまあ、そんならそこを退いとくれよ」

「なぜ」

「あたしや駕籠の傍へ行つて、せめて太夫さんに、一言でもお見舞がいたいんだから。」

……」

「何をいうのさ。太夫は大病人なんだよ。ちつとだッて騒いだりしちやア、体障らアね。一緒について行くなアいいが、こッから先へは出ちやならねえよ」

「いいから退いとくれッたら」

「おや痛い、抓らなくツてもいいじゃないか」

「退かないからさ」

「おや、また抓つたね」

髪結のお辰と、豆腐屋の娘のお亀とが、いいのいけないのと争っているうちに、駕籠は更に多くの人数に取巻かれながら、芳町通りを左へ、おやじ橋を渡つて、牛の歩みよりもゆるやかに進んでいた。

菊之丞の駕籠を一町ばかり隔てて、あたかも葬式でも送るように、悵然と首を垂れたまま、一足毎に重い歩みが続けていたのは、市村座の座元羽左衛門をはじめ、坂東彦三郎、尾上菊五郎、嵐三五郎、それに元服したばかりの尾上松助などの一行であつた。

いずれも編笠で深く顔を隠したまま、眼をしばたたくのみで、互に一言も発しなかつ

だが、急に何か思いだしたのであろう。羽左衛門は、寂しく眉をひそめた。

「松助さん」

「はい」

「お前さんは、折角だが、ここから帰る方がいいようだの」

「なぜでございます」

「不吉なことをいうようだが、浜村屋さんはひよつとすると、あのままいけなくなるかも知れないからの」

「ええ滅相な。左様なことがおますかいな」

「そういつて眼をみはったのは嵐三五郎であつた。」

「いや、わたしとて、太夫に元のようになつてもらいたいののは山々だが、今までの太夫の様子では、どうも難かしからうと思われる。縁起でもないことだが、ゆうべわたしは、上下の歯が一本残らず、脱けてしまった夢を見ました。情ないが、所詮太夫は助かるまい」

羽左衛門はそういつて、寂しそうに眉をひそめた。

五

夢から夢を辿りながら、更に夢の世界をさ迷ひ続けていた菊之丞は、ふと、夏の軒端に
 つり残されていた風鈴の音に、重い眼を開けてあたりを見廻した。

医者の玄庵をはじめ、妻のおむら、座元の羽左衛門、三五郎、彦三郎、その他の人
 達が、ぐるりと枕許に車座になって、何かひそひそと語り合っている声が、遠い
 くに、できごと
 国の出来事のように聞えていた。

「おお、あなた。――」

最初におむらが、声をかけた。が、菊之丞の心には、声の主が誰であるのか、まだ
 はつきり映らなかつたのであろう。きよろりと一度見廻したきり、再び眼を閉じてしまつ
 た。

玄庵は徐かに手を振った。

「どなたもお静かに。――」

「はい」

急に水を打ったような静けさに還つた部屋の中には、ただ香のかおりが、低く這つてい

るばかりであつた。

玄庵は、夜着の下へ手を入れて、かるく菊之丞の手首を掴んだまま首をひねった。

「先生、如何でございます」

「脈に力が出たようじゃが。……」

「それはまア、うれしゅうござんす」

「だが御安心は御無用じゃ。いつ何時変化があるか判らぬからのう」

「はい」

「お見舞の方々も、次の間にお引取りなすつてはどうじやの、御病人は、出来るだけ安静に、休ませてあげるとよいと思うでの」

「はいはい」と羽左衛門が大きくうなずいた。「如何にも御もつともでございます。——では、ここはおかみさんをお願い申して、次へ下つていることにいたしましょう」

「それがようござる。及ばずながら愚老が看護して居る以上、手落はいたさぬ考えじゃ」
「何分共にお願ひ申上げます」

一同は足音を忍ばせて、襖の開けたてにも気を配りながら、次の間へ出て行つた。
暫し、鉄瓶のたぎる音のみが、部屋のしじまに明るく残された。

「御内儀」
ごないぎ

玄庵の声は、低く重かった。

「はい」

「お気の毒でござるが、太夫はもはや、一時の命じや」

「えッ」

「いや静かに。——ただ今、脈に力が出たようじやと申上げたが、実は他の方々の手前をかねたまでのこと。心臓も、微かに温みを保っているだけのことじや」

「それではもはや」

おむらの、今まで辛抱に辛抱を重ねていた眼からは、玉のような涙が、頬を伝つて溢れ落ちた。

やがて、香煙を揺がせて、恐る恐る襖の間から首を差出したのは、弟子の菊彌だった。

「お客様でございます」

「どなたが」

「谷中のおせん様」
やなか

「えッ、あの笠森の。……」

「はい」

「太夫は御病氣ゆえ、お目にかかれぬと、お断りしておくれ」
するとその刹那、ぱつと眼を開いて菊之丞の、細い声が鋭く聞えた。

「いいよ。いいから、ここへお通し。——」

六

初霜を避けて、昨夜縁に上げられた白菊であろう、下葉から次第に枯れてゆく花の周囲を、静かに舞っている一匹の虻を、猫が頻りに尾を振ってじやれる影が、障子にくつきり映っていた。

その虻の羽音を、聞くとともになしに聞きながら、菊之丞の枕頭に座して、じつと寝顔に見入っていたのは、お七の着付もあでやかなおせんだった。

紫の香煙が、ひともとすなおに立昇って、南向きの座敷は、硝子張の中のよう
に暖かい。

七年目で会った、たった二人の世界。殆んど一夜のうちに生気を失ってしまった菊之

丞ようの、なかば開ひらかれた眼めからは、糸いとのような涙なみだが一筋すじ頬ほを伝つたわつて、枕まくらを濡ぬらしていた。

「おせんちゃん」

菊之丞きくのじようの声こえは、わずかに聞きかれるくらい低ひくかった。

「あい」

「よく来てくれた」

「太夫さん」

「太夫たゆうさんなぞと呼よばずに、やっぱり昔むかしの通とおり、吉きちちゃんと呼よんでおくれな」

「そんなら、吉きちちゃん。——」

「はい」

「あたしや、会あいとうござんした」

「あたしも会あいたかった。——こういつたら、お前まえさんはさだめし、心こころにもないことをい
うと、お想おもいだろうが、決うそして嘘うそでもなけりや、お世辞せじでもない。——知しつての通とおり、あ
たしやどうやら人にん気きも出でて、世間様せけんさまからなんのかのと、いわれているけれど、心こころはやつ
ぱり十年ねん前まえもおなじこと。義理ぎりでもらつた女房にようぼうより、浮気うわきでかこつた女おんなより、心しんか
ら思おもうのはお前まえの身みの上うへ。暑あついにつけ、寒さむいにつけ、切せつない思おもひは、いつも谷中やなかの空そらに通かよ

つてはいたが、今ではお前も人気娘、うつかりあたしが訪ねたら、あらぬ浮名を立てられて、さぞ迷惑でもあらうかと、きようが日まで、辛抱して来ましたのさ」

「勿体ない、太夫さん。——」

「いいえ、勿体ないより、濟まないのはあたしの心。役者家業の憂さ辛さは、どれ程いやだとおもつても、御鼻肩からのお迎えよ。お座敷よといわれれば、三度に一度は出向いて行つて、笑顔のひとつも見せねばならず、そのたび毎に、ああいやだ、こんな家業はきようは止そうか、明日やめようかと思うものの、さて未練は舞台。このまま引いてしまつたら、折角鍛えたおのが芸を、根こそぎ棄てなければならぬ悲しさ。それゆえ、秋の野に鳴く虫にも劣る、はかない月日を過ごして来たが、……おせんちゃん。それもこれも、今はもうきのうの夢と消えるばかり。所詮は会えないものと、あきらめていた矢先、ほんとうによく来てくれた。あたしやこのまま死んでも、思い残すことはない。——」

「もし、吉ちゃん」

「おお」

「しつかりしておくんなさい。羞かしながら、お前がなくてはこの世の中に、誰を思つて生きようやら、おまえ一人を、胸にひそめて来たあたし。あたしに死ねというのなら、た

「た今でも、身代りにもなりましょう。——のう吉ちゃん。たとえ一夜の枕は交さずとも、あたしやおまえの女房だぞえ。これ、もうし吉ちゃん。返事のないのは、不承知かえ」

一膝ずつ乗出したおせんは、頬がすれすれになるまでに、菊之丞の顔を覗き込んだが、やがてその眼は、仏像のようにすわって行つた。

「吉ちゃん。——太夫さん。——」

「お、せ、ん——」

「ああ、もし」

おせんは、次第に唇の褪せて行く菊之丞の顔の上に、涙と共に打ち伏してしまった。隣座敷から、俄に人々の立つ気配がした。

七

二代目瀬川菊之丞の死が報ぜられたのは、その日の暮れ方近くだった。江戸の民衆は、去年の吉原の大火よりも、更に大きな失望の淵に沈んだが、中にも手の中

の珠を奪われたような、悲しみのどん底に落ち込んだのは、菊之丞でなければ夜も日もあけない各大名や旗本屋敷の女中達だった。

殊に、この知らせを受けて、天地が覆えた程の驚愕を覚えたのは、南町奉行本多信濃守の妹お蓮であろう。折から夕餉の膳に対おうとしていたお蓮は、突然手にした箸を取落すと、そのまま狂気したように、ふらふらと立上って、跣足のまま庭先へと駆け降りて行った。

二三人の侍女が、直ぐさまその後を追った。

「もし、お嬢様。お危のうござります」

「何をするのじや。放しや」

「どちらへおいで遊ばします」

「知れたことじや。これから直ぐに、浜村屋の許へまいる」

「これはまあ、滅相なことを仰しやいます」

「何が滅相なことじや、わらわがまいって、浜村屋の病気を癒して取らせるのじや。」

「邪間だてせずと、そこ退きや」

「なりませぬ」

「ええもう、退きやというに、退かぬか」

手荒く突き退けられた一人の侍女は、転びながらも、お蓮の裾を確と押えた。

「お嬢様。お気をお静め遊ばしまして。……」

「いらぬことじや。放せ」

「いいえお放しいたしませぬ。今頃お出まし遊ばしましては、お身分に係りまする。

もしまた、たつてお出まし遊ばしますなら、一応わたくし共から御家老へ、その由お伝え

いたしませねば。……」

「くどいわ。放せというに、放さぬか」

夢中で振り払ったお蓮の片袖は、稲穂のように侍女の手に残つて、惜し気もなく土を蹴つてゆく白臘の足が、夕闇の中にほのかに白かつた。

「もし、お嬢様。——」

池を廻つて、築山の裾を走るお蓮の姿は、狐のように速かつた。

「それ、向うから。——」

「あちらへお廻り遊ばしました」

男気のない奥庭に、次第に数を増した女中達は、お蓮の姿を見失つては一大

事いじと思おもつたのであろう。老おいも若わかきもおしなべて、庭にわの木戸きどへと歩ほを乱みだした。
が、必死ひつしに駆かけ着つけた庭にわの木戸きどには、もはやお蓮れんの姿すがたは見みられなかった。

「お嬢じようさま様。――」

「お待ち遊あそばせ」

しかも、年ねんに一度ども、駆かけたことなどのないお蓮れんは、庭木戸にわきどを出では出でたものの、既すでに脚あしが釣つるまでに疲つかれ果はてて、口くちの中なかで菊之丞きくのじようの名なを呼よびながら、今いまはもはや堪たえられない歩あゆみを、いづくへとのあてもなしに、無理むりから先さきへ先さきへと運はこんでいた。

「――浜村屋はまむらや、待まちや。わらわを置おいて、そなたばかりがどこへ行く。――そりや聞きこえぬぞ。わらわも一緒しよじや。そなたの行ゆきやるところなら、地獄じごくの極はてへなりと、いといはせぬ。連つれて行ゆきや。速はやう連つれて行ゆきや」

二十一こころで坂部さかべ老岐守いきのかみへ嫁よめいで八年ねんめ目に戻もどつて来きた。既すでに三十みの身みではあつたが、十四ころ五はの頃ころから早はやくも本多小町ほんだこまちと謳うたわれたお蓮れんは、まだ漸ようやくく二十四五にしかに見みえず、いづれかといえは妖艶ようえんなたちの、情熱じようねつに燃もえた眼めを据すえて、夕闇ゆうやみの中なかを音おともなく歩あるいてゆく様さまは、ぞつとする程凄ほどずいかつた。

八

いずこの大名旗本の屋敷に、如何なる騒ぎが持上つていようと、それらのことは、まったく別の世界の出来事のように、菊之丞の家は、静かにしめやかであつた。座元をはじめ、あらゆる芝居道の人達はいうまでもなく、鼯鼠の人々、出入のたれかれと、百を越える人数は、仕切りなしに押し寄せて、さしも豪奢を誇る住居も所狭きまでの混雑を見ていたが、しかも菊之丞の冷たいむくろを安置した八畳の間には、妻女のおむらさえないおせんがただ一人、首を垂れたまま、黙然と膝の上を見詰めていた。

ふと、おせんの固く結んだ唇から、低い、微かな声が漏れた。

「吉ちゃん。おかみさんや、ほかの人達にお願いして、あたしがたつた一人、お前の枕許へ残してもらつたのは、十年前の、飯事遊びが、忘れられないからでござんす。——みんなして、近所の飛鳥山へ、お花見に出かけたあの時、いつもの通り、あたしとお前とは夫婦でござんした。幔幕を張りめぐらした、どこぞの御大家の中へ、迷い込

んだあたし達は、それお前も覚えてである。絵にあるような綺麗な、お嬢様に何やかやと御馳走を頂戴した挙句、お化粧直しの幕の隅で、あたしはお前に、お前はあたしに、互にお化粧をしあつて、この子達、もう小十年も経つたなら、きつと惚れ惚れするように美しくなるであらうと、お世辞にほめて頂いた、あの夢のような日のことが、いまだにはつきり眼に残つて……吉ちゃん。あたしや今こそお前に、精根をつくしたお化粧を、してあげとうござんす。——紅白粉は、家を出る時袱紗に包んで持つて来ました。あたしの遣いふるしでござんすが、この紅筆は、お前が王子を越す時に、あたしにおくんなすつた。今では形見。役者衆の、お前のお氣に入るように出来すまいけれど、辛抱しておくんなさい。せめてもの、あたしの心づくしでござんす」

北を枕に、静かに眼を閉じている菊之丞の、女にもみまほしいまでに美しく澄んだ顔は、磁器の肌のように冷たかつた。

白粉刷毛を持つたおせんの手は、名匠が毛描きでもするように、その上を丹念になぞつて行つた。

眼、口、耳。——真白に塗りつぶされたそれらのかたちが、間もなく濡手拭で、おもむろにふき清められると、やがて唇には真紅のべにがさされて、菊之丞の顔は今にも

物をいうかと怪しまれるまでに、生々と蘇った。

おせんは、じつとその顔に見入った。

「吉ちゃん。——もし、吉ちゃん」

次第におせんの声は、高かった。呼べば答えるかと思われる口許は、心なしか、寂しくふるえて見えた。

「——あたしや、これから先も、きつとおまえと一緒に、生きて行くでござんしよう。おまえもどうぞ、魂だけはいつまでも、あたしの傍にいておくんない。あたしや千人万人の人からいい寄られても、死ぬまで動きはいたしませぬ。——もし、吉ちゃん。……」

ぼたりと落ちたおせんの涙は、菊之丞の頬をぬらした。

「これはまア折角お化粧したお顔へ。……」

おせんはもう一度、白粉刷毛を手にとった。と、次の間から聞えて来たのは、妻女のおむらの声だった。

「おせんさん」

「は、はい。——」

「お焼香のお客様がお見えでござんす。よろしかったら、お通し申します」

「はい、どうぞ。――」

あわてて枕まくらもと許ひから引き下さがつたおせんの眼めに、夜叉やしやの如ごとくに映うつつたのは、本多信ほんだしなの
濃守のかみの妹いもうとお蓮れんの剥はげるばかりに厚化粧あつげしやうをした姿すがただった。

おせん （おわり）

青空文庫情報

底本：「大衆文学代表作全集 19 邦枝完二集」河出書房

1955（昭和30）年9月初版発行

1955（昭和30）年11月30日8刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：伊藤時也

校正：松永正敏

2007年4月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おせん

邦枝完二

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>